東関東自動車道（千葉・富津線）
埋蔵文化財調査報告書 8

―― 袖ケ浦市椿古墳群 ――

平成13年 3 月

日 本 道 路 公 団

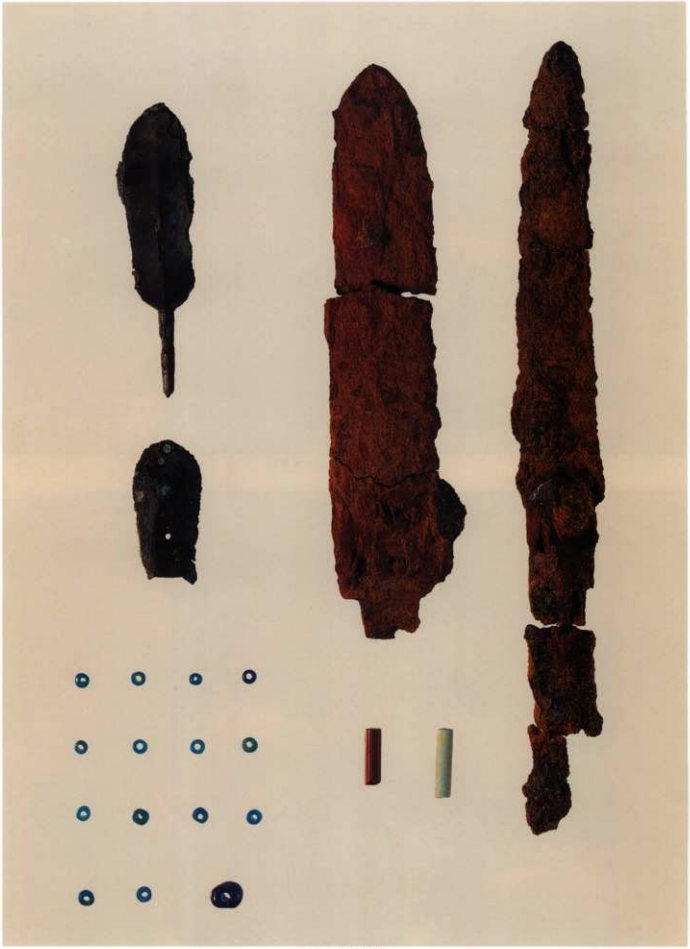
財団法人 千葉県文化財センター

東関東自動車道（千葉・富津線）
埋蔵文化財調査報告書 8

——袖ケ浦市椿古墳群——

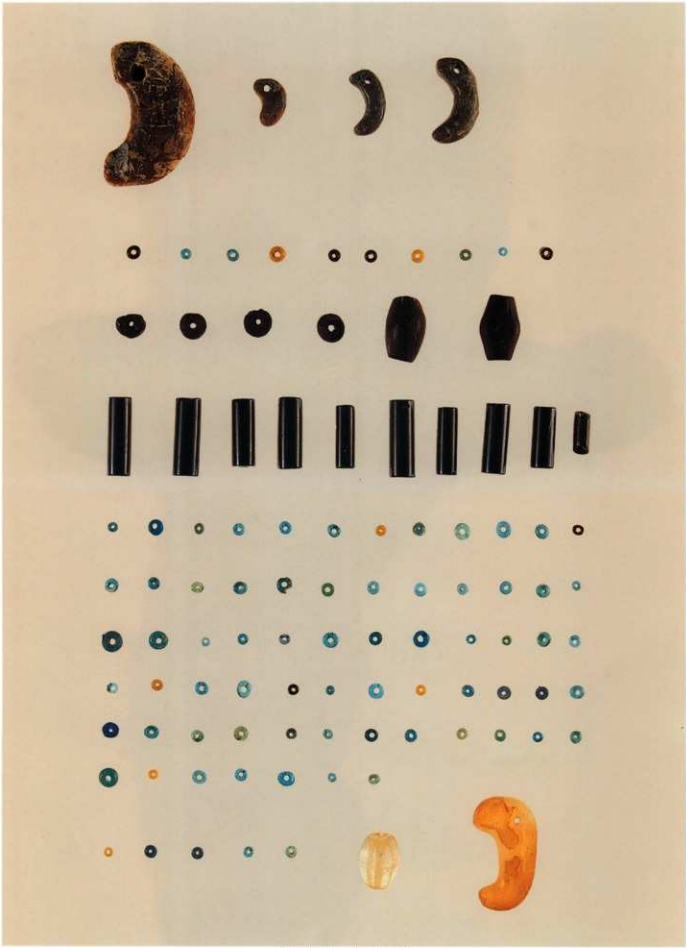
SX-2・3・4・5・6全景

SX-2・3・4・5・6全景

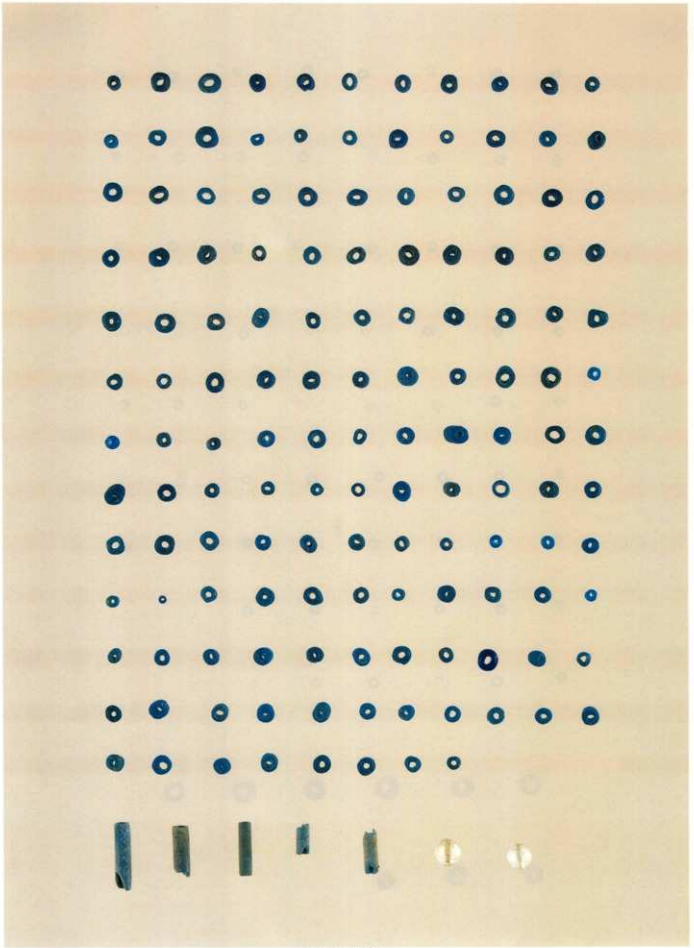


SX-3 出土遺物

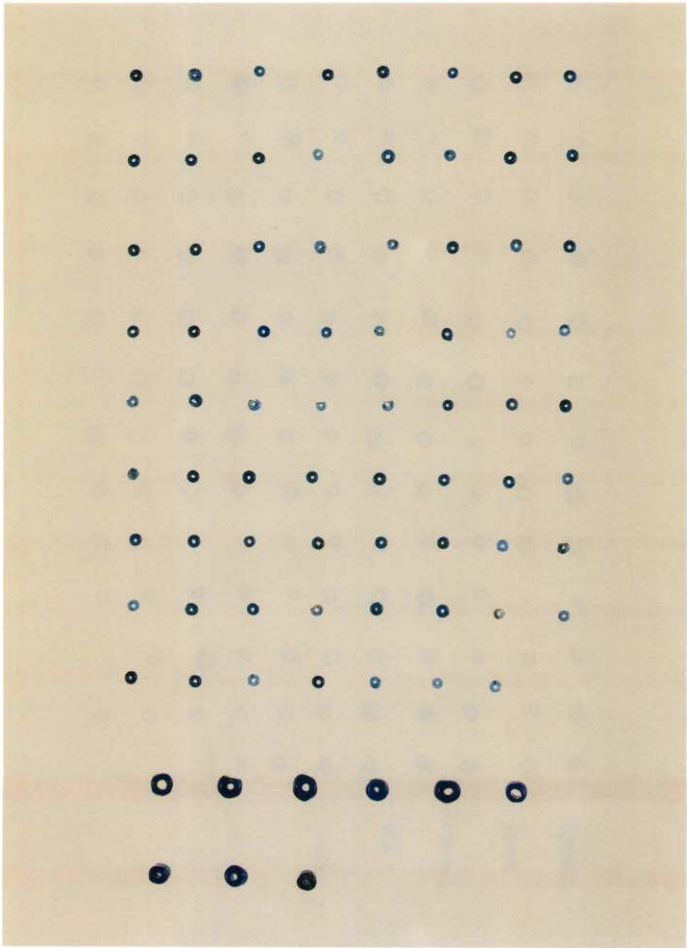
SX-9 出土直刀象嵌



SX-4・5・8出土玉類



SX-7 出土玉類



SX-9・12出土玉類

序　文

財団法人千葉県文化財センターは，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを目的として昭和49年に設立され，以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県文化財センター調査報告第410集として，日本道路公団の東関東自動車道（千葉・富津線）建設事業に伴って実施した袖ケ浦市椿古墳群の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，前期の方墳を初め，前方後円墳や円墳が多数検出されるなど，この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり，この報告書が学術資料として，また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成13年３月31日

財団法人千葉県文化財センター

理事長　中　村　好　成

凡　例

1　本書は，日本道路公団による東関東自動車道（千葉・富津線）建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書の第8集である。

2　本書は，下記の遺跡を収録したものである。

椿古墳群　千葉県袖ケ浦市大鳥居字起越894－1ほか　（遺跡コード481-008）

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，日本道路公団の委託を受け，財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者，実施期間は本文中に記載した。

5　本書は，調査部長沼澤豊及び南部調査事務所長高田博の指導のもとに，副所長小久貫隆史が編集した。
執筆は，小久貫が第1章第1節，第3章1の部分を，研究員高梨友子が第1章第2節，第3章2の部分を担当した。ただし，第2章については共同で執筆を行い，高梨が主に墳丘の構築状況と鉄製品について担当し，小久貫がそのほかの部分を担当した。

6　竪穴住居跡出土の炭化材の樹種同定については，株式会社パレオ・ラボ藤根久・植田弥生氏の協力を得た。

7　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，日本道路公団，千葉県教育庁生涯学習部文化課，袖ケ浦市教育委員会，財団法人君津郡市文化財センター，財団法人千葉市文化財調査協会，安藤道由氏，西原崇浩氏，菊池健一氏，竹内順一氏の御指導，御協力を得た。

8　本書で使用した地図は，下記のとおりである。

第1図　国土地理院発行　1：25,000地形図「木更津」(NI-54-25-4-2)
「上総横田」(NI-54-19-16-4)

第2図　財団法人君津郡市文化財センター作成の図面をもとに作成したものである。

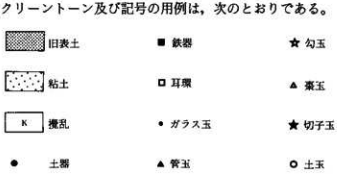
9　周辺地形航空写真は，京葉測量株式会社による平成4年撮影のものを使用した。

10　本書で使用した図面の方位は，すべて座標北である。

11　本書で使用した遺構番号は，原則として調査時の番号を踏襲した。

12　土器実測図の断面については，須恵器は黒塗りとし，それ以外は白抜きとした。

13　挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は，次のとおりである。



本文目次

第1章　はじめに …… 1
　第1節　調査の概要 …… 1
　　1　調査に至る経緯 …… 1
　　2　調査の経過 …… 1
　　3　調査の方法 …… 2
　第2節　遺跡の概要 …… 3
　　1　椿古墳群の位置と概要 …… 3
　　2　椿古墳群周辺の遺跡 …… 5
第2章　遺構と遺物 …… 13
　第1節　古墳と遺物 …… 13
　第2節　竪穴住居跡と遺物 …… 96
　第3節　方形周溝墓と遺物 …… 106
　第4節　土坑と遺物 …… 109
　第5節　その他の遺構と遺物 …… 112
　第6節　遺構外出土遺物 …… 115
第3章　まとめ …… 116
報告書抄録 …… 巻末

挿図目次

第1図　椿古墳群の位置と周辺の遺跡 …… 4
第2図　椿古墳群全体図(1：5,000) …… 6
第3図　椿古墳群遺構配置図（1） …… 10
第4図　椿古墳群遺構配置図（2） …… 11
第5図　椿古墳群遺構配置図（3） …… 12
第6図　SX－1調査前測量図 …… 13
第7図　SX－1平面図 …… 14
第8図　SX－1墳丘断面図 …… 14
第9図　SX－1出土遺物（1） …… 15
第10図　SX－1出土遺物（2） …… 15
第11図　SX－2・3調査前測量図 …… 16
第12図　SX－2平面図 …… 17
第13図　SX－2墳丘断面図 …… 18
第14図　SX－2第1主体部 …… 19
第15図　SX－2第2主体部 …… 19
第16図　SX－2出土遺物 …… 20
第17図　SX－3平面図 …… 21
第18図　SX－3墳丘断面図 …… 22
第19図　SX－3主体部 …… 23
第20図　SX－3主体部遺物出土状況 …… 24
第21図　SX－3出土遺物（1） …… 25
第22図　SX－3出土遺物（2） …… 26
第23図　SX－3出土遺物（3） …… 27
第24図　SK－2 …… 28
第25図　SK－2出土遺物 …… 25
第26図　SX－4・5・6調査前測量図 …… 29

第27図　SX－4平面図 …… 30
第28図　SX－4墳丘断面図 …… 31
第29図　SX－4第1主体部 …… 32
第30図　SX－4第2主体部 …… 33
第31図　SX－4出土遺物（1） …… 34
第32図　SX－4出土遺物（2） …… 35
第33図　SX－4出土遺物（3） …… 36
第34図　SX－5平面図 …… 37
第35図　SX－5墳丘断面図 …… 38
第36図　SX－5主体部 …… 38
第37図　SX－5主体部遺物出土状況 …… 39
第38図　SX－5出土遺物（1） …… 40
第39図　SX－5出土遺物（2） …… 41
第40図　SX－5出土遺物（3） …… 42
第41図　SX－6平面図 …… 43
第42図　SX－6墳丘断面図 …… 44
第43図　SX－6第1主体部 …… 45
第44図　SX－6第2主体部 …… 45
第45図　SX－6第3主体部 …… 46
第46図　SX－6第4主体部 …… 46
第47図　SX－6出土遺物（1） …… 47
第48図　SX－6出土遺物（2） …… 49
第49図　SX－6出土遺物（3） …… 50
第50図　SX－7調査前測量図 …… 51
第51図　SX－7平面図 …… 52
第52図　SX－7墳丘断面図 …… 53
第53図　SX－7主体部 …… 54
第54図　SX－7主体部遺物出土状況 …… 55
第55図　SX－7出土遺物（1） …… 56
第56図　SX－7出土遺物（2） …… 57
第57図　SX－8調査前測量図 …… 58
第58図　SX－8平面図 …… 59
第59図　SX－8墳丘断面図 …… 61
第60図　SX－8第1主体部 …… 63
第61図　SX－8第2主体部 …… 63
第62図　SX－8第1主体部遺物出土状況 …… 64
第63図　SX－8第2主体部遺物出土状況 …… 65
第64図　SX－8出土遺物（1） …… 67
第65図　SX－8出土遺物（2） …… 68
第66図　SX－8出土遺物（3） …… 69
第67図　SX－8出土遺物（4） …… 70
第68図　SX－8出土遺物（5） …… 70
第69図　SX－9調査前測量図 …… 72
第70図　SX－9平面図 …… 73
第71図　SX－9墳丘断面図 …… 74
第72図　SX－9第1主体部 …… 75
第73図　SX－9第2主体部 …… 75
第74図　SX－9第1主体部遺物出土状況 …… 76
第75図　SX－9出土遺物（1） …… 77
第76図　SX－9出土遺物（2） …… 78
第77図　SX－9出土遺物（3） …… 79
第78図　SX－9出土遺物（4） …… 80
第79図　SX－10調査前測量図 …… 81
第80図　SX－10平面図 …… 82
第81図　SX－10墳丘断面図 …… 82
第82図　SX－10第1主体部 …… 83
第83図　SX－10第2主体部（新） …… 83
第84図　SX－10第2主体部（古） …… 84
第85図　SX－10出土遺物（1） …… 85
第86図　SX－10出土遺物（2） …… 85
第87図　SX－11調査前測量図 …… 86
第88図　SX－11平面図 …… 87
第89図　SX－11墳丘断面図 …… 88
第90図　SI－1・2 …… 96
第91図　SI－1・2出土遺物 …… 97
第92図　SI－3と出土遺物 …… 98
第93図　SI－4 …… 99
第94図　SI－5と出土遺物 …… 100
第95図　SI－6 …… 101
第96図　SI－6出土遺物 …… 102
第97図　SI－7と出土遺物 …… 103
第98図　SI－8 …… 104
第99図　SI－8上層遺構 …… 105
第100図　SI－8上層遺構出土遺物 …… 105

第101図　SX－12 ……106
第102図　SX－12主体部 ……107
第103図　SX－12出土遺物 ……107
第104図　SX－13と出土遺物 ……108
第105図　SK－1 ……109
第106図　SX－15 ……110
第107図　SX－15出土遺物 ……111
第108図　SX－14と出土遺物 ……112
第109図　SD－1・2，SF－1と出土遺物 ……114
第110図　遺構外出土遺物……115

表目次

第1表　古墳一覧表 …… 88
第2表　ガラス玉一覧表 …… 89
第3表　金属製品計測表 …… 94
第4表　千葉県内出土鍔縁のみ象嵌を施す直刀…121

図版目次

巻頭図版1　SX－2・3・4・5・6全景
巻頭図版2　SX－3出土遺物
巻頭図版3　SX－9出土直刀象嵌
巻頭図版4　SX－4・5・8出土玉類
巻頭図版5　SX－7出土玉類
巻頭図版6　SX－9・12出土玉類
図版1　椿古墳群周辺航空写真（平成4年撮影）
図版2　SX－1調査前全景・SX－1南東裾部遺物出土状況・SX－1表土除去後全景
図版3　SX－2調査前全景・SX－2完掘後全景・SX－2完掘後全景
図版4　SX－2第2主体部遺物出土状況・SX－2第2主体部遺物出土状況・SX－2第2主体部完掘状況
図版5　SX－3調査前全景・SX－3西側裾部遺物出土状況・SX－3東側裾部遺物出土状況
図版6　SX－3遺物出土状況・SX－3遺物出土状況・SX－3完掘後全景
図版7　SX－3主体部遺物出土状況・SX－3主体部遺物出土状況・SX－3主体部完掘状況
図版8　SK－1遺物出土状況・SK－2検出状況・SK－2完掘状況
図版9　SX－4調査前全景・SX－4表土除去後全景・SX－4調査状況
図版10　SX－4墳頂部遺物出土状況・SX－4完掘後全景・SX－4完掘後全景
図版11　SX－4第1主体部遺物出土状況・SX－4第2主体部土層断面・SX－4第2主体部完掘状況
図版12　SX－5調査前全景全景・SX－5北側裾部遺物出土状況・SX－5完掘後全景
図版13　SX－5南西側裾部遺物出土状況・SX－5主体部遺物出土状況・SX－5主体部完掘状況
図版14　SX－6調査前全景・SX－6完掘後全景・SX－6第1主体部遺物出土状況
図版15　SX－6第2主体部遺物出土状況・SX－6第3主体部遺物出土状況・SX－6第4主体

部遺物出土状況
図版16　SX－7調査前全景・SX－7主体部遺物出土状況
図版17　SX－8調査前全景・SX－8後円部墳頂遺物出土状況・SX－8後円部墳頂遺物出土状況
図版18　SX－8第1主体部遺物出土状況・SX－8第1主体部遺物出土状況
図版19　SX－8第2主体部棺部完掘状況・SX－8表土除去後全景・SX－8主体部完掘後全景
図版20　SX－8地割線(盛土中)・SX－8地割線(地山)・SX－8地山整形状況
図版21　SX－9調査前全景・SX－9完掘後全景・SX－9第1主体部遺物出土状況
図版22　SX－9第1主体部棺部完掘状況・SX－9第2主体部遺物出土状況・SX－9墳丘南側テラス
図版23　SX－10調査前全景・SX－10表土除去後全景・SX－10主体部検出状況
図版24　SX－11調査前全景・SX－11表土除去後全景・SX－12調査前全景
図版25　SX－12主体部木棺痕跡・SX－12主体部ガラス玉出土状況・SX－12主体部完掘状況
図版26　SI－1・2全景・SI－1・2遺物出土状況・SI－3全景
図版27　SI－4全景・SI－5全景・SI－6全景
図版28　SI－7全景・SI－7土層断面・SI－8全景
図版29　SX－15遺物出土状況・SX－14全景・SD－1・SF－1全景
図版30　出土土器（1）
図版31　出土土器（2）
図版32　出土土器（3）
図版33　出土土器（4）
図版34　出土土器（5）
図版35　出土土器（6）
図版36　出土金属器（1）
図版37　出土金属器（2）
図版38　出土金属器（3）
図版39　出土金属器（4）
図版40　出土金属器（5）
図版41　出土金属器（6）

第1章　はじめに

第1節　調査の概要

1　調査に至る経緯

日本道路公団では，千葉市から富津市に至る高速自動車道である東関東自動車道館山線を計画した。この路線のうち，千葉市から市原市，袖ケ浦市を経て木更津市に至る約35kmの区間が事業化され，千葉・富津線として建設が行われることとなった。

用地内には数多くの遺跡が所在することから，その取扱いについて，千葉県教育委員会と日本道路公団との慎重な協議が重ねられた。その結果，現状保存が困難な部分については，やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることで協議が整い，財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

調査は，平成元年1月から開始され，平成6年6月に全ての発掘が終了した。平成5年度から各遺跡ごとの本格的な整理作業が開始され，順次報告書を刊行し，現在に至っている。

2　調査の経過

椿古墳群の発掘調査は平成2年度に開始されたが，発掘に先立ち調査区内において古墳と考えられる11か所に，北から順にSX－1～11の番号を付した。そしてSX－2の本調査を行った。平成3年度は，当初SX－3～6・8～11の調査を予定していたが，途中変更があり，最終的にSX－1・3～6・9～11の本調査と古墳の墳丘下及び周辺の確認・本調査を行った。平成4年度にはSX－7・8の本調査を行って，現地での調査は終了した。

本格的な整理作業は，平成11年度に実施し，報告書の刊行を平成12年度に行った。発掘調査及び整理作業に関わる各年度の担当職員及び作業内容は以下のとおりである。

（1）発掘調査

平成2年度

平成3年1月7日～3月28日

内容：古墳1基（SX－2）の本調査

担当者：技師　高梨俊夫

平成3年度

平成3年4月1日～平成4年3月27日

内容：① 古墳8基（SX－1・3～6・9～11）の本調査

② 上層確認調査　2,000㎡のうち200㎡，本調査　1,200㎡

平成2年度調査済のSX－2の墳丘下を含む古墳の墳丘下及び古墳周辺の確認調査を行った結果，竪穴住居跡や方形周溝墓・土坑が検出されたので，1,200㎡について，本調査を行った。

③ 下層確認調査　1,000㎡のうち40㎡

調査対象範囲のうち，ローム層が遺存している範囲のみを対象として，確認調査を行った

結果，遺構・遺物は検出されなかった。

担当者：研究員　村木正記　主任技師　田島新　技師　高梨俊夫・半澤幹雄・糸原清

平成4年度

平成4年4月1日～7月31日

内容：古墳2基（SX－7・8）の本調査

SX－7の南側から，弥生時代の土坑が検出された。

担当者：主任技師　川島利道　技師　高梨俊夫

（2）整理作業

平成11年度

内容：接合・復元から実測・トレース・原稿執筆まで

担当者：副所長　小久貫隆史　室長　麻生正信　研究員　鈴木良征　技師　高梨友子・黒沢崇

平成12年度

内容：全体の編集・報告書刊行

担当者：副所長　小久貫隆史

3　調査の方法

東関東自動車道（千葉・富津線）建設に関わる発掘調査では，遺跡の数も多く，遺跡の面積も大きいため，それぞれの遺跡毎に国土地理院の公共座標に基づいたグリッドの設定を行っている。

椿古墳群の調査範囲を覆う20m×20m方眼のグリッドは，南北方向を北から1，2，3…，東西方向を西からA，B，C…とした。さらに，このグリッドを2m×2mの小グリッドに100分割し，北から00～90，西から00～09とした。したがって，各小グリッドは9M－67，12G－51のように呼称した。

古墳の調査では，まず発掘調査に先立って，縮尺100分の1で等高線20cm間隔の墳丘測量図を作成した。そして，墳丘の表土部分の除去を行い，再び同一縮尺で等高線12.5cm間隔の墳丘測量図を作成した。その後，墳丘の調査を行った。墳丘は直交する土層観察用ベルトで4分割して，盛土堆積状況図の作成を行った。なおSX－8は，調査前から前方後円墳と判明していたため，予想される主軸方位とこれに直交する2本の土層観察用ベルトで6分割して，盛土堆積状況図の作成を行った。墳丘中の遺物の取り上げは，原則として全点ドットで行ったが，一部区毎に一括して取り上げている。埋葬施設は，主軸に直交するように4分割して調査を行い，縮尺10分の1の図面を作成した。また，副葬品等の出土状況については，必要に応じて細かい縮尺で図面を作成した。

埋葬施設の調査終了後，土層観察用ベルトは残したままで順次，墳丘を掘り下げ，墳丘内の遺構・遺物の検出に努めた。墳丘下の旧表土面に調査が及んだ段階で，旧表土の遺存範囲と地山整形の状況を記録した。

竪穴住居跡等の古墳以外の遺構では，半截あるいは土層観察用ベルトを設定して調査を行った。遺物の取り上げはその大半が，区毎に一括して行っている。

なお，遺構の名称については，本報告書では原則として調査時のものを踏襲している。記号の略号については以下の通りである。

SX：墳墓（うち1～11は古墳，12・13は方形周溝墓）・その他，SI：竪穴住居跡，SK：土坑，SD：溝状遺構，SF：道路状遺構

第２節　遺跡の概要

１　椿古墳群の位置と概要（第１・２図）

椿古墳群は，小櫃川中流域左岸，木更津市椿から袖ケ浦市大鳥居のかけての標高約45mの独立丘陵上に位置する。

小櫃川は，清澄山に源を発し，房総丘陵を複雑に解析しながら北流する。そして遺跡の東方付近で流れを大きく西へ変え，下流に広大な沖積平野を形成しながら金田海岸付近で東京湾に達する，県内有数の河川である。

この小櫃川を挟んで，遺跡から南側には上総丘陵が展開し，痩せ尾根が樹枝状に入り組む複雑な地形を呈している。この丘陵上には，椿古墳群をはじめ多数の遺跡が所在している。

一方北側は下総台地の最南端にあたり，平坦な台地上にはやはり大規模な遺跡が多数確認されている。

そしてこれらの間には，沖積平野が幅約３kmに亘って形成されており，蛇行する小櫃川に伴って発達した自然堤防上などに遺跡が確認されている。

椿古墳群は，以前40基ほどの古墳群として知られていたが（アミ掛け・黒塗り），財団法人君津郡市文化財センターおよび当センターによる本調査（黒塗り）やその後の分布調査などを経て，現在では４基の前方後円墳を含む65基の古墳群として認識されており，それぞれ１～65の番号が付されている。なおこれら以外にも，古墳の可能性の高い部分（白抜き）が約30か所あり，仮にこれらが全て古墳であるとすると，総計100基にものぼる古墳を擁していることになる。

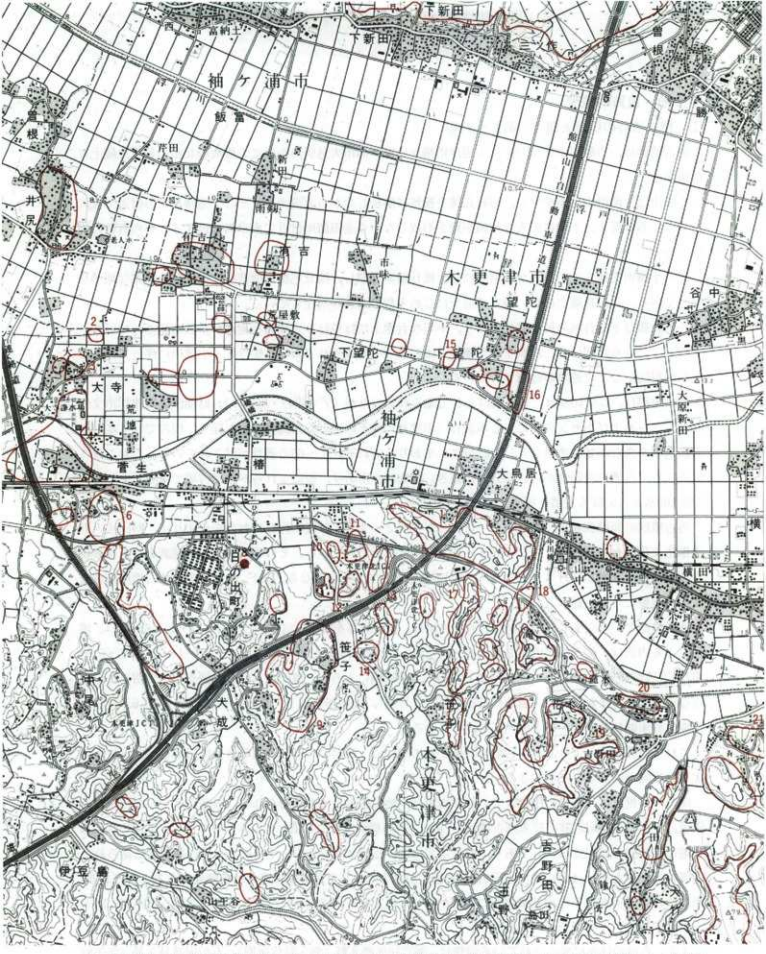
椿古墳群の発掘調査は，当センターによって平成２・３・４年度に行われたのを皮切りに，財団法人君津郡市文化財センターによって平成９・10・11年度に行われている。その報告書も，確認調査分を含め現在までに延べ８冊が刊行されており[1]，今回報告する分で９冊目となる。以下，これまでの椿古墳群の調査成果の概要について述べる。

椿古墳群で，現在までに調査が行われた古墳は，合計36基を数える（１～11・27～31・46～65号墳）。墳形による内訳は，前方後円墳が２基（８・27号墳），円墳が14基（１・２・４～７・９～11・28～31・64号墳），方墳が20基（３・46～63・65号墳）である。時期別にみると，僅かなトレンチ調査のみで明らかにならないものも含まれるが，古墳時代前期１基（３号墳），後期16基（１・２・４～11・27～31・63号墳），後期～終末期19基（46～62・64・65号墳）となる。

これまでの調査により，まず古墳の時期と形に関して，前期の方墳と後期の前方後円墳を除き，以下のような傾向を捉えることができる。

即ち，６世紀代～７世紀初頭までの後期古墳は，地山削出しにより造られる，周溝をほとんど持たない円墳，そして７世紀以降の終末期古墳は，「コ」字状の周溝を持つ方墳，というものである。またこれらは立地にも特徴を見出せるようであり，前者は北に伸びる痩せ尾根上の，平坦面もしくは緩斜面に造られ，後者は南向きあるいは南に伸びる尾根上の，緩い斜面上を外した急斜面に造られる傾向にあるようである。後期には小櫃川を見下ろす丘陵北側に古墳が累々と築造され，終末期にはそれを避けるように南側に向かって展開していった様子が窺える。

また，古墳のほかに検出されている遺構は，竪穴住居跡８軒（弥生時代後期），方形周溝墓２基（弥生時代後期），土坑16基（古墳時代前期１基，後期１基，奈良・平安時代２基，不明12基）火葬墓２基（平安時代）などがある。弥生時代には集落が営まれていたものの，古墳時代，特に後期以降になると，この丘陵



1．椿古墳群　2．大寺遺跡№1地点　3．大寺廃寺　4．菅生遺跡　5．祝崎古墳群　6．高千穂古墳群　7．犬成古墳群　8．順礼御道古墳　9．笹子城跡　10．山崎古墳群　11．中台A遺跡　12．中台B遺跡　13．四留作第一古墳群　14．四留作第二古墳群　15．大寺遺跡№9地点　16．芝野遺跡　17．馬場作遺跡　18．大作古墳群　19．滝ノ口向台遺跡　20．鬼塚古墳群　21．打越北上原古墳群

第1図　椿古墳群の位置と周辺の遺跡

上は大々的に古墳や土坑墓，火葬墓などの造られる墓地と化し，少なくとも平安時代まで連綿と利用されていたことが明らかになった。またこのほかに，特に明確な遺構としては検出されないものの，古墳の墳丘裾部周辺から，杯類を主とする平安時代の土師器が出土しており，古墳に対する何らかの祭祀が後代に行われていたことが指摘できる。

2　椿古墳群周辺の遺跡（第1図）

前述のように椿古墳群（1）周辺には多くの遺跡が所在し，開発に伴う発掘調査が財団法人君津郡市文化財センターや当センターによって行われている。ここでは椿古墳群の立地する丘陵上の遺跡と，周辺の沖積平野に所在する，発掘調査の行われた遺跡について概観する。

旧石器時代・縄文時代は，この周辺ではあまり目立った生活痕跡は確認されてない。滝ノ口向台遺跡(19)[2]で，旧石器が少量出土したほか，縄文時代早期の撚糸文土器が比較的まとまって出土した。また，標高20m前後の低位段丘上に立地する中台A遺跡（11）[3]では，縄文時代前期とみられる住居跡が検出されている。このほかには土器片が少量出土するのみ，という状況である。

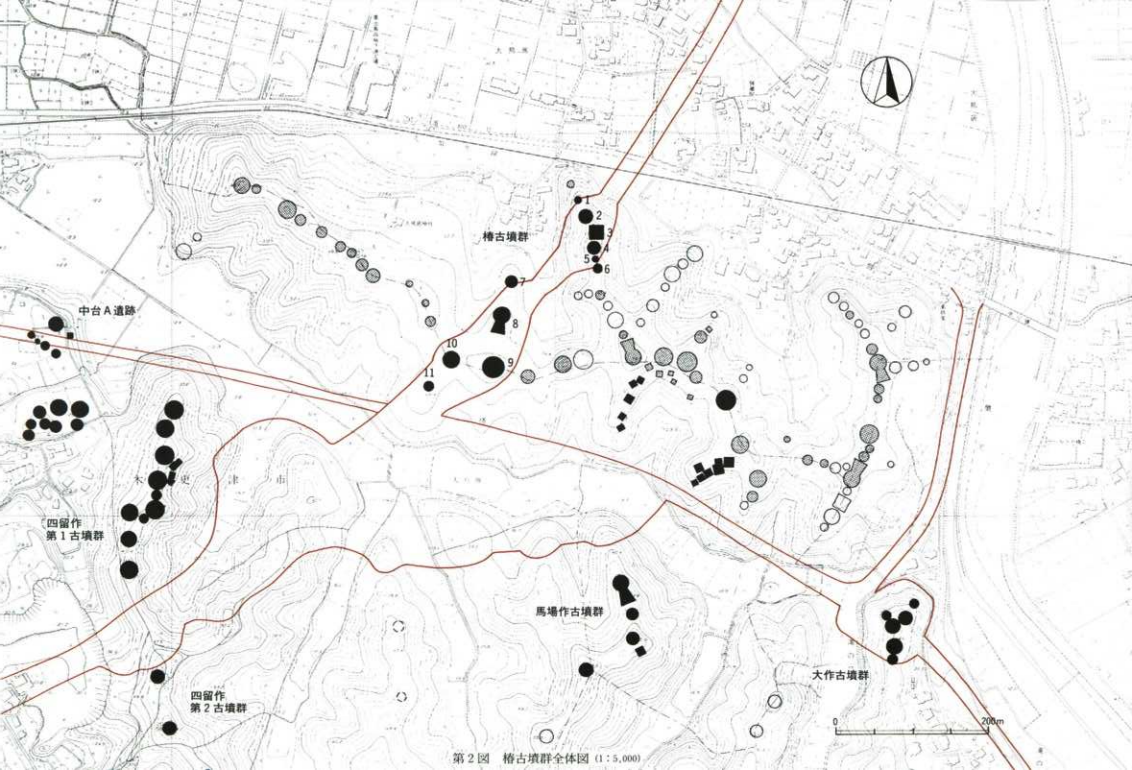
遺跡の周辺の土地が主体的に利用されはじめるのは，主に弥生時代中期後半～後期以降といえる。前述の滝ノ口向台遺跡（19），中台A遺跡（11）のほか，中台B遺跡（12）[4]や，祝崎古墳群（5）[5]・高千穂古墳群（6）[6]・犬成古墳群（7）[7]・四留作第一古墳群（13）[8]・大作古墳群（18）[9]の墳丘下などで，弥生時代後期を主体とした住居跡が検出されている。また，自然堤防上に立地する芝野遺跡（16）[10]でも，当該期の住居跡のほか，水田跡が検出されている。また，菅生遺跡（4）[11]でも水田跡が検出されている。墓域としては，中台A遺跡（11）で中期の方形周溝墓が検出されている。

古墳時代になると，丘陵上には古墳が集中的に築造されるようになる。出現期・前期古墳は散発的にみられ，中期と考えられる古墳も散見されるが，数の上で圧倒的となるのは後期以降である。

椿古墳群（1）にも前期の方墳が含まれているが，年代がそれとほぼ同時期か若干遡ると考えられ注目されている古墳は，滝ノ口向台遺跡（19）中にみられる。調査が行われた5基のうち，9号墳（001）は，西辺の中央部に陸橋部を有する方墳とみられ，周溝部分から東海系土器や銅鏃などが出土した。また，調査区外で測量調査のみ行われた8号墳は前方後方墳とみられ，追って行われたレーダー探査結果により全長53m～55m，後方部長約40m，前方部長約15mと推測される県内最大の前方後方墳であることがほぼ確実となった[12]。

中期の築造と考えられる古墳は，明確な時期が明らかにならないものも含まれるが，祝崎古墳群（5）で1基または2基，四留作第一古墳群（13）で2基，四留作第二古墳群（14）[13]で1基または2基，大作古墳群（18）で2基ほどみられるようである。四留作第二古墳群（14）では鉄剣が出土し木棺部から多量の朱が検出された古墳が，また大作古墳群（18）では矛を出土した古墳がある。

後期古墳は，数基～数十基単位の群を成して主に丘陵上に築造されている。椿古墳群（1）の大部分の古墳も，後期に属するものである。後期の古墳群は小櫃川とその沖積平野を眼下に一望するように，北へ伸びる痩せ尾根上の先端部に集中し，ほとんど平坦面のない稜線を一列に埋め尽くしている状況である。それらは便宜上尾根筋毎に別の古墳群としての名称が与えられているが，椿古墳群（1）と似た状況を呈するものが多い。それらには，高千穂古墳群（6），犬成古墳群（7），順礼海道古墳（8）[14]，山崎古墳群（10）[15]，四留作第一古墳群（13），四留作第二古墳群（14），馬場作古墳群（17）[16]，大作古墳群（18），鬼塚古墳群（20）[17]，打越北上原古墳群（21）[18]などがあり，中台A遺跡（11）でも墳丘が完全に失われた古墳



第2図　椿古墳群全体図 (1:5,000)

群が調査されている。後期古墳は，周溝をほとんど持たずに地山を削り出すことによって整形される円墳が多く，中には１～数基の前方後円墳もみられる。前方後円墳を擁する古墳群は，椿古墳群（１）のほか，高千穂古墳群（６），馬場作古墳群（17），打越北上原古墳群（21）などがある。

古墳時代後期～終末期にかけての古墳は，主に椿古墳群（１）中などでみられる。それらは小櫃川に背を向けるように，主に南に伸びる尾根の斜面部に「コ」字状の周溝を伴って構築されている。

古墳は以上のように，主に丘陵上に大規模に築造されたが，自然堤防上にも造られているものがあり，芝野遺跡（16）では後期とみられる円墳が１基検出されている。

また，椿古墳群のほか中台Ａ遺跡（11），大作古墳群（18），滝ノ口向台遺跡（19），などで，周溝や墳丘のみられない土坑墓も検出されている。これらは遺物をあまり伴わず，不明な部分も多いが，概ね古墳時代後期以降とみられるものが多いようである。

なお，数km隔てた小櫃川下流域には，馬来田国造の系譜に繋がる首長墓と考えられる中期～後期の前方後円墳を主体とした祇園・長須賀古墳群がある。椿古墳群およびその周辺の古墳群との関係を考える上で重要である。

古墳時代に営まれたとみられる住居跡は，中台Ａ遺跡（11）で中期のものが検出されたほかは周辺の丘陵上ではほとんど確認されていない。小櫃川を隔てた芝野遺跡（15）では後期の住居跡と水田跡が検出され，また，大寺遺跡№１地点（２）[19]や菅生遺跡（４）でも，住居跡は検出されていないものの古墳時代後期の水田跡が確認されている。対岸の自然堤防上を中心に当該時期の集落が存在する可能性も考えられる。

古代も連綿とこの周辺の土地が利用され，重要な位置を保っていたようである。小櫃川左岸には創建年代が７世紀後半と推定されている大寺廃寺（３）[20]があり，馬来田国造の氏寺的な性格が考えられている。そして望陀郡衙の推定地として芝野遺跡（16）周辺が挙げられている。また，この付近の菅生遺跡（４）・大寺遺跡№９地点（15）[21]などでは奈良・平安時代の水田跡も検出されている。墓域としては，椿古墳群（１）中で終末期古墳に継続する火葬墓や土坑墓が少数ではあるが検出されている。このほか滝ノ口向台遺跡（19）では平安時代の土師器が出土しており，古墳に対して何らかの祭祀行為が行われていたとする指摘がある。

中世は，芝野遺跡（16）で13世紀から14世紀前半まで，屋敷地が形成されていたことが明らかになっているほか，菅生遺跡で12世紀～15世紀の在地領主の居館跡や上級名主層の屋敷地の所在が推定されている。また，丘陵上では，当センターの調査によって15世紀後半～16世紀前葉を中心とした遺物が多量に出土した笹子城跡（９）[22]がある。笹子城は真里谷武田氏との関係が指摘され，後代の軍記に２度の落城が伝えられる城である。調査では人為的に埋め戻された多数の堀のほか，中世の遺構面が複数確認され，当時大規模に造成の行われたことが窺われる。

注１　中能　隆　1998『椿古墳群』財団法人君津郡市文化財センター
　　中能　隆　1998「椿古墳群」『木更津市内遺跡発掘調査報告書』木更津市教育委員会
　　安藤道由　1999『椿古墳群II』財団法人君津郡市文化財センター
　　安藤道由　1999『椿古墳群III』財団法人君津郡市文化財センター
　　安藤道由　1999「椿古墳群」『平成10年度　木更津市内発掘調査報告書』木更津市教育委員会
　　安藤道由　1999「椿古墳群」『平成10年度　袖ケ浦市内発掘調査報告書』袖ケ浦市教育委員会

萱野章宏　2000「椿古墳群」『平成11年度　木更津市内発掘調査報告書』木更津市教育委員会

萱野章宏　2000「椿古墳群（2）」『平成11年度　千葉県袖ケ浦市　市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』袖ケ浦市教育委員会

なお，今回報告するSX－1～11は，『千葉県埋蔵文化財分布地図（4）－君津・夷隅・安房地区（改訂版）－』における椿古墳群第1号墳～第11号墳にそれぞれ対応している。

2　小高春雄ほか　1993「滝ノ口向台遺跡・大作古墳群」財団法人千葉県文化財センター

3　福田　誠　1993『中台A遺跡』財団法人千葉県文化財センター

山本哲也　1995「中台A遺跡」『君津郡市文化財センター年報№12－平成5年度－』財団法人君津郡市文化財センター

斉藤礼司郎　1996「中台A遺跡」『君津郡市文化財センター年報№13－平成6年度－』財団法人君津郡市文化財センター

財団法人君津郡市文化財センター　1999「中台A遺跡」『君津郡市文化財センター年報№16－平成9年度－』

4　山本哲也　1995「中台B遺跡」『君津郡市文化財センター年報№12－平成5年度－』財団法人君津郡市文化財センター

5　小沢　洋　1984『祝崎古墳群／戸崎城山遺跡発掘調査報告書』財団法人君津郡市文化財センター

土屋治雄・城田義友　1998『一般国道409号（木更津工区）埋蔵文化財調査報告書－木更津市菅生遺跡・祝崎古墳群－』財団法人千葉県文化財センター

6　戸倉茂行ほか　1986『高千穂古墳群』君津郡市考古資料刊行会

7　財団法人君津郡市文化財センター　1997「犬成古墳群」『君津郡市文化財センター年報№14－平成7年度－』

8　豊巻幸正　1988『四留作第1古墳群第1号墳』財団法人君津郡市文化財センター

西原崇浩　1999『笹子遺跡群発掘調査報告書Ⅰ　四留作第一古墳群第12・13号墳　四留作遺跡（古墳下層遺構）』木更津市教育委員会

財団法人君津郡市文化財センター　1999「笹子遺跡群　四留作第一古墳群」『君津郡市文化財センター年報№16－平成9年度－』

9　注2に同じ

10　笹生　衛　2001『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書7－木更津市芝野遺跡－』財団法人千葉県文化財センター

11　乙益重隆ほか　1978『木更津市菅生第2遺跡』菅生遺跡調査会

乙益重隆ほか　1980『上総菅生遺跡』木更津市教育委員会・菅生遺跡調査会

土屋治雄・城田義友　1998『一般国道409号（木更津工区）埋蔵文化財調査報告書－木更津市菅生遺跡・祝崎古墳群－』財団法人千葉県文化財センター

伊藤伸久　1998「菅生遺跡」『木更津市内遺跡発掘調査報告書』木更津市教育委員会

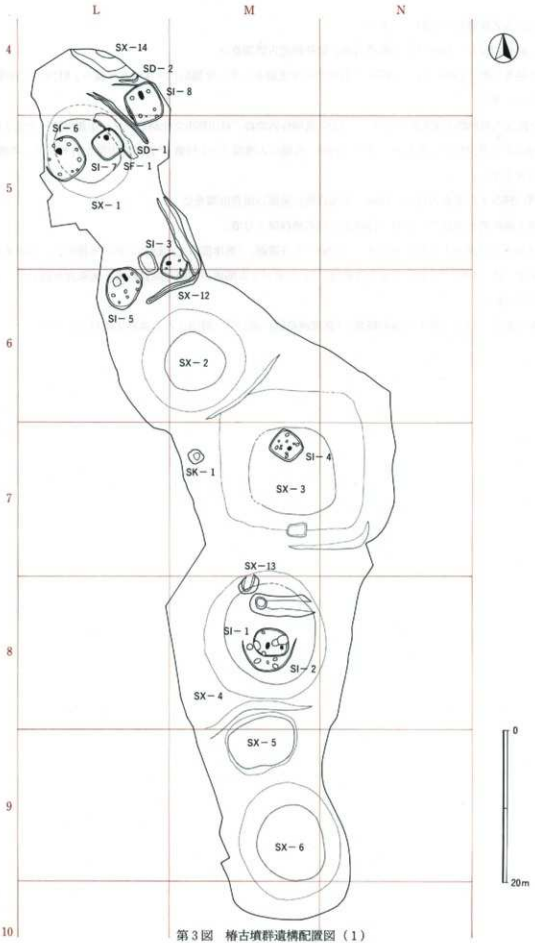
財団法人君津郡市文化財センター　1999「菅生遺跡」『君津郡市文化財センター年報№16－平成9年度－』

12　萩原恭一・白井久美子・亀井宏行　2000「君津市浅間神社古墳測量調査報告」『千葉県史研究』第8号

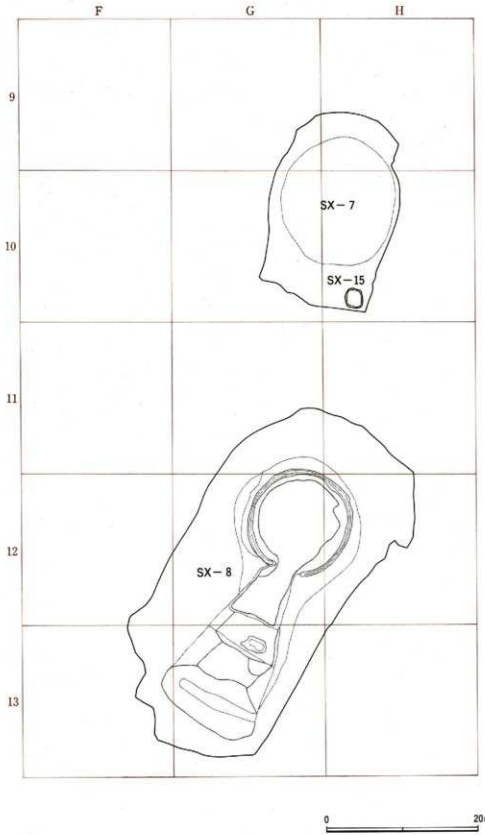
13　富山嗣史　1992『四留作第2古墳群第1号墳　四留作第1号塚・第2号塚』財団法人君津郡市文化財センター

斉藤礼司郎　1996「四留作第2古墳群・四留作塚群」『君津郡市文化財センター年報№13－平成6年度－』

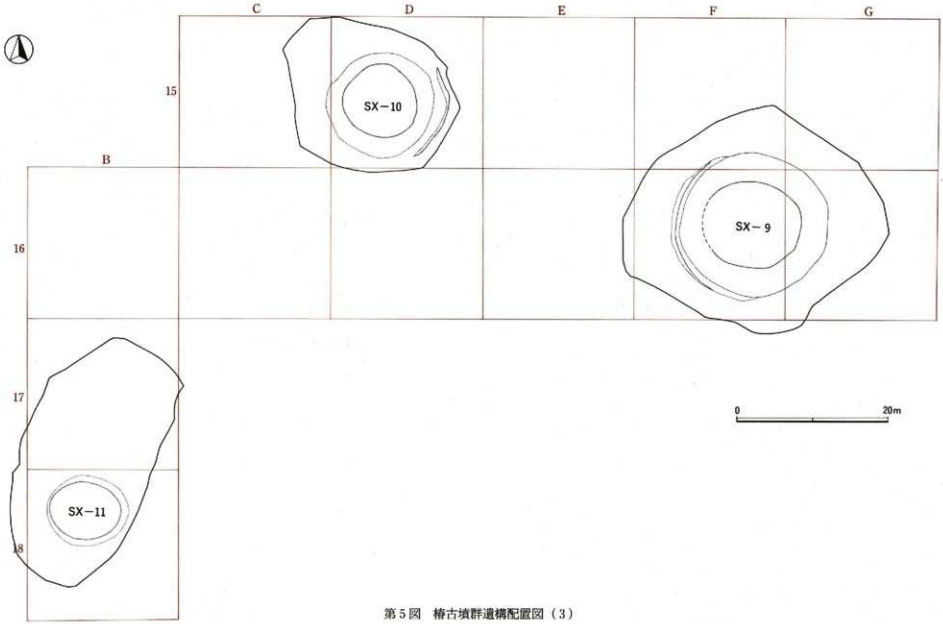
財団法人君津郡市文化財センター
14　三浦和信ほか　1980『順礼海道古墳』順礼海道古墳調査団
15　斉藤礼司郎　1996「山崎古墳群」『君津郡市文化財センター年報№13－平成6年度－』財団法人君津郡市文化財センター
16　財団法人君津郡市文化財センター　1997「馬場作古墳群」『君津郡市文化財センター年報№14－平成7年度－』財団法人君津郡市文化財センター　1998「馬場作古墳群2・4号墳」『君津郡市文化財センター年報№15－平成8年度－』
17　溝口勝美・岸本雅人ほか　1980『鬼塚古墳』鬼塚古墳発掘調査会
18　袖ケ浦町教育委員会　1984『打越北上原古墳群第3号墳』
19　財団法人君津郡市文化財センター　1998「大寺遺跡」『君津郡市文化財センター年報№15－平成8年度－』
20　糸原　清　1997「上総国上総大寺廃寺」『シンポジウム関東の初期寺院資料集』関東古瓦研究会
21　注19に同じ
22　柴田龍司　1993「笹子城跡の概要」『研究連絡誌』第37号　財団法人千葉県文化財センター



第３図　椿古墳群遺構配置図（１）



第4図　椿古墳群遺構配置図（2）



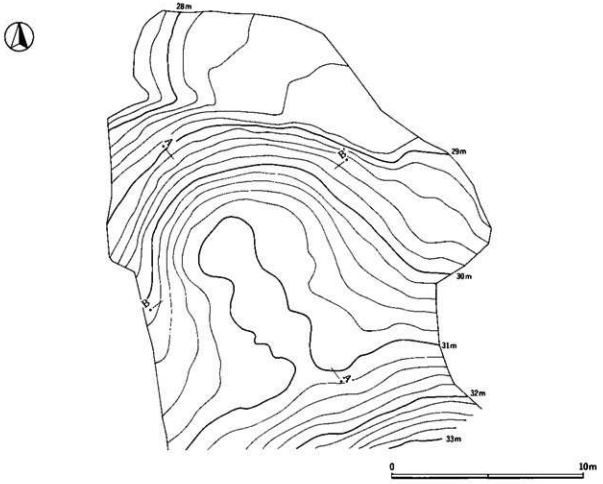
第５図　椿古墳群遺構配置図（３）

第２章　遺構と遺物

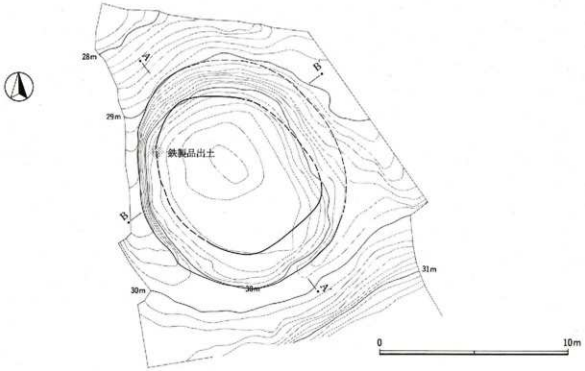
第１節　古墳と遺物

１．SX－１（第６～10図）

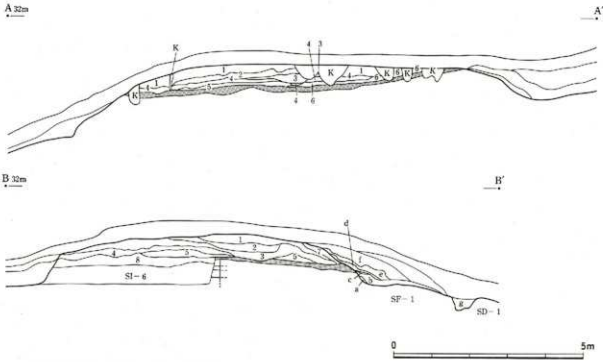
調査区の北端，４Ｌ～５Ｌグリッドにかけて位置する。墳丘裾部東側がSD－１・SF－１などの後世の遺構に一部切られているが，やや楕円形状を呈する円墳である。規模は長径12.3m，復元短径10.8mを測る。周溝は検出されていない。地山を削り出して整形し，旧表土上に暗褐色土や黒褐色土などの盛土をしている。墳丘下にはSI－６があるが，盛土はこの遺構の窪みも埋めながらされている。また，現状では南端部には盛土は見られず，旧表土直上に表土層が堆積している状況である。埋葬施設は検出されていないが，盛土中から副葬品とみられる鉄鏃が２点出土していることからすると，現表土層が堆積する前に墳丘および主体部が削平を受けている可能性が高い。現状で盛土の高さは約0.6m，墳丘裾部から現状の盛土上面までの高さは約1.9mを測る。



第６図　SX－１調査前測量図



第7図　SX－1平面図



1　暗褐色土：径2cm～3cmのロームブロックを多く含む。
2　暗褐色土：径2cm～3cmのロームブロックを多く含む。黒色土粒を若干含む。
3　暗褐色土：径2cm～3cmのロームブロックをやや多く含む。
4　黒褐色土：ローム粒を若干含む。
5　暗褐色土：径1cmのロームブロックを若干含む。黒色土粒をやや多く含む。
6　褐色土：径2cm～3cmのロームブロックをやや多く含む。黒色土粒を若干含む。
7　暗褐色土：ローム粒をやや多く含む。
8　暗褐色土：黒色土を多く、ローム粒を少し含む。

a　暗褐色土：ローム粒を多く含む。
b　黒褐色土：径3cm程のロームブロック、褐色土ブロックを含む。
c　褐色土：ローム粒を多く含む。
d　褐色土：径2cm～3cmのロームブロックを若干含む。
e　暗褐色土：ローム粒を若干含む。
f　暗褐色土：径2cm～3cmのロームブロックを多く含む。
g　黒色土：ローム粒を含み、軟質。

＊a～fはSF－1覆土、gはSD－1覆土

第8図　SX－1墳丘断面図

遺物には墳丘の南東裾部周辺からまとまって出土した須恵器と墳丘北西側の５Ｌ－23グリッドの盛土中から検出された鉄鏃とがある。

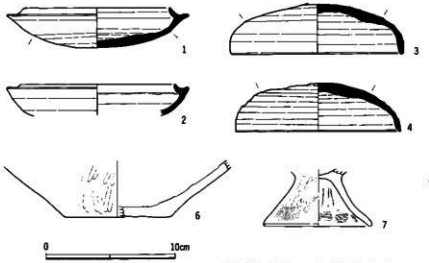
１・２は杯身である。１はほぼ完形で，体部下半は回転ヘラケズリされる。胎土には１㎜前後の長石粒を含む。焼成は良好である。暗灰黄色を呈する。２は20％ほどの破片である。胎土には１㎜～２㎜の長石粒を多く含む。色調は１と異なり，灰白色を呈する。

３・４は完形の杯蓋で，いずれも天井部は回転ヘラケズリされる。３には１㎜～２㎜の長石粒を少量含む。灰白色を呈する。４には１㎜～３㎜の長石粒を多く含む。色調は３と異なり，暗灰黄色を呈する。

５は長脚の高杯で，接合しない破片を図上で復元したものである。脚部は中位の２条の沈線によって上下に区画され，上下に長方形の透孔を有するが，透孔の数は不明である。胎土には１㎜～３㎜の長石粒を含む。色調は２・３と共通し，灰白色を呈する。

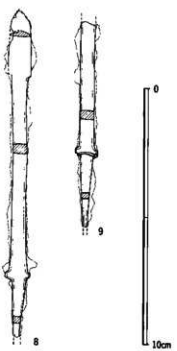
６は土師器壺の底部破片で，外面はヘラミガキされる。

７は土師器高杯の脚部で，内外面ともハケ調整後ヘラナデされる。

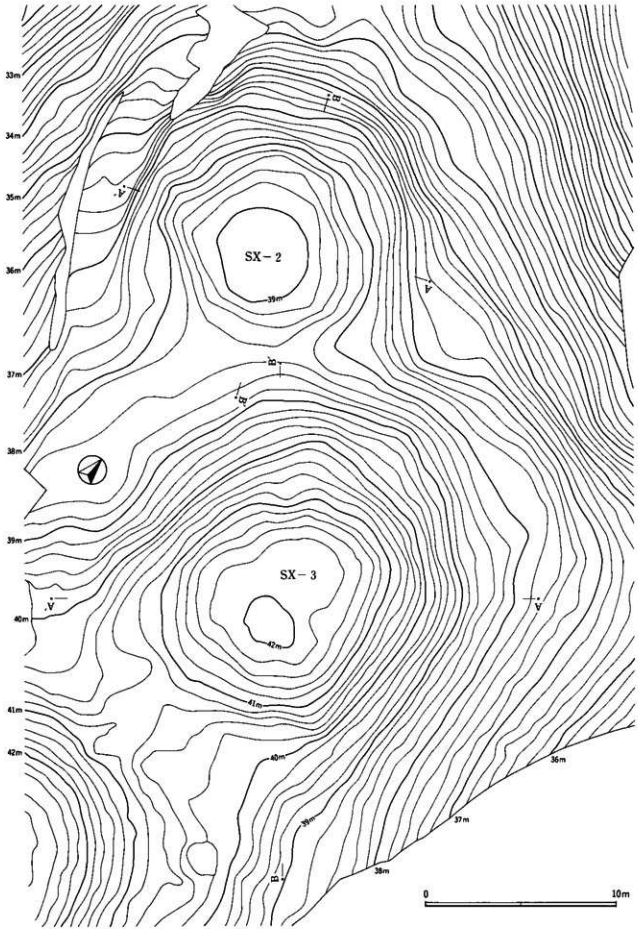


第９図　SX－１出土遺物（１）

８・９は鉄鏃である。８は長頸鏃で，鏃身部は一部を欠損し錆もひどいが，断面形は片丸とみられる。両関であるが，左側の関は位置の確認が困難で，右側とは位置が異なる可能性もある。棘状突起を持つ。９は篦被部の下半部から茎部のみが遺存する長頸鏃である。棘状突起の下部には，口巻の繊維とみられる樹皮がごく一部残存している。



第10図　SX－１出土遺物（２）



第11図　SX－2・3調査前測量図

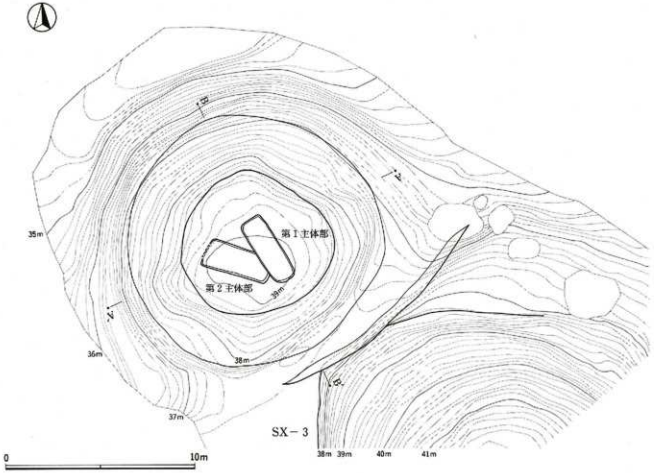
2．SX－2（第11～16図）

SX－1の南東約15m，6L～6Mグリッドにかけて位置する。径13.5mを測る円墳である。地山を削り出して整形し，旧表土上に暗褐色土の盛土をして構築されている。南東側にのみ周溝が検出され，この周溝がSX－3を切っている。周溝の深さは約0.7mを測る。盛土の高さは約0.4m，周溝底面から盛土上面までの高さは約1.7mである。

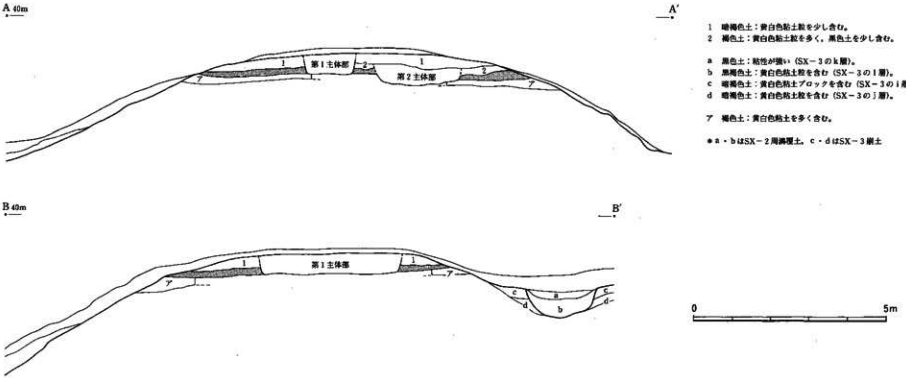
埋葬施設は墳丘のほぼ中央部で，木棺直葬の主体部が2基検出された。東側のものを第1主体部，西側のものを第2主体部とした。第2主体部は第1主体部の調査後に確認されたもので，上下関係から，第1主体部に先行して構築されたことが明らかである。副葬品の出土量に差が認められる。

第1主体部は，検出時に墓坑の範囲に黄白色粘土の分布が見られた。墓坑の掘方は，3.8m×1.3mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.4m～0.5mを測る。木棺痕跡は平面的には不明確であったが，断面観察によって，3.2m×0.8m程度の長方形を呈するものと推定される。また，木棺の固定には黄白色粘土が用いられていたことが分かる。遺物は，鉄製品の破片が出土したのみである。

第2主体部の墓坑の掘方は，3.65m×1.4m～1.6mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.2m～0.3mを測る。木棺痕跡は3.1m×0.8m～0.9mの長方形を呈する。断面観察によって，墓坑底面に黒色土を敷いた後に木棺を設置し，木棺の固定には黄白色粘土が用いられていたことが分かる。遺物は，直刀が木棺のほぼ中央から，鉄鏃が直刀の北側でまとまって出土している。



第12図　SX－2平面図



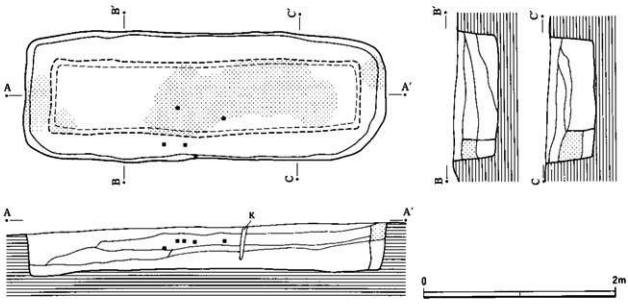
1　暗褐色土：黄白色粘土粒を少し含む。
2　褐色土：黄白色粘土粒を多く、黒色土を少し含む。

a　黒色土：粘性が強い（SX－3のk層）。
b　黒褐色土：黄白色粘土粒を含む（SX－3のl層）。
c　暗褐色土：黄白色粘土ブロックを含む（SX－3のi層）。
d　暗褐色土：黄白色粘土粒を含む（SX－3のj層）。

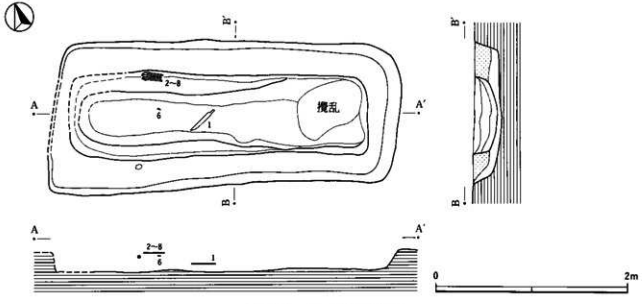
ア　褐色土：黄白色粘土を多く含む。

●a・bはSX－2周溝埋土。c・dはSX－3周土

第13図　SX－2墳丘断面図



第14図　SX－2第1主体部



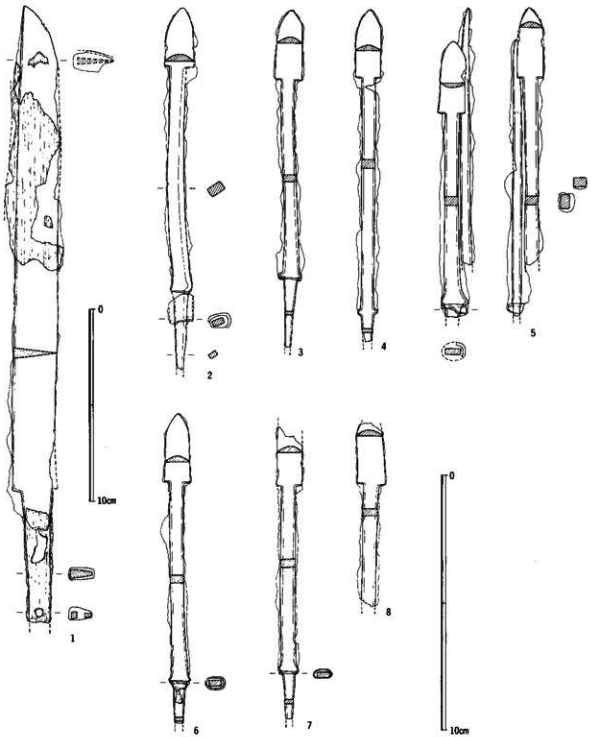
第15図　SX－2第2主体部

そのほか，土師器の破片が，墳丘中から出土しているが，量は極めて少なく，図示できるものもない。

1～8の鉄製品は，いずれも第2主体部内から出土したものである。1は直刀である。両関であるが，刃側の関は欠損している。鞘木と柄木が遺存しており，特に鞘木は表面が良好に遺存する部分があるが，樹脂膜等は観察されない。茎には，X線写真で目釘孔が1か所確認された。目釘は遺存していない。

2～8は鉄鏃である。いずれも長頸鏃で，鏃身部の断面は片丸，関は直角の両関である。2の茎関の形態はスカート状とみられる。錆に覆われているが，矢柄が若干遺存する。口巻等は確認できない。3は棘

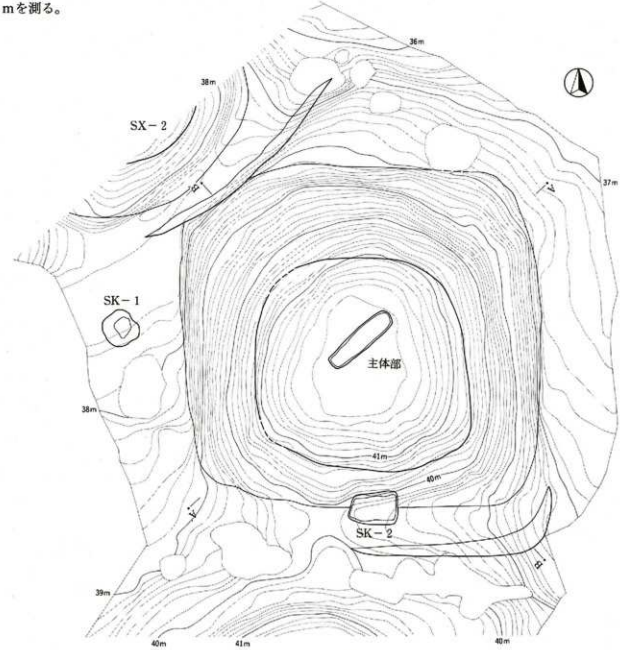
状突起の直下に口巻の繊維とみられる樹皮がごく一部遺存している。4は棘状突起を持つ。5は2本銹着している。左側の図は，その左側面図である。1本は篦被部以下を欠損するが，もう1本はスカート状とみられる茎関を持ち，矢柄が若干遺存する。6はスカート状突起を持ち，矢柄の木質が観察される。7の鏃身部の左側の関は，欠損後銹により膨張しているようで，形状は明確にはならない。茎関の形態はスカート状で，その直下に口巻の繊維が若干観察される。8は切先と篦被部下半を欠損する。鉄鏃はこれらのほか，接合しない破片が約1本分あるので，第2主体部には全部で9本が副葬されていたようである。



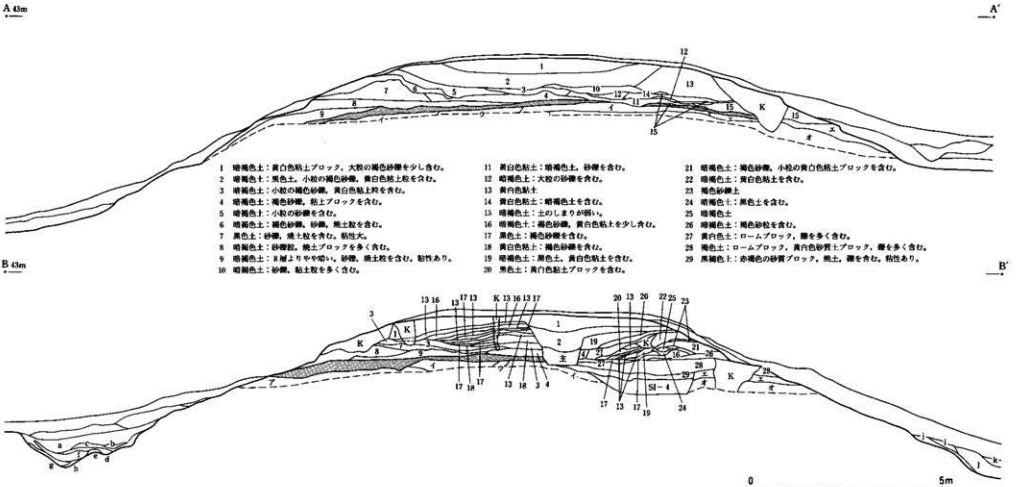
第16図　SX－2出土遺物

3．SX－3（第11図・17～25図）

SX－2の南東に近接して，6M・7M・6N・7Nグリッドに位置する。東西19m，南北18mを測る方墳である。地山を削り出して整形し，旧表土上に盛土をして構築されている。北西コーナー部はSX－2の周溝に僅かに切られている。周溝は，南辺で一部検出されたのみで，深さは約0.9mを測る。周溝南辺の底面レベルは中央のやや西寄り部分で高くなっており，周溝がその部分で途切れるように陸橋状に掘り残されている可能性が高い。土層断面の観察から古墳の構築過程を復元してみると，初めに地山を削り出して，その削り出された四角形の縁辺部にまず土堤状に盛土が行われたようである。そしてその後，土堤状に包囲された中央部分に，主に黒色土と黄白色粘土とで交互に版築を行いながら盛土し，主体部はその上面から地山層まで掘り込まれているようである。そして主体部は暗褐色土で埋められ，更にその上に同様の土が盛土され，古墳が完成するようである。盛土の高さは約1.2m，周溝底面から盛土上面までの高さは約4mを測る。



第17図　SX－3平面図

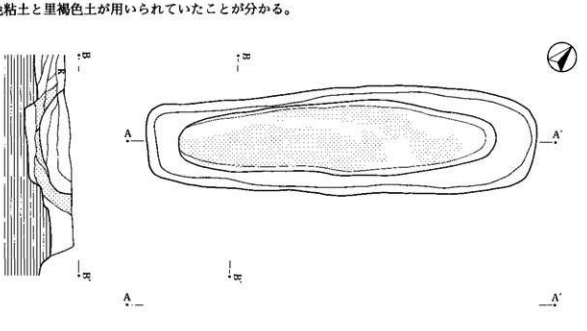


1 暗褐色土：黄白色粘土ブロック、大粒の褐色砂礫を少し含む。
2 暗褐色土：黒色土、小粒の褐色砂礫、黄白色粘土粒を含む。
3 暗褐色土：小粒の褐色砂礫、黄白色粘土粒を含む。
4 暗褐色土：褐色砂礫、粘土ブロックを含む。
5 暗褐色土：小粒の砂礫を含む。
6 暗褐色土：褐色砂礫、砂礫、焼土粒を含む。
7 黒色土：砂礫、焼土粒を含む。粘性大。
8 暗褐色土：砂礫粒、焼土ブロックを多く含む。
9 暗褐色土：8層よりやや暗い。砂礫、焼土粒を含む。粘性あり。
10 暗褐色土：砂礫、粘土粒を多く含む。
11 黄白色粘土：暗褐色土、砂礫を含む。
12 暗褐色土：大粒の砂礫を含む。
13 黄白色粘土
14 黄白色粘土：暗褐色土を含む。
15 暗褐色土：土のしまりが弱い。
16 暗褐色土：褐色砂礫、黄白色粘土を少し含む。
17 黒色土：褐色砂礫を含む。
18 黄白色粘土：褐色砂礫を含む。
19 暗褐色土：黒色土、黄白色粘土を含む。
20 黒色土：黄白色粘土ブロックを含む。
21 暗褐色土：褐色砂礫、小粒の黄白色粘土ブロックを含む。
22 暗褐色土：黄白色粘土を含む。
23 褐色砂礫土
24 暗褐色土：黒色土を含む。
25 暗褐色土
26 暗褐色土：褐色砂粒を含む。
27 黄白色土：ロームブロック、礫を多く含む。
28 褐色土：ロームブロック、黄白色砂質土ブロック、礫を多く含む。
29 黒褐色土：赤褐色の砂質ブロック、焼土、礫を含む。粘性あり。

a 黒褐色砂質土
b 暗褐色砂質土
c 黒褐色土：黄褐色粘土ブロックを多く含む。
d 黒褐色土：礫、黄白色粘土を少し含む。
e 灰白色粘土
f 黄灰色砂質土：焼土ブロック、黄褐色砂質土を多く含む。
g 黒褐色土
h 黒褐色土：灰白色粘土粒・ブロックを多く含む。
i 暗褐色土：黄白色粘土ブロックを含む（SX－2のc層）。
j 暗褐色土：黄白色粘土を含む（SX－2のd層）。
k 黒色土：粘性が強い（SX－2のa層）。
l 黒褐色土：黄白色粘土粒を含む（SX－2のb層）。
ア 暗褐色土：しまりあり。礫を少し含む。
イ 暗褐色土：黄白色粘土ブロック、礫を少し含む。粘性あり。
ウ 黄白色粘土：粘性あり。
エ 黒褐色土：ロームブロック、礫、黒色土を含む。
オ 黒褐色土：エ層よりやや明るい。粘性あり。

第18図　SX－3墳丘断面図

埋葬施設は墳丘のほぼ中央で，木棺直葬の主体部が検出された。主体部の検出時には，墓坑の範囲に黄白色粘土の分布が見られた。墓坑の掘方は，4.1m×0.9m～1.1mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.15m前後を測る。木棺痕跡は3.3m×0.8mの舟形を呈する。棺底の断面形は緩いU字形で，いわゆる舟底形を呈する。断面観察によって，墓坑底面に黒色土を敷いた後に木棺を設置し，木棺の固定には黄白色粘土と里褐色土が用いられていたことが分かる。

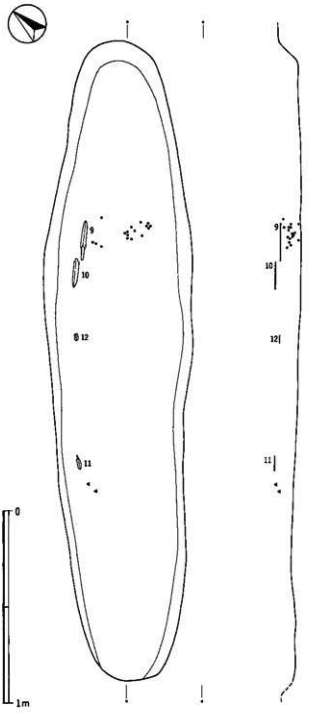


第19図　SX－3主体部

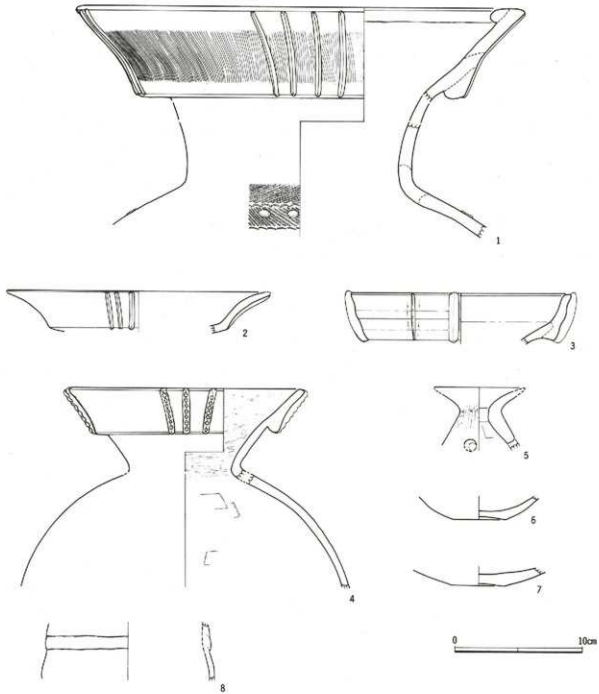
遺物は，木棺の中央やや北東側から鉄槍・鉄剣が，その東側からガラス玉17点が集中して出土し，鉄剣からやや離れて，無茎銅鏃が，さらに離れて有茎銅鏃と管玉2点が出土している。

主体部以外では，墳丘の東側裾部と西側裾部を中心に土器がまとまって出土している。2・4・8は墳丘東側裾部，1・3・6・7は西側裾部から出土したものである。その出土状況から墳頂部からの転落も考えられる。5のみ墳丘北側裾部から出土した。

1～4は壺である。1は大型のもので，口縁部と頸部は接合せず，図上で復元した。このほかに，同一個体の胴部破片が多数出土しているが，器面の内外，断面ともに極めて遺存状態が悪く，胴部の形状を復元することは不可能であった。本来は完形あるいはそれに近い状態であったものと考えられる。ただし，底部破片は出土していない。胎土には石英・長石などの大粒の砂粒を極めて多く含み，色調も黄褐色を呈するなど，他の土器と著しく異なる特徴を示す。複合口縁で，複合部下半に幅広の粘土帯を貼り付けるものである。口唇部は平坦で，口縁部内面にはやや丸味をもった断面四角形を呈する突帯が付されている。口縁部外面は，ハケ調整後断面三角形を呈する4本1組の棒状浮文が4～5単位貼り付けられる。肩部外面には，縄文とS字状結節文を施文後，円形浮文が貼り付けられる。下段のS字状結節文の下部は無文となる。2は大きく外反する口縁のもので，30%ほどの破片である。内外面共ヘラミガキされているようで



第20図　SX－３主体部遺物出土状況



第21図　SX－３出土遺物（１）

あるが，器面の遺存状態が悪く，詳細な観察は困難である。外面には，断面三角形を呈する３本１組の棒状浮文が貼り付けられる。

３は互いに接合しない口縁部の破片が全体の60％ほど遺存しているものである。複合口縁で，外反する口縁部が上部で強く内折して立ち上がるものである。外面には２条の太い凹線を施し，断面三角形を呈する２本１組の棒状浮文が貼り付けられている。器面の遺存状態が悪く，調整の観察や赤彩の確認は困難である。

4は口縁部と胴部が接合しないものであるが，図上で復元した。頸部で強く外反し，幅広の複合口縁となるものである。外面には，断面三角形を呈する3本1組の棒状浮文が貼り付けられる。さらに浮文上には，刻みが施される。外面と口縁部～頸部の内面はヘラミガキされ，胴部内面はヘラナデされているが，器面の遺存状態が悪く，詳細な観察は困難である。

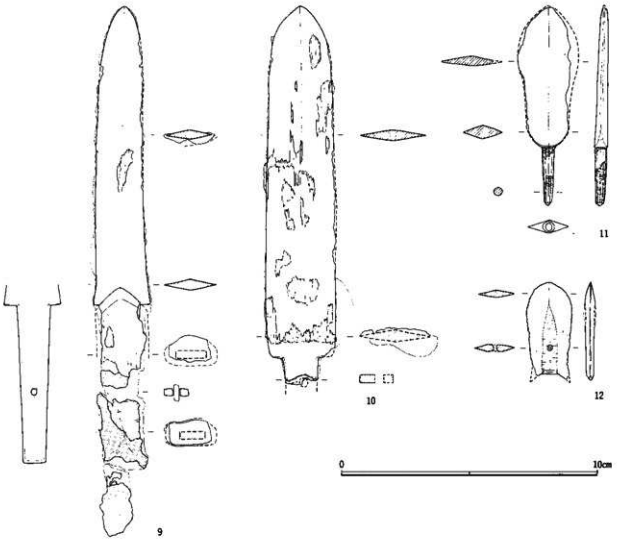
5は脚部下端を欠失する器台で，全体の50%ほどが遺存する。器受部内面と外面はヘラミガキされているようだが，器面の遺存状態が悪く，詳細な観察は困難である。脚部の透孔は3孔である。

6・7は壺の底部破片である。器面の遺存状態が悪く，調整の観察は困難である。

8は頸部に輪積み痕を残す弥生土器の甕の破片で，混入品と考えられる。

9～29は主体部木棺内から出土した遺物である。

9は，鉄槍である。槍身部から茎までほぼ完存し，柄の部分の木質も比較的良好に遺存している。槍身部は関に向かって幅がやや広がる。槍身部には表裏とも木質が若干付着しており，鞘に納められていた可能性がある。関は両側ともほぼ直角である。柄木は部分的に表面まで遺存しており，樹脂膜（トーン部分）もみられる。柄の上部はやや膨らみを持った山形に削って整えられ，槍身部を挟み込むようにして造られ



第22図　SX－3出土遺物（2）

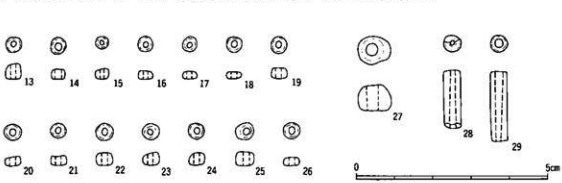
ている。樹脂膜の下には，横方向に走る条線がはっきりと観察される部分があるが，これは糸巻きの痕跡と考えられる。柄の断面は扁平な形を呈している。茎には，関部から3.5cmほどの場所に目釘孔が1か所認められ，目釘も遺存する。茎尻は一文字尻である。茎の断面形と厚みは，柄に包まれているため確定できない。

10は，鉄剣である。錆により膨張している部分もあるが，剣身部はほぼ完存する。剣身部には全体的に鞘とみられる木質がうっすらと付着しているのが観察される。この木質は関付近で直線的に途切れており，鞘の端部を示すと考えられる。関は茎に対してほぼ直角であるが，その角については，右側が欠損してはいるものの，面取りがされているようである。茎は約1cmしか遺存していないが，その端部には目釘孔が所在するようである。目釘は遺存していない。

11・12は銅鏃で，11は有茎式，12は無茎式である。ともに腐食が進んでおり，縁辺が全体的に刃こぼれ状に欠けている。11の鏃身部は，側辺が緩やかな「S」字状となる柳葉形を呈する。縦一本に鏑の稜線が走る。茎部付近には横方向の擦痕が観察される。茎部は表面が一部剝落しているものの，端部までほぼ全部遺存しているようである。丁寧に研磨され，断面は多角形を呈する。12は，肩に丸みを持つ五角形状を呈する。鏃身部の中央は平坦で，断面形は扁六角形となる。平坦部分には主に横方向の擦痕が見られるが，基部付近では一部縦方向の擦痕も交差して観察される。目釘孔を1か所有する。基部は逆刺が突出している。両側とも逆刺の先端を微妙に欠損するので確定はできないが，左右で長さが異なる可能性もある。逆刺と逆刺の間は直線状となっており，鏃身部の稜線はその直線部分に帰結する。

13～27はガラス玉である。ガラス玉は破片も含めて17点出土しているが，このうち15点を図示することができた。径8㎜を超え，重さ0.51gを測る27以外は，径4㎜前後，重さ0.05g前後で共通している。色調は青色または紺色を呈する。

28・29は管玉で，いずれも片面より穿孔されている。28は鉄石英製のもので，最終的な研磨が行われていないため，断面形は幅の狭い面が残されたままになっている。重さ0.44gを測る。29は緑色凝灰岩製のもので，風化はやや進んでいるが，比較的遺存状態が良い。重さ0.33gを測る。

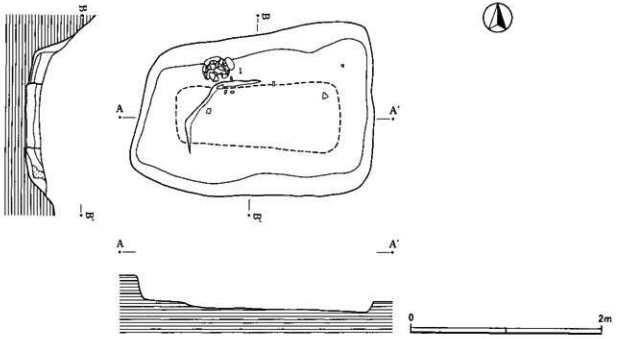


第23図　SX－3出土遺物（3）

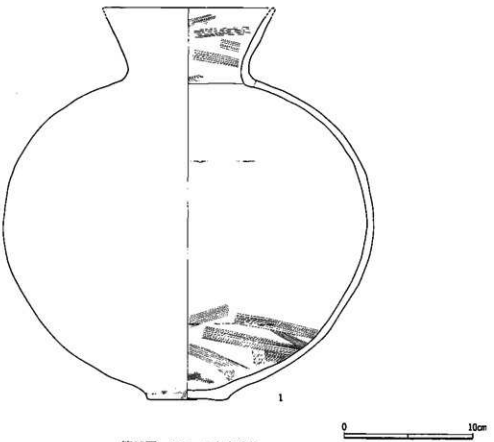
そのほかに，南側の周溝内から主軸方位をほぼ東西におく木棺直葬の主体部（SK－2）が検出されている。掘方は，2.6m×1.4m～1.8mの不整な隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.1m～0.2mを測る。木棺痕跡は1.75m×0.6m～0.75mの隅丸長方形を呈する。断面観察によって，墓坑底面に直接木棺を設置し，木棺の固定には黄白色粘土と暗褐色土が用いられていたことが分かる。

遺物は，木棺内からは出土していないが，墓坑から壺が1点出土している。1は壺で，口縁部は完存す

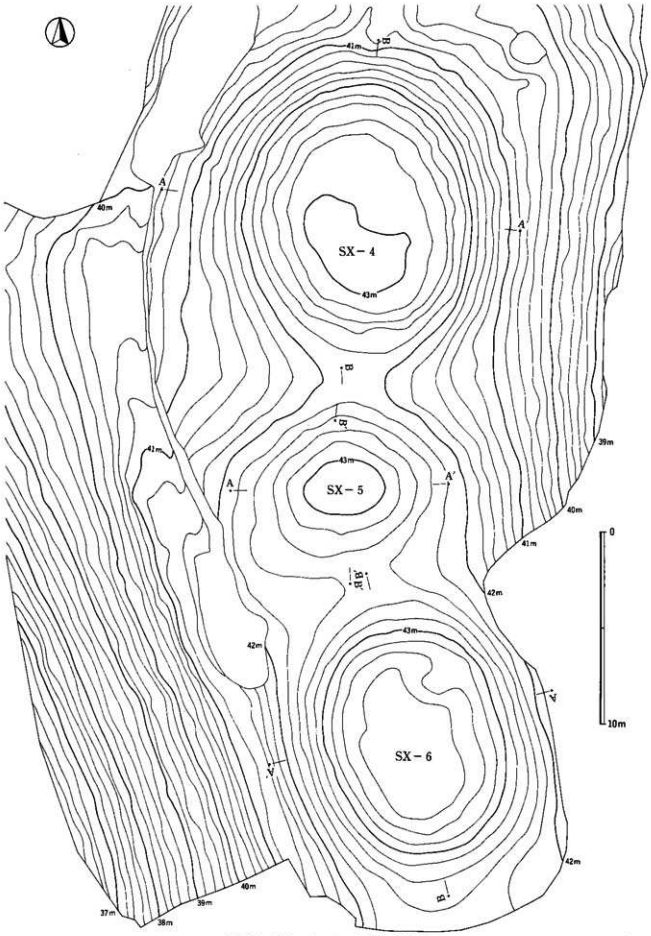
るものの，胴部の遺存は40%ほどで，胴部上半と下半は接合しないため図上で復元したものである。内外面共器面の磨滅・剝落が著しい。特に外面は遺存状態が悪く，底部にハケ調整が観察できるほかは，調整は不明である。また，赤彩の有無についても不明である。内面の口縁部と胴部下半はハケ調整される。



第24図　SK－2



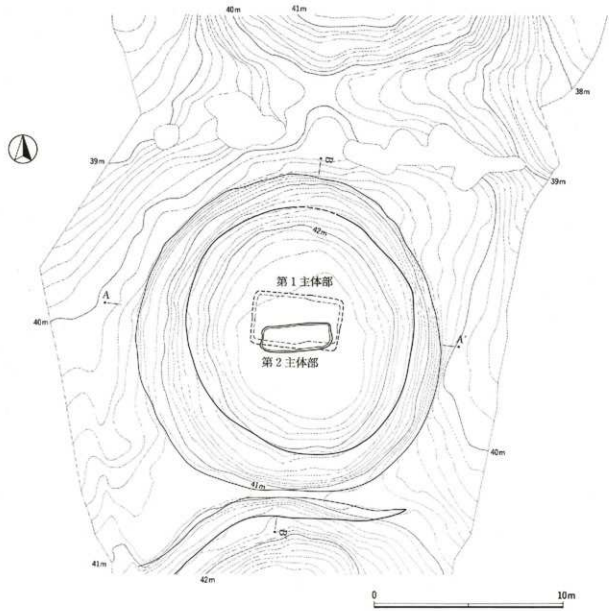
第25図　SK－2出土遺物



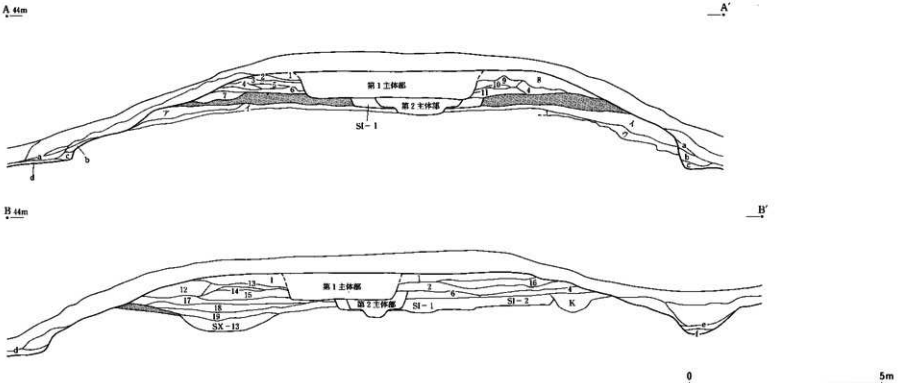
第26図　SX－4・5・6調査前測量図

4．SX－4（第26～33図）

SX－3の南側に近接して，8Mグリッドに位置する。径16mを測る円墳である。地山を削り出して整形しているが，縁辺部分の削出しが急斜度である。旧表土上には暗褐色土や黒褐色土，黒色土などの盛土が行われている。墳丘下にはSI－1・2やSX－13などの遺構が旧表土層を切って構築されているが，墳丘形成時にこれらの窪みを埋めてその上に盛土している様子が窺える。墳丘の南側には溝状の落込みが見られるが，これは周溝というよりSX－5との境界線の溝と考えた方が妥当であろう。盛土の高さは約0.7m，盛土上面までの高さは，墳丘裾部から約2.1m，溝底面から約1.6mを測る。



第27図　SX－4平面図



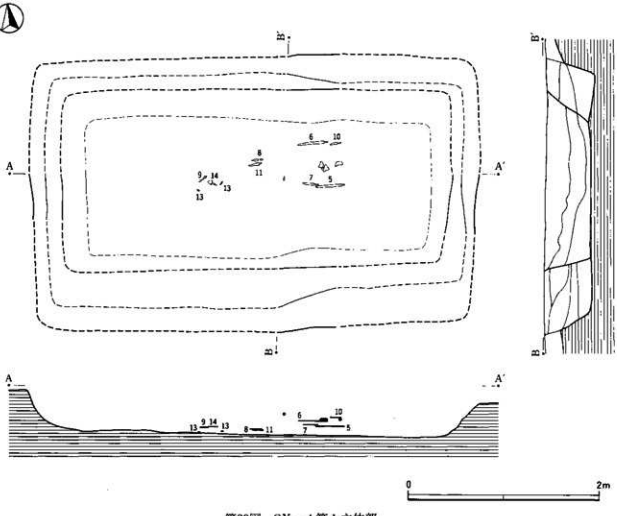
1 暗褐色土：ローム粒を多量に含む。
2 暗褐色土：ロームブロックを含む。
3 ロームブロック主体：暗褐色土を含む。
4 黒色土：暗褐色土を含む。
5 暗褐色土：黒色土、ロームブロックを含む。
6 黒色土：ローム粒を含む。
7 黒褐色土
8 暗褐色土：褐色砂粒を多く含む。
9 暗褐色土：黒色土を含む。
10 暗褐色土：黒色土、砂礫を含む。
11 暗褐色土：砂礫、粘土粒を含む。
12 暗褐色土：黒色土、黄白色粘土粒を含む。
13 暗褐色土：黒色粘質土、黄白色粘土粒を含む。
14 黒褐色土：黄白色粘土ブロックを含む。
15 黒色粘質土
16 暗褐色土：黄白色粘土粒を含む。
17 黄褐色土：粘性大、ローム粒を含む。
18 黒褐色土：粘性あり。
19 黒色土：粘性大、焼土粒を含む。
a 黒褐色土：径2㎜粒の黒色土ブロックを含む。ややしまりあり。やや粘性あり。
b 褐色土：しまりなし。粘性なし。
c 黒褐色土：径2㎜粒の黒色土ブロックを多く含む。ややしまりあり。粘性なし。
d 褐色土：ややしまりあり。粘性なし。
e 黒褐色土：黄白色砂粒、黄白色粘土粒を含む（SX－3のa層）。
f 暗黄褐色土：黄白色粘土粒、赤褐色砂粒を含む（SX－3のb層）。
ア 黒色土：土器片を含む。
イ 暗褐色土：焼土粒を含む。基体層。
ウ 暗黄褐色土：ロームブロックを多く含む。

第28図　SX－4墳丘断面図

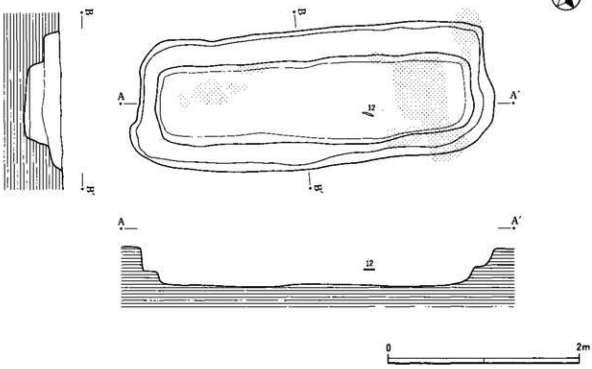
埋葬施設は墳丘のほぼ中央で，木棺直葬の主体部が検出された。主軸方位をほぼ東西におく２基で，副葬品の出土量に差が認められる。

第１主体部は鉄製品の出土によって存在が確認されたもので，全体の遺存は極めて悪い。第２主体部の直上に位置することから，第２主体部より新しいことが明らかである。土層断面の観察から，墓坑の掘方は4.7m×2.9m，木棺痕跡は4.1m×1.9mの長方形を呈するものと推定される。検出面からの深さは0.4m～0.5mを測る。断面観察によって，墓坑底面に直接木棺を設置し，木棺の固定には暗褐色土や茶褐色土が用いられていたことが分かる。遺物は，中央東側で側壁に平行して，直刀と刀子が北側と南側に，その西側で刀子，さらに西側で鉄鏃がまとまって出土している。

第２主体部は，第１主体部の調査後に確認されたものである。上下関係から，第１主体部に先行して構築されたことが明らかである。中央部に，木棺が置かれていたと考えられる掘込みを有する。主体部の検出時には，墓坑の範囲に黄白色粘土の分布が見られた。墓坑の掘方は，3.8m×1.4mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.25mを測る。中央部の掘込みは3.3m×0.85mの長方形を呈する。検出面からの深さは0.2mを測る。遺物は刀子が１点底面から浮いた状態で出土したのみである。



第29図　SX－４第１主体部



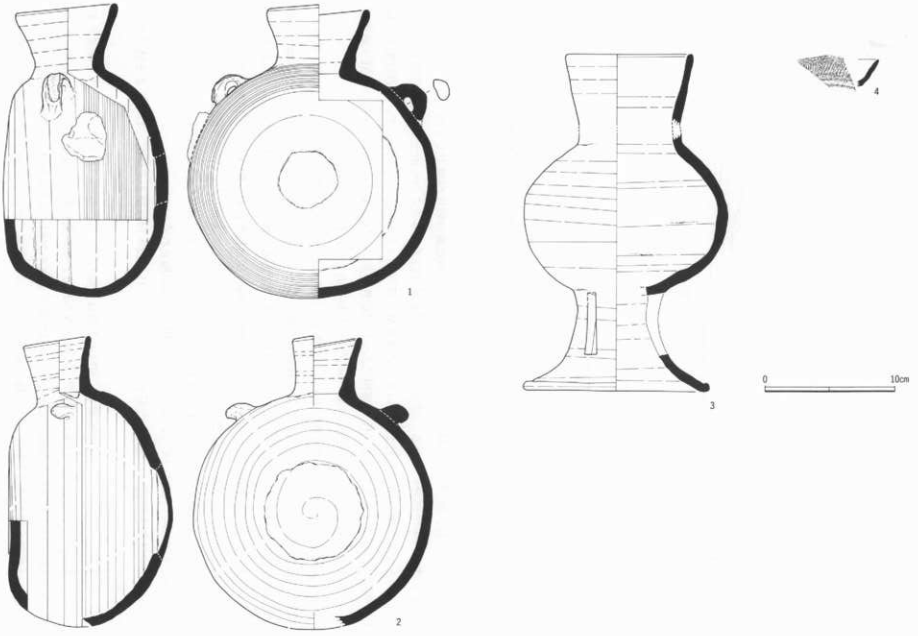
第30図　SX－4第2主体部

主体部以外では，墳頂部の8M－36・37グリッドを中心に須恵器の破片が集中して出土している。これは第1主体部の東半部分にあたる。図示した4点の須恵器はいずれもここから出土したものである。そのほか，勾玉が4点墳丘中から出土している。15は8M－27グリッドから出土したもので，これは第1主体部の東端にあたり，第1主体部に伴う遺物であった可能性が高い。16は第1主体部の東側の8M－38グリッド，17・18は第1主体部の南側の8M－56グリッドから出土したものである。

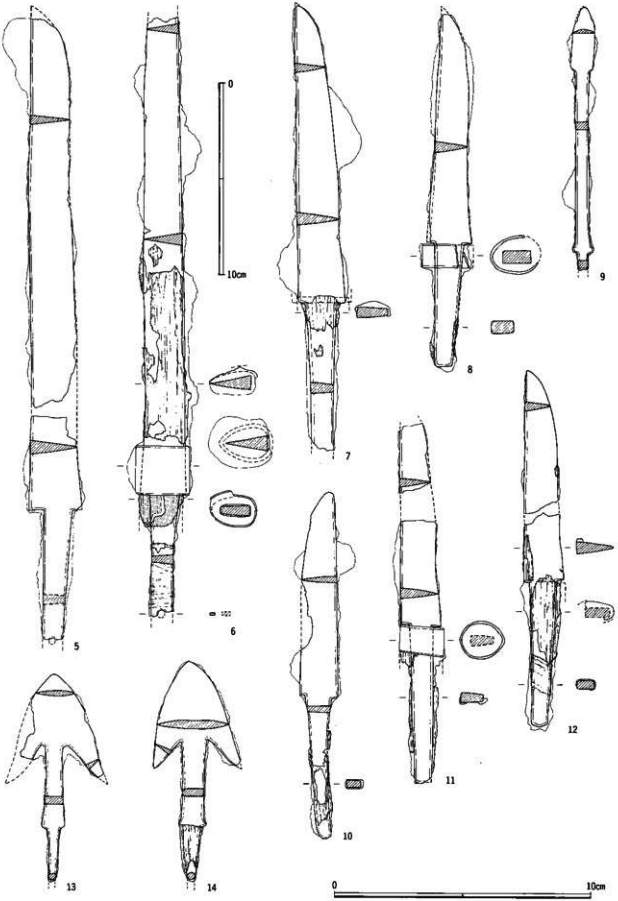
1・2は提瓶である。1は80%遺存するものである。体部外面はカキ目調整及び回転ヘラケズリされる。肩部には輪状の把手が貼り付けられる。口縁部から体部上半には自然釉が付着する。胎土には1㎜～2㎜の長石粒を含む。灰褐色を呈する。2は90%遺存するものである。体部外面は回転ヘラケズリされる。肩部には鉤状の把手が貼り付けられる。胎土には1㎜～3㎜の長石粒を含む。暗灰色～灰色を呈する。3は脚付長頸壺であるが，口縁部と体部以下は接合しないため，図上で復元した。胴部外面は回転ヘラケズリされる。脚部には1段の長方形の透孔が3方向に開けられる。胎土には1㎜～2㎜の長石粒を含む。灰色を呈する。4は甕の口縁部破片で，外面にはヘラ描波状文が施される。

5～14は主体部木棺内から出土した鉄製品である。5～11，13・14は第1主体部，12は第2主体部から出土した。

5・6は直刀である。5の関は両関で，刃側の先端は欠損している。茎部の断面は，錆による膨張と剝落などで確定はできないが，刃側がやや薄くなるとみられる。茎の遺存部分の端部には目釘孔があるようである。目釘孔はこのほかには確認できない。6は切先と茎尻を欠損するが，鞘木や柄木が遺存している。柄付近には鉄製の鎺が装着されている。鎺は本来の位置から刀身部にずれてしまっている可能性が高く，両関とみられる関部は現状では鎺の中に位置しており，形状等を確定することはできない。柄木は，もと



第31図　SX－４出土遺物（１）



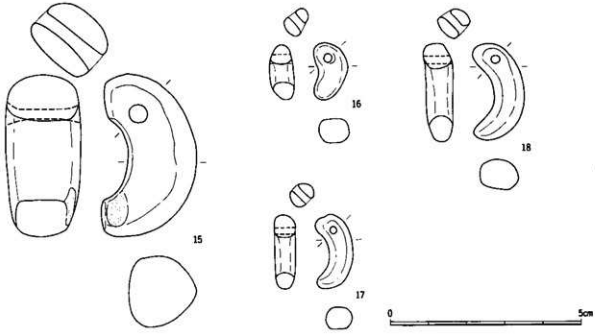
第32図　SX－4出土遺物（2）

もと鏃の中に入っていたと思われる部分で遺存状態が比較的良く，銹膨れにより一部段差が生じてはいるものの，表面も遺存しており，樹脂膜（トーン部分）が観察される。柄木の下の茎には，樹皮とみられるものが横に巻かれているのが観察される。また，茎の破損部分には目釘孔が1か所認められる。茎の厚みは，刃側が背側よりやや薄くなっている。

7・8・10～12は刀子である。7は比較的大型のものである。両関で，関部付近には柄木が遺存している。柄木は刃部の上で直線的に途切れており，柄木の端部を示していると考えられる。また，柄木の上には直線状の傷が認められ，これは鞘の端部を示す痕跡と考えられる。茎部の厚みは，刃側がやや薄くなっている。目釘孔は確認できない。8は，鉄製の鏃が装着されている。関は両関で，背側・刃側とも鏃の外に位置する。茎部には僅かに柄木の木質が付着している。茎尻は一文字尻である。茎の厚みは，銹により膨張している可能性が高い。10は，切先が磨滅して丸みを帯びている。関は両関であるが，背側と刃側とで位置が若干異なる。茎尻は栗尻状で，茎には柄木が付着している。11は鉄製の鏃を持つものである。関は両関で，背側と刃側で若干位置が異なるが，いずれも鏃の外に位置する。茎尻は一文字尻とみられるが，僅かに欠損するようである。茎の表面には柄木が僅かに遺存している。12は鞘木と柄木の木質が遺存しており，その境目が関部付近に認められる。また，銹に覆われてはっきりしないが，柄木の下には樹皮などの巻かれているのが観察される。茎尻は栗尻状である。

9・13・14は鉄鏃である。9は長頸鏃で，鏃身部の断面は片丸，関は鈍角である。棘状突起を持つ。13・14は腸抉三角形鏃である。13は逆刺の先端が欠損しているが，抉りの深さは推定で1.5cmである。関はやや裾の広がる方形状である。茎の断面形は四角形である。14の刃部の抉りの深さは1.1cmを測る。関の形状はスカート状を呈し，茎には矢柄の木質が遺存する。茎部の断面形は円形である。

15～18は墳丘中から出土した勾玉である。いずれも滑石製で，良く研磨されており，遺存状態も良い。15は大型のもので，重さ26.52ｇを測る。16は1.07ｇ，17は1.45ｇ，18は3.01ｇを測る。

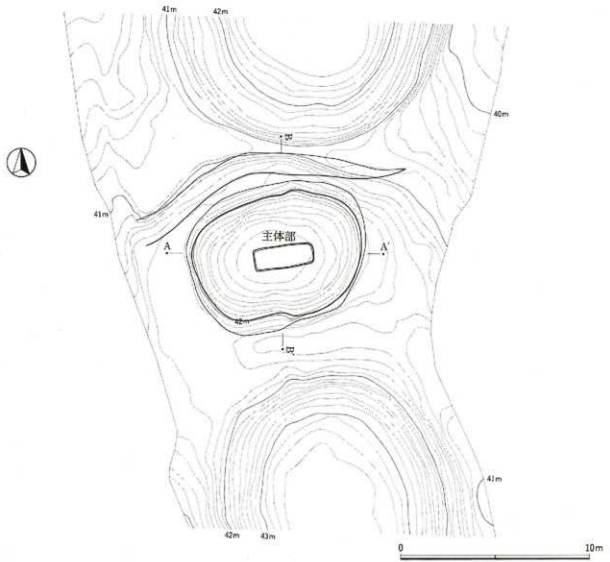


第33図　SX－4出土遺物（3）

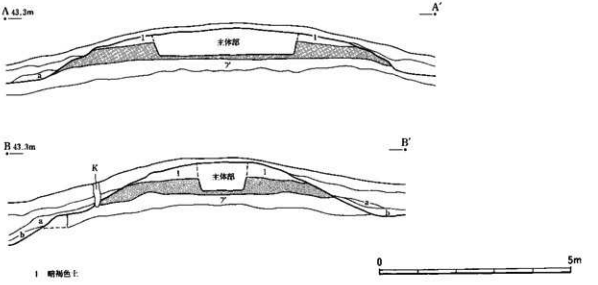
5．SX－5（第26・34～40図）

SX－4の南側に近接して，8M～9Mグリッドにかけて位置する。東西に長い不整楕円形状を呈する円墳で，規模は長径9.6m，短径7.3mを測る。地山を削り出して整形し，旧表土上に暗褐色土の盛土を行っている。北側に溝状の落込みが見られるが，これは周溝というよりSX－4との境界線の溝と考えた方が妥当であろう。盛土の高さは約0.4m，墳丘裾部から盛土上面までの高さは約1.3m，溝底面から盛土上面までの高さは約2mを測る。

埋葬施設は墳丘のほぼ中央で，主軸方位をほぼ東西におく木棺直葬の主体部が検出された。墓坑の掘方は3.2m×1.2mの長方形を呈する。検出面からの深さは0.2m～0.3mを測る。木棺痕跡は2.8m×0.9mの長方形を呈する。断面観察によって，墓坑底面に黒色土を敷いた後に木棺を設置し，木棺の固定には褐色土が用いられていたことが分かる。遺物は，中央やや西側で直刀が，その西側で鉄鏃がややまとまって出土している。直刀の東側からは耳環1点と玉類がまとまって出土している。この耳環は鍍製で，腐蝕が著しく，原形をとらえることができない。



第34図　SX－5平面図

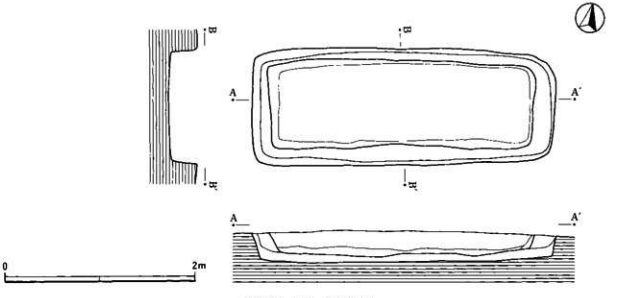


1　暗褐色土

a　黒褐色土：黄褐色砂粒，黄白色粘土粒を含む（SX－4のe層）。
b　暗黄褐色土：黄白色粘土粒，赤褐色砂粒を含む（SX－4のf層）。

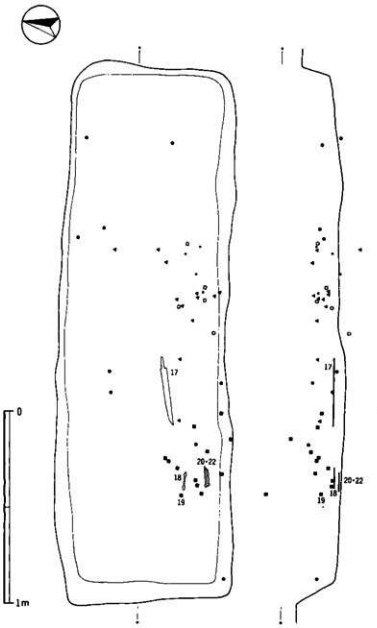
ア　黒褐色砂質土

第35図　SX－5 墳丘断面図



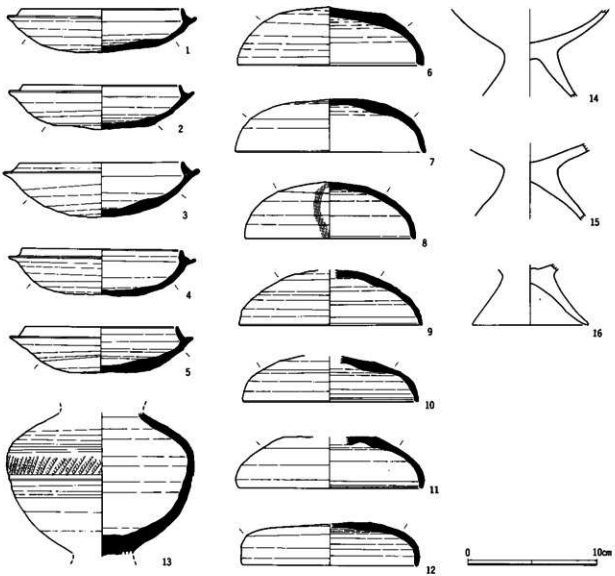
第36図　SX－5 主体部

主体部以外では，墳丘の南西側裾部から須恵器が集中して出土している。1～5・7～9・11・12は9M－44グリッドを中心とした範囲から集中して出土したものである。6・10は9M－24グリッドから出土したものである。そのほか，南側裾部からも土器が出土している。13の須恵器と14～16の土師器は南側裾部出土のものである。



第37図　SX－5 主体部遺物出土状況

1～5は杯身である。いずれも体部下半は回転ヘラケズりされる。1・4・5の胎土には1㎜～4㎜前後の長石粒を含む。1・5の底部外面にはヘラ記号が認められる。いずれも焼成は良好で，1・2・5は暗灰色，3・4は灰色を呈する。6～12は杯蓋である。いずれも天井部は回転ヘラケズりされる。6・8・10・11の胎土には1㎜～4㎜前後の長石粒を含む。10・12の底部外面にはヘラ記号が認められる。8の外面には火ダスキが認められる。6・7・11・12は灰色，8は灰褐色，9は暗灰赤褐色，10は暗灰色を呈する。



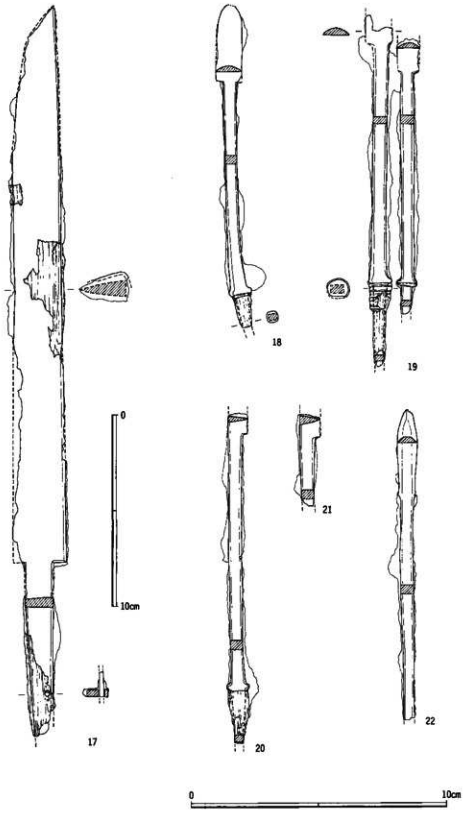
第38図　SX－5出土遺物（1）

13は脚付長頸壺であるが，脚部と頸部以上は欠失している。胴部下半は回転ヘラケズリされ，胴部中位には沈線区画内に刺突列点文が巡る。接合面の観察から，脚部の透孔は3方向に開けられていたことがわかる。灰色を呈する。

14～16は土師器高杯である。いずれも内外面共磨滅が著しく，調整の観察は不可能である。15の内面は，ヘラミガキされ，赤彩されている可能性がある。

17～22はいずれも主体部内から出土した鉄製品である。

17は直刀である。銹による膨張と剝落が著しく，特に厚みなどで原形の復元が困難である。ただし鞘木と柄木の一部は遺存する。関は両関とみられるが，刃側は欠損している。茎部には目釘孔が1か所，関から約6.5cmの位置に認められる。また，実測はしていないが，接合しない破片の中には折れた目釘とみられるものが1本あり，目釘孔がもう1か所あったと推定される。茎の厚さは刃側がやや薄くなるようである。



第39図　SX－5出土遺物（2）

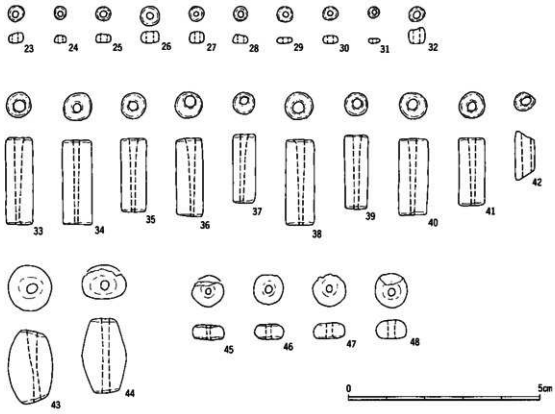
18～22は鉄鏃である。18の鏃身部の断面は片丸である。関は，右側が欠損しているが，直角の両関である。棘状突起を持ち，茎には矢柄の木質と口巻のごく一部が遺存している。19は２本銹着している。鏃身部の遺存状態はどちらも良くないが，いずれも断面形は片丸で関は鈍角とみられる。いずれも棘状突起を持ち，図左側の個体の茎には，矢柄の木質の上に口巻が遺存している。右側の個体の茎関部にも，口巻がごく一部遺存している。20・21は，鏃身部の遺存状態がよくないものの，片刃の長頸鏃である。20には棘状突起があり，茎部に矢柄の木質と口巻とみられる樹皮のごく一部が遺存する。22の鏃身部は，両刃ではっきりと鎬が造り出されており，断面形は台形を呈する。関は棘状に突出するものであるが，関部で破損しているため鈍角なのか緩やかなものなのかは明確にならない。鉄鏃はこれらのほかに茎部などの接合しない小破片が少量あるが，もともと副葬されていたのは６本と考えられる。

23～32はガラス玉である。径３㎜～４㎜前後のものである。色調には，青・紫紺・黄がある。

33～42は碧玉製の管玉である。径・長さ共にやや幅があるが，42を除いて遺存状態は良好である。いずれも片面穿孔である。重さは1.89・2.34・1.65・1.97・1.03・2.22・1.26・1.96・1.52・0.43ｇを測る。

43・44は琥珀製の棗玉である。大きさは共通し，重さは44が欠失部分があるため差があるが，本来は43と共通するものであったと考えられる。重さは1.53ｇ，0.94ｇを測る。

45～48は土製丸玉で，大きさはほぼ共通している。重さは，0.25・0.29・0.25・0.3ｇを測る。

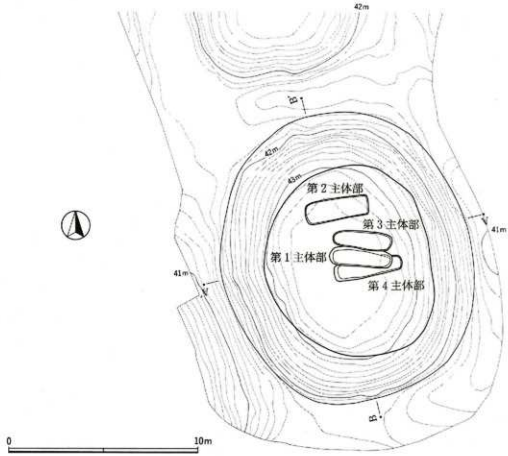


第40図　SX－５出土遺物（３）

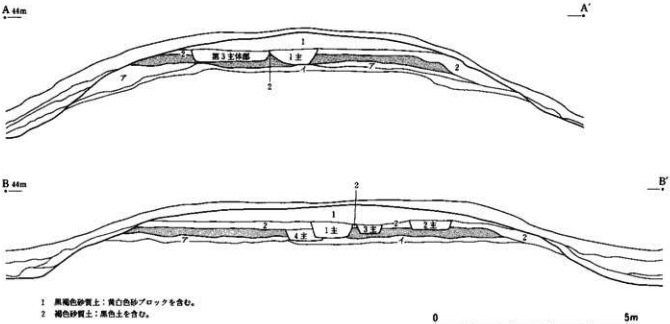
6．SX－6（第26・41～49図）

SX－5の南側に近接して，9M・10M・9N・10Nグリッドに位置する。南北に長軸をとるやや楕円形を呈する円墳で，規模は長径15.3m，短径13.2mを測る。地山を削り出して整形し，旧表土上に褐色砂質土と黒褐色砂質土を盛土して構築されている。周溝は検出されなかった。盛土の高さは約0.6m，墳丘裾部から盛土上面までの高さは約2.4mを測る。

埋葬施設は墳丘のほぼ中央で，主軸方位を東西におく木棺直葬の主体部が4基検出された。検出した4基のうち，中心部のものを第1主体部，その北1.5mに位置するものを第2主体部，第1主体部の北側で重複しているものを第3主体部，第1主体部の南側で重複しているものを第4主体部とした。第1・3・4主体部の新旧関係は，第4主体部が最古で，第1主体部・第3主体部の順に新しくなる。第2主体部との新旧関係は不明である。



第41図　SX－6平面図



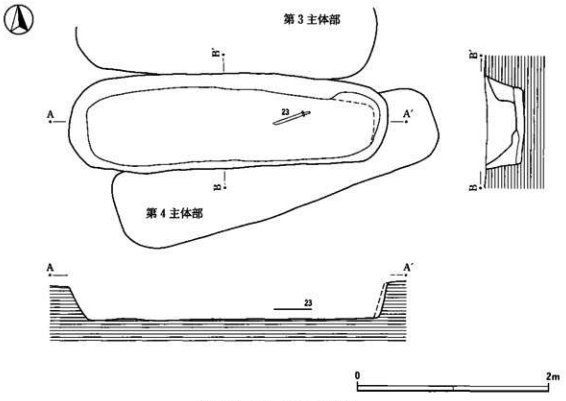
第42図　SX－6墳丘断面図

第1主体部の墓坑の掘方は，3.3m×1mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.35m～0.4mを測る。木棺痕跡は確認できなかった。遺物は，直刀が中央やや東側から出土している。

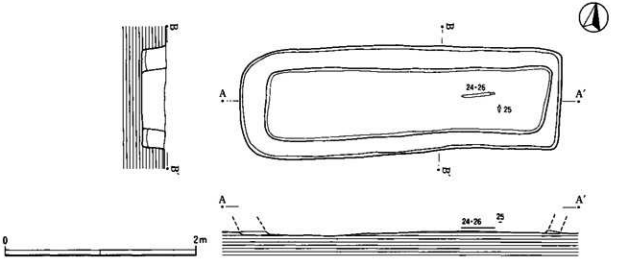
第2主体部の墓坑の掘方は，3.35m×1.15mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.25mを測る。木棺痕跡は2.95m×0.75mの隅丸長方形を呈する。断面観察によって，墓坑底面に直接木棺を設置し，木棺の固定には褐色土が用いられていたことが分かる。遺物は，中央やや西側で直刀・刀子が出土している。

第3主体部の墓坑の掘方は，3.15m×0.95mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.1m～0.15mを測る。木棺痕跡は2.6m×0.5mの隅丸長方形を呈する。断面観察によって，墓坑底面に直接木棺を設置し，木棺の固定には黄白色粘土を含む暗褐色土が用いられていたことが分かる。遺物は，木棺の東側で刀子が，西側で鉄製品の破片と土器片が出土している。

第4主体部は，検出時に墓坑内に黄白色粘土の分布が一部見られた。墓坑の掘方は，3.6m×0.9mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.3mを測る。木棺痕跡は3m×0.5mの隅丸長方形を呈する。断面観察によって，墓坑底面に直接木棺を設置し，木棺の固定には黄白色粘土を含む褐色土が用いられていたことが分かる。遺物は，木棺の中央やや西側で7本が錆着した鉄鏃が出土している。

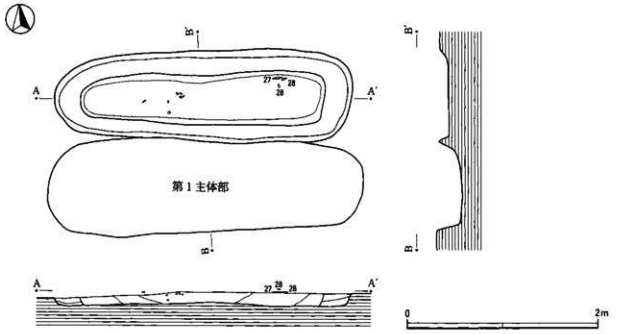


第43図　SX－6第1主体部

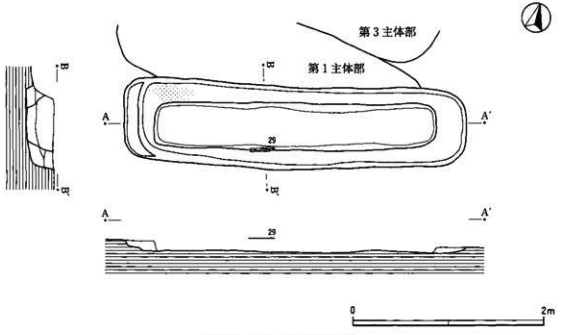


第44図　SX－6第2主体部

主体部以外では，須恵器を中心とした土器類が多量に出土している。1・6・11・15は墳丘の南東裾の10N－10グリッド，2～5・7・9・10・12～14・17・18・20は墳丘の南西裾の10M－16・17グリッド，8・16は墳丘の北側の9M－36グリッド，19は墳頂部やや西側からそれぞれ出土したものである。21・22は土師器で，21は墳丘の北西裾の9M－45グリッド，22は墳丘の北東裾の9M－38グリッドから出土したものである。

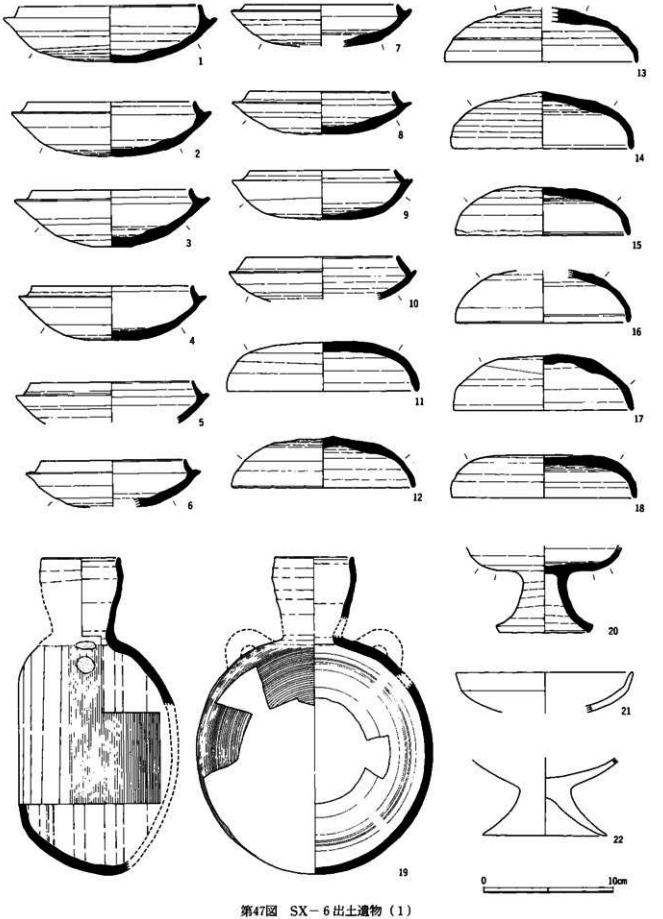


第45図　SX－6第3主体部



第46図　SX－6第4主体部

1～10は杯身である。いずれも体部下半は回転ヘラケズリされる。1～4・6～9の胎土には1㎜～4㎜前後の長石粒を含む。8・9の底部外面にはヘラ記号が認められる。いずれも焼成は良好で，1・3～5・7・8・10は灰色，2は暗灰赤褐色，6・9は暗青灰色を呈する。11～18は杯蓋である。いずれも天井部は回転ヘラケズリされる。13以外は胎土に1㎜～4㎜前後の長石粒を含む。11の天井部外面にはヘラ記号



第47図　SX－6出土遺物（1）

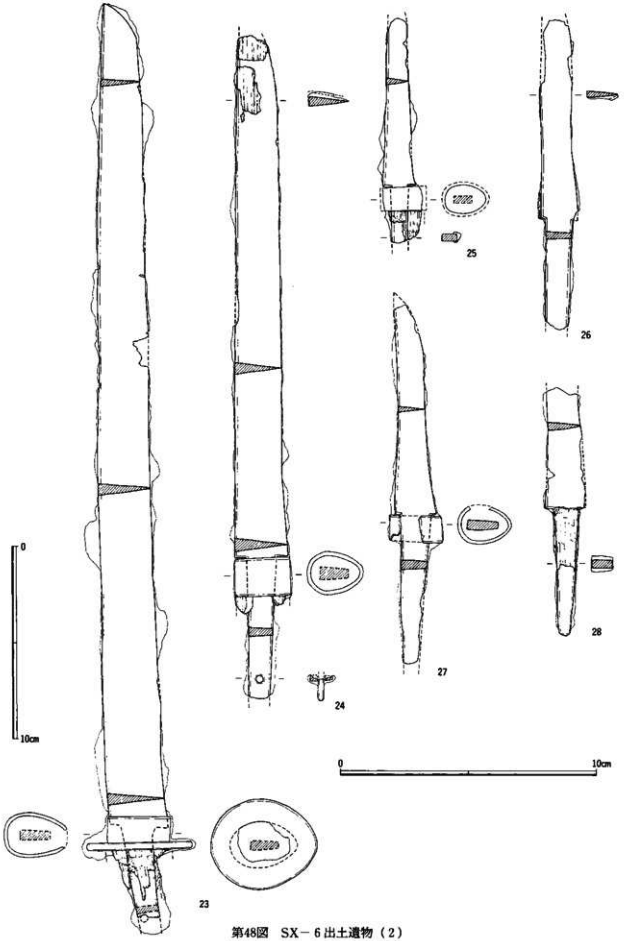
が認められる。いずれも焼成は良好で，11・14・16・17は灰色，12・15は暗青灰色，13・18は灰白色を呈する。19は提瓶で，40%ほど遺存するものである。体部外面はカキ目調整及び回転ヘラケズリされる。肩部の把手は欠失している。口縁部から体部上半にはわずかに自然釉が付着する。胎土には砂粒を少量含む。灰褐色を呈する。20は透孔のない短脚の高杯である。杯部下半は回転ヘラケズリされる。胎土に1㎜～2㎜前後の長石粒を含む。灰白色～灰褐色を呈する。21は土師器の杯の破片，22は土師器の高杯である。いずれも内外面共磨滅が著しく，調整の観察は不可能である。

23～34は鉄製品である。23は第1主体部，24～26は第2主体部，27・28は第3主体部，29は第4主体部出土のもので，30～34は墳丘から出土したものである。

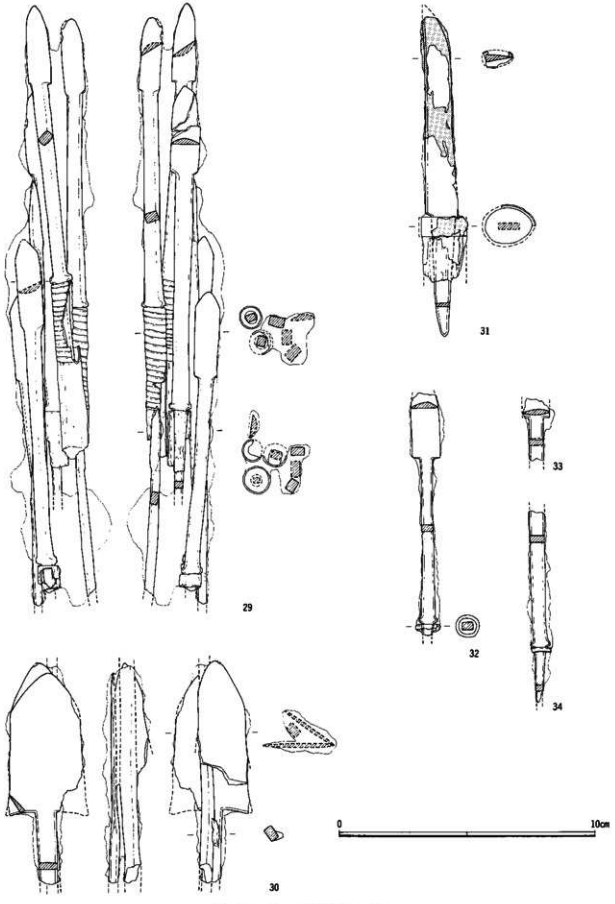
23・24は直刀である。23は，鍔と鎺が装着されており，刃部は内反り気味となる。関は両関とみられるが，いずれも鎺の中に位置しており，形状は確定できない。鍔は，背側が膨れる倒卵形を呈している。銹に覆われているため，X線写真からも窓を有するかどうかは明らかではない。茎部には柄木が遺存している。茎尻は折損し，その部分が銹で膨張しているため，茎部の厚さや木質の遺存範囲などは明らかにならない。また，折損部分に目釘孔がある可能性もあるが明らかでない。24は柄木の表面が少し遺存しており，その上に鉄製の鎺が装着されている。関は両関で，いずれもこの鎺の外に位置している。茎部には目釘孔が1か所，茎から約6.5cmの位置に認められ，目釘の片側はほぼ原形を保ったまま遺存している。刃部には鞘木の一部が遺存し付着している。

25～28・31は刀子である。25は，鉄製の鎺が装着されているが，現状ではその表面は剝落している。関は両関で，いずれもこの鎺の外側に位置している。柄木が遺存している。26は鞘木がわずかに遺存して付着している。両関であるが刃側の関は欠損している。茎の厚みは刃側がやや薄い。27は鉄製の鎺が装着されており，関は背側・刃側とも鎺の外側に位置する。茎の厚みは刃側がやや薄い。28は両関であるが，刃側の関の先端が僅かに欠けている。茎部には柄木の木質が付着している。茎尻は栗尻である。31は，鉄製の鎺が装着されている。関は両関であるが，現状では背側は鎺の外側，刃側は内側に位置している。背側の関は鈍角であり，刃側も恐らく鈍角とみられる。柄木が遺存しており，その表面も一部遺存している。また，刀身部や鎺部分を中心として，表面にそれ自体ほとんど厚みを持たない樹脂膜（トーン部分）が見られる。柄部にも一部見られるが，刀身部には木質は認められないことから，木質部のコーティングではないと考えられる。抜身の刀子を革袋などで包んだものであろうか。茎尻はほとんど尖ったような形状を呈している。

29・30・32～34は鉄鏃である。29は7本の長頸鏃が銹着しているもので，左側の図は裏面図である。銹などにより細部まで明らかにならない個体もあるが，鏃身部の断面はいずれも片丸造で，茎関に棘状突起を持つ，同タイプの鉄鏃とみられる。矢柄の竹と口巻の樹皮とが比較的良好に遺存している。30は2本の三角形鏃と1本の長頸鏃の篦被部が銹着しているものと考えられるが，異常に密着度が高く，1本の三角形鏃の剝がれた間に長頸鏃が入り込んでいる可能性もある。三角形鏃の鏃身部はふくらが角ばり，頬五角形状を呈する。逆刺が，浅くカーブを描くように造られている。篦被部のみ遺存している個体には，一部竹と思われる木質が付着しているが，別の鉄鏃の柄の破片と考えられる。32の鏃身部は片丸造である。棘状突起を持ち，竹とみられる矢柄が若干遺存する。33は遺存部が少なく，明らかにならない部分が多いが，鏃身部の断面はレンズ状を呈する。関は直角である。34は棘状突起があり，矢柄の口巻が僅かに遺存している。33と34は同一個体の可能性があるが，はっきりしない。



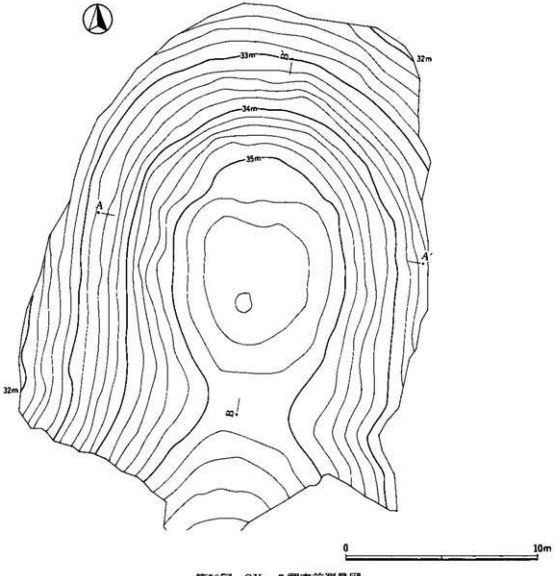
第48図　SX－6出土遺物（2）



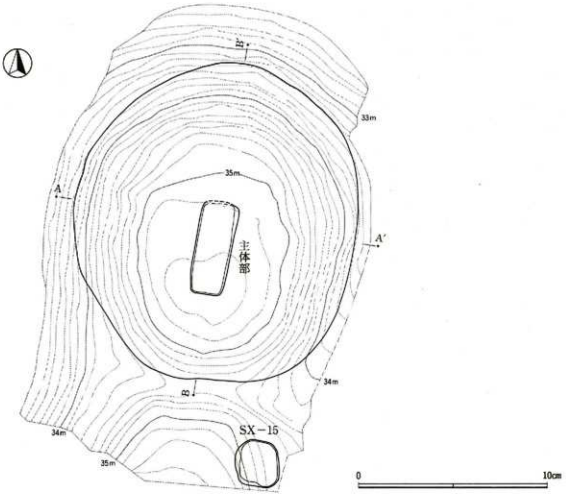
第49図　SX－6出土遺物（3）

7．SX－7（第50～56図）

SX－1～6の位置する丘陵の西側の丘陵の北端の9G・9H・10G・10Hグリッドに位置する。南北に長軸をとるやや楕円形を呈する円墳で，規模は長径17m，短径15mを測る。地山をなだらかに削り出して整形されており，旧表土は現状では確認することができない。盛土は斜面に若干認められるのみで，主体部を覆う層は表土化している。周溝は検出されなかった。墳丘裾部から主体部検出面までの高さは約2.1mを測る。

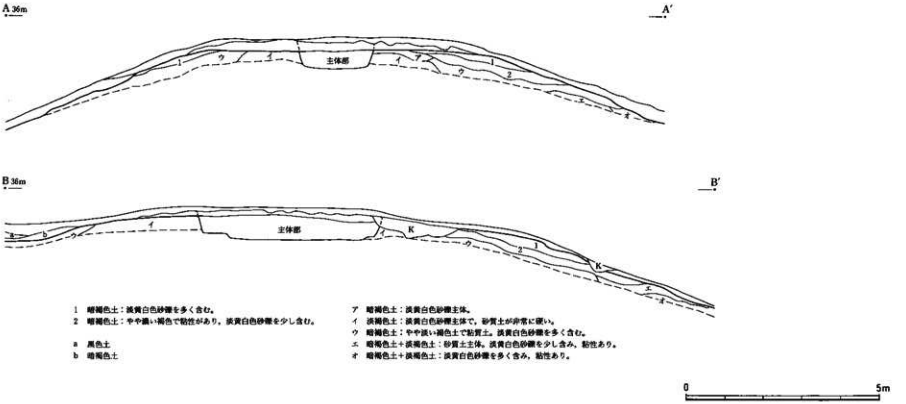


第50図　SX－7調査前測量図

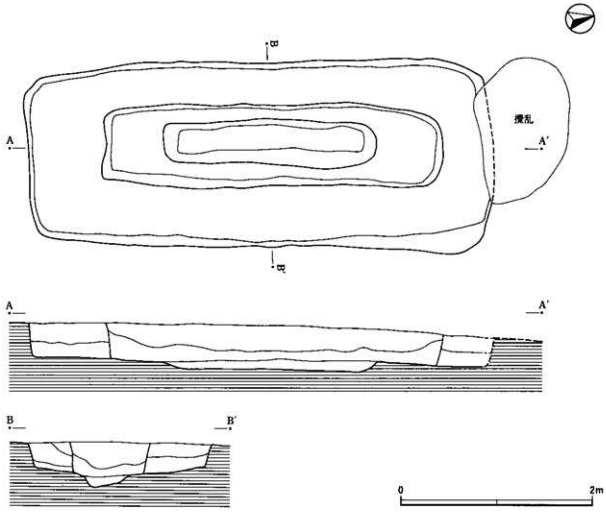


第51図　SX－７平面図

埋葬施設は墳丘のほぼ中央で，主軸方位を南北におく木棺直葬の主体部が検出された。墓坑の掘方は4.9m×1.8m～２mの隅丸長方形を呈する。木棺痕跡は3.5m×0.8mの隅丸長方形を呈する。さらに墓坑中央部には，2.25m×0.45mの掘込みを有する。断面観察によって，墓坑底面掘込みに淡黄白色砂粒を含む暗褐色土を敷いた後木棺を設置し，木棺の固定には暗褐色土が用いられていたことが分かる。



第52図　SX－7 墳丘断面図



第53図　SX－7主体部

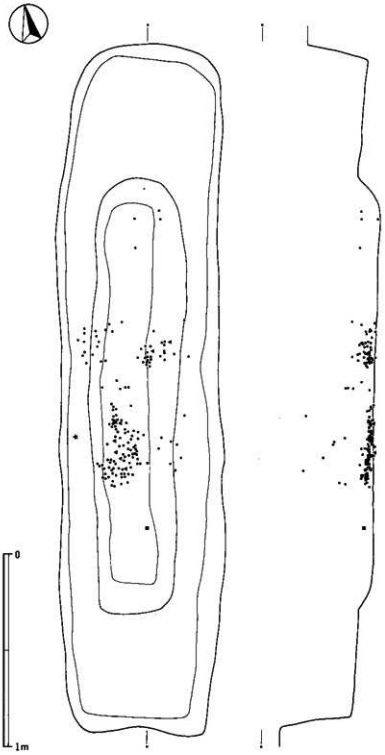
遺物は木棺内のほぼ中央から玉類が出土したのみである。そのほか，土師器・須恵器の破片が，墳丘中から出土しているが，量は極めて少なく，図示できるものもない。

1～140はガラス玉である。ガラス玉は破片も含めて145点出土しているが，このうち140点を図示することができた。径4㎜～7㎜前後と他の古墳出土のものと比べてやや大型である。色調は，1点の紺を除いて青である。

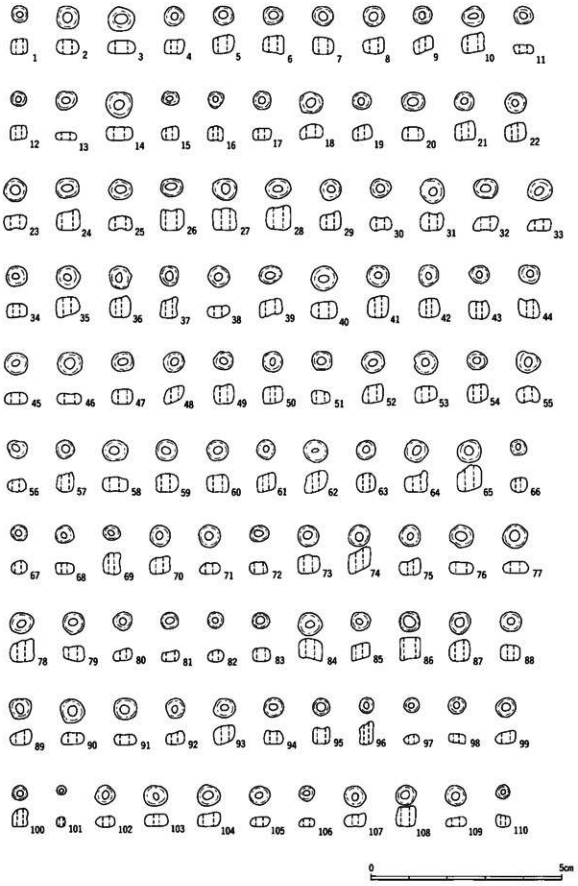
141・142は滑石製の管玉である。重さは0.65・0.41ｇを測る。

143～145は緑色凝灰岩製の管玉である。いずれも風化が著しく，144・145は両端を欠いている。重さは，0.27・0.15・0.14ｇを測る。このほかに緑色凝灰岩製の管玉の破片が2点出土している。

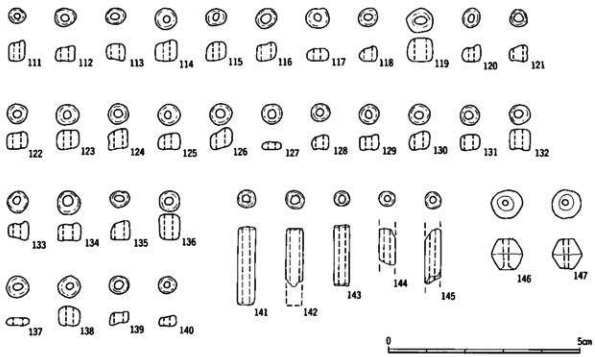
146・147は水晶製の切子玉である。片面から穿孔される。重さは0.55・0.53ｇを測る。



第54図　SX－７主体部遺物出土状況



第55図　SX－7出土遺物（1）



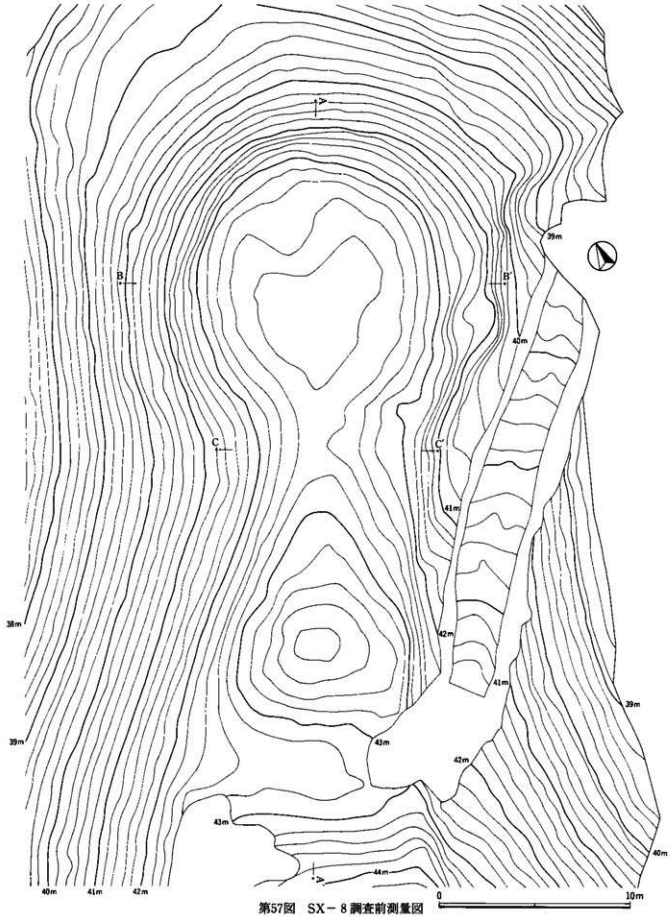
第56図　SX－7出土遺物（2）

8．SX－8（第57～68図）

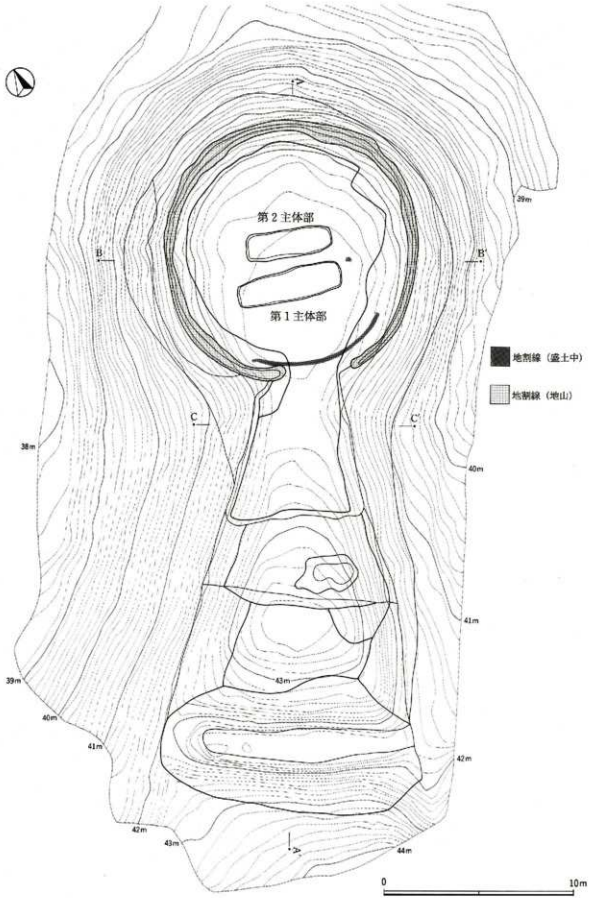
SX－7の南約24mの11G～13G・11H・12H・13Fに位置する。調査区内に所在する唯一の前方後円墳である。周溝は前方部の前面のみに確認でき，その他の部分は基本的に地山の削出しによって整形され，盛土が行われている。周溝の幅は約6.5m，前方部旧表土上面からの深さは約1.2mを測る。墳丘は拡張を行っている様子も窺えるが，最終的な規模は周溝内側下端～後円部墳丘裾間で全長33.5m，前方部長18.5mを測る。周溝外側上端～後円部墳丘裾間では全長37.7m，前方部長22.8mである。本古墳では，地山面と盛土上に，古墳築造に伴うとみられる地割線が検出された。

土層断面の観察などにより本古墳の形成過程を復元してみると，まず前方部と後円部の地山を削り出し，前面に幅約5m，旧表土上面からの深さ約0.7mほどの古い周溝を造る。その際西側には，テラス状の平坦面が造り出されている。そして後円部の中段辺りに，幅0.3m～1m，深さ0.2m～0.3mほどの溝を正円形に巡らせる。この溝の中には黒色土が充塡され，さらに土堤状に盛り上げられている。これをもって仮に地割線（地山）と称することとする。そしてその内側部分に暗褐色土や黒褐色土を盛り，後円部の平坦面を広げ，さらにその上に暗黄褐色砂質土を厚く平らに盛って，もともと標高の低い後円部を前方部と同じ高さに均して造成する。この時点での古墳の全長は，周溝内側下端間で20.7m，外側上端間で25.7mである。また，後円部墳丘径は，溝内側下端間で13.2mである。

そしてこの暗黄褐色砂質土の盛土層上面に，さらに区画が施される。これは幅0.2m，深さ0.1mほどの円弧状の溝に黒色土を土堤状に盛り上げたもので，前方部と後円部の境界部のみにしか検出されず，径は地山面のものよりもやや小さい。なお，後円部を東西に横断する断面（B－B′）で，この地割線と同規模の部分的な窪みと黒色土の堆積が観察されたが，平面的には明らかでない。これらをもって仮に地割線（盛土中）と称することとする。主体部は2基とも，この暗黄褐色砂質土層に掘り込まれている。



第57図　SX－8 調査前測量図


第２主体部
第１主体部
A
A'
B
B'
C
C'
地割線（盛土中）
地割線（地山）
39m
38m
40m
41m
42m
43m
44m
0
10m

第58図　SX－８平面図

墳丘はこの後，前方部，後円部ともに拡張が行われているようであり，削り出された地山面に暗黄褐色土や暗褐色土が盛土されている。後円部横断面（B－B′）ではその境界，すなわち地割線（地山）上に連続して墳丘に沿って立ち上がるような幅0.1m～0.3mの帯状の黒色土層が検出されており，拡張時に土留めなどが行われた際の痕跡を示す可能性がある。しかしながらその平面的な広がりは調査では把握することができず，また黒色土層の分層も明確には成し得なかった。

幅の拡張と同時に，長さの延長も行われている。古い周溝は黄褐色土や黒色土で人為的に埋め戻され，後円部を平らに造成したのと同じ暗黄褐色砂質土がその上に盛られている。そして4.5mほど離れた先には，新しく周溝が掘り直されている。さらに，前方部から地割線（盛土中）の辺りまでは褐色砂質土が，主体部のある後円部には黒色砂質土や暗褐色砂質土が盛土され，最終的に後円部より前方部のほうが標高が約１m高い前方後円墳の完成をみることとなる。

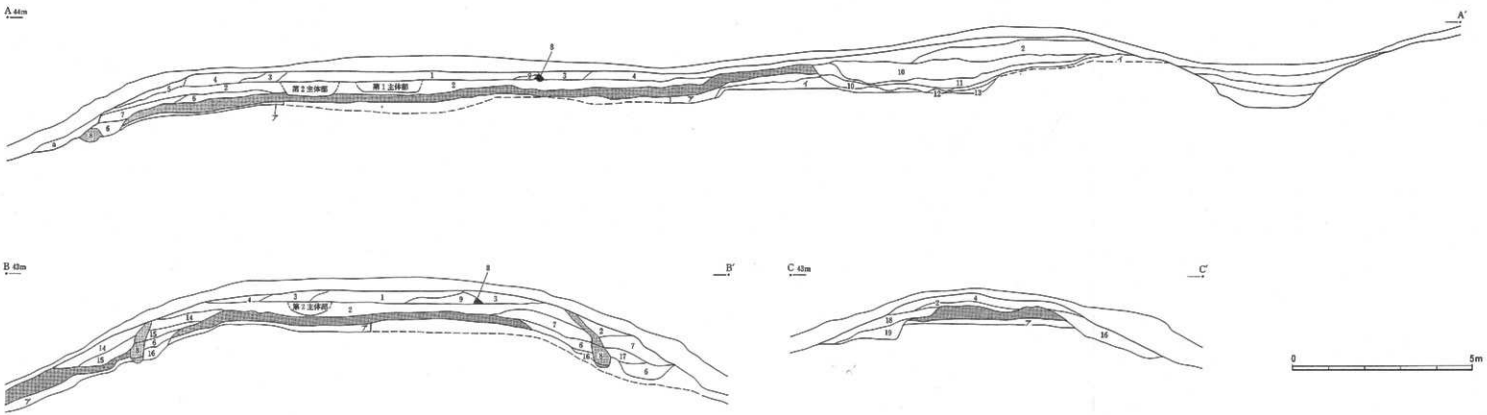
最終的な後円部の墳丘径は，東西墳丘裾間で17.4mを測る。また，盛土の高さは前方部，後円部ともに約0.7m，後円部の墳丘裾から盛土上面までの高さは約2.1m，周溝底面から前方部盛土上面までの高さは約1.9mを測る。

埋葬施設は後円部のほぼ中央で，主軸方位を東西におく木棺直葬の主体部が２基検出された。検出した２基のうち，南側のものを第１主体部，北側のものを第２主体部とした。

第１主体部の墓坑の掘方は5.5m×1.4m～1.8mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.15mを測る。木棺痕跡は4.9m×0.8m～0.9mの長方形を呈し，棺底からは木棺の固定に用いられた黄白色粘土が検出された。この粘土には赤褐色の木質が付着しており，木棺の一部と考えられる。また，底面の状況から木棺は割竹形あるいは舟形であった可能性も考えられる。遺物は木棺痕跡のほぼ中央やや東寄りで，耳環３点と玉類の集中が認められ，その西側から刀子・直刀・鉄鏃・刀子の順で出土している。この耳環は錫製で，腐蝕が著しく，原形をとらえることができない。

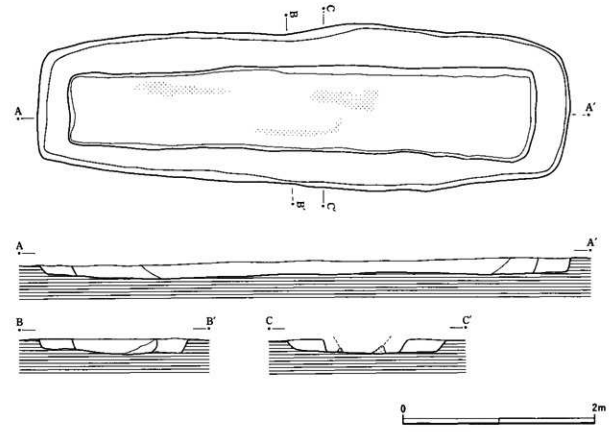
第２主体部の墓坑の掘方は4.5m×1.5mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.2mを測る。木棺痕跡は3.5m×0.7mの隅丸長方形を呈する。掘方内からは黄白色粘土塊が検出された。断面観察によって，墓坑底面に直接木棺を設置し，木棺の固定には赤褐色砂礫土と粘土が用いられていたことが分かる。遺物は木棺のほぼ中央やや東寄りで，玉類の集中とともに，刀子と鉄鏃が出土し，やや離れた西側では，刀子が出土している。さらに墓坑掘方内から鉄鏃が出土している。

主体部以外では，後円部の墳頂から須恵器が集中して出土している。図示した６点の須恵器はすべて後円部墳頂から出土したものである。１の大甕は12G－37・38・47・48グリッドというやや広い範囲から300点ほどの細片となって出土した。２・８・９の３点も12G－37・38・47・48グリッドから出土したものであるが，出土した範囲は狭い。以上の４点の出土位置は第１主体部の直上にあたる。３は12G－39グリッド，４は12G－28グリッドから出土したもので，これは第２主体部の東側にあたる。なお，５・６の土師器杯は後円部の南西側から出土したものである。

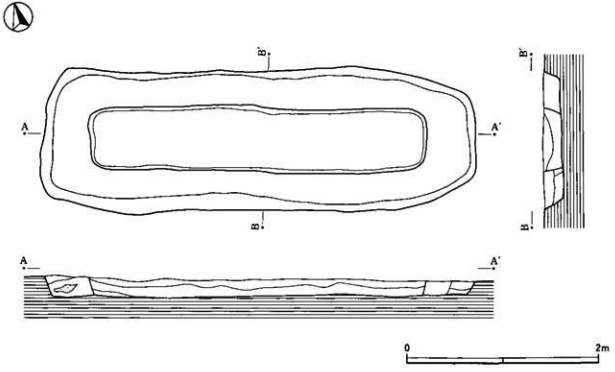


1 黒色砂質土（Mの根が多く分層不可能）
2 暗黄褐色砂質土
3 暗褐色砂質土
4 褐色砂質土：礫を含む。
5 暗褐色～暗黄褐色砂質土
6 黒褐色土
7 暗褐色土：砂礫を含む。
8 黒色土
9 褐色砂質土
10 黄褐色土：黄白色砂礫・黄白色粘土主体。黄白色砂粒，褐鉄鉱を多く含む。
11 黄褐色土＋黒色土：黄褐色土主体，黒色土を含む。
12 黒色土：黄褐色土を少し含む。
13 黄褐色土：黒色土を含む。
14 暗黄褐色土：砂礫を含む。
15 暗褐色～黒褐色土
16 暗褐色砂質土
17 暗褐色土：砂礫を含む。
18 暗褐色土：黄白色砂礫を少し含む。
19 黒褐色土：やや粘性があり，18層より色が濃い。
a 暗赤褐色砂質土
ア 暗褐色砂質土
イ 黄褐色土：黄褐色～赤褐色砂質土を含む。

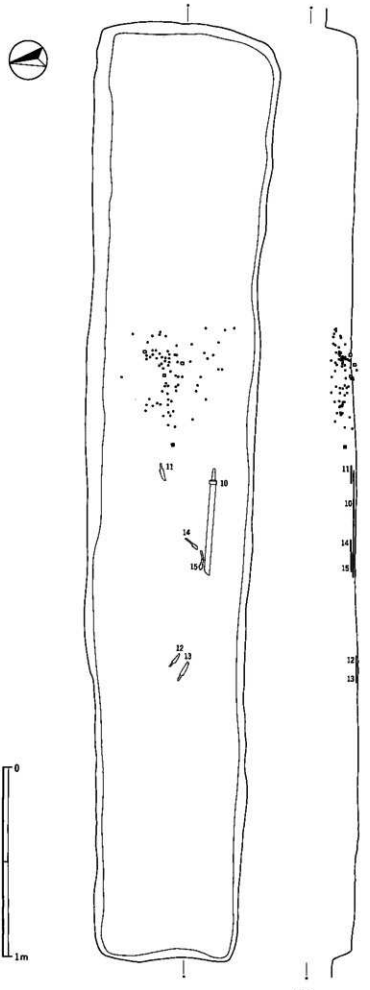
第59図　SX－8墳丘断面図



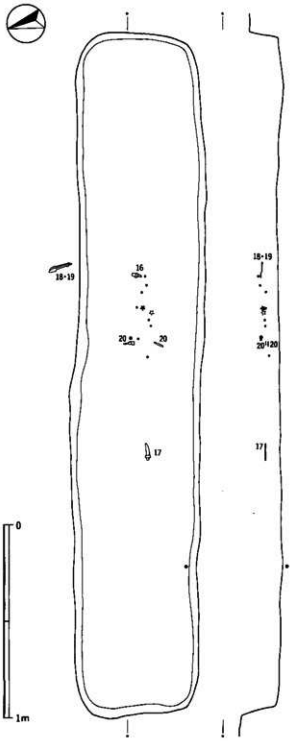
第60図　SX－8第1主体部



第61図　SX－8第2主体部



第62図　SX－8第1主体部遺物出土状況



第63図　SX－8第2主体部遺物出土状況

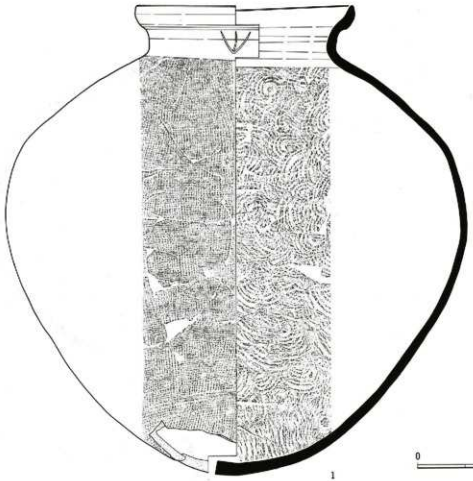
1は大甕である。70%ほどが遺存する。胴部には格子状のタタキ後ヨコ方向のカキ目調整が加えられる。頸部外面にはヘラ記号が認められる。胎土に2㎜～4㎜前後の長石粒を含む。灰色を呈する。底部には焼成後の穿孔が認められる。2は横瓶で，全体の70%ほどが遺存するが，口唇部は欠失している。体部はタタキ後タテ方向のカキ目調整が加えられるが，部分的にナデによって磨り消されている。外面上半にはわずかに自然釉が認められる。胎土に1㎜～2㎜前後の長石粒を含む。灰色～暗灰色を呈する。3は無蓋長脚高杯である。80%ほどが遺存する。脚部は中位の2条の沈線によって上下に区画され，上下に長方形の透孔が3方向に開けられる。胎土には砂粒を含む。色調は暗灰色を呈する。4は無蓋短脚高杯である。50%ほどが遺存する。杯部下半は回転ヘラケズリされる。胎土は緻密で，暗灰色を呈する。5・6は土師器の杯である。いずれも内外面共磨滅が著しく，調整の観察は難しいが，口縁部はヨコナデされる。7は土製紡錘車である。8・9は60%ほどが遺存する横瓶である。いずれも口頸部は体部の中央部付近に付けられ，頸部は短い。8の胴部には格子状のタタキ目が施されるが，部分的にナデによって磨り消される。灰褐色～暗灰色を呈する。9の胴部には平行タタキ目後タテ方向のカキ目調整が加えられるが，部分的にナデによって磨り消されている。外面上半にはわずかに自然釉が認められる。胎土に1㎜～3㎜前後の長石粒を含む。灰色～灰褐色を呈する。

10～20は鉄製品で，10～15は第1主体部，16～20は第2主体部から出土した出土したものである。

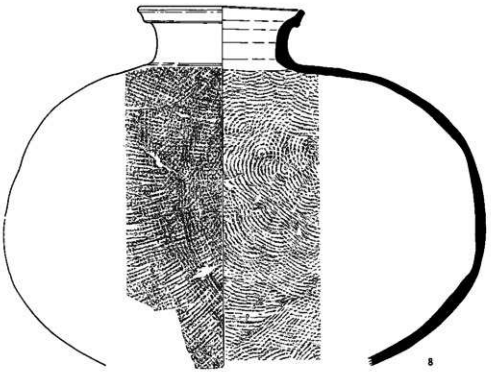
10は直刀と鉄鏃とみられる鉄製品の錆着したものである。直刀は切先から茎尻まで，若干の破損はあるもののほぼ完全に遺存しており，鉄製の鎺が装着されている。関は両関とみられ，鎺の外側に位置する背側の関は直角関であるが，鎺の内側に位置する刃側の関の形状は明らかにならない。茎には目釘が関から約6cmのところに1か所認められる。また，関から約4.5cmの位置にも柄木に目釘孔かと思われる丸い孔が開いているが，X線写真では確認することはできない。茎部の厚さは刃側がやや薄い。茎尻は隅切である。この直刀の中ほどには，大きな銹膨れの中に取り込まれて，折れた鉄鏃の篦被部とみられる棒状の鉄製品が2本，X線写真で確認できる。また直刀の先端部には，やはり銹膨れによって明らかにはならないものの，平織りの布が2枚重なって付着しており，その内側には直刀本体とは異なる鉄地の破断面が観察される。これらは2本の鉄鏃の鏃身部とみられ，布はこれらを巻き込んだものであるらしい。棒状の鉄製品と同一個体かどうかは明らかでない。また，これが鉄鏃を入れた胡録であったのか，鉄鏃のみ或いは直刀とともに布で巻いたものなのかは明らかでないが，直刀の鞘木は確認できず，このようなものが直刀に付着しているということから，直刀は抜身で副葬されていたものと考えられる。

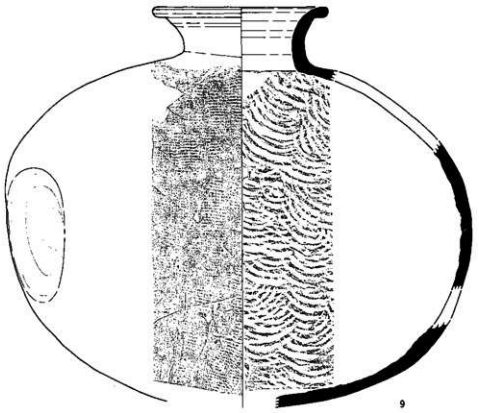
11～13・16・17は刀子である。11は柄の木質の上に鉄製の鎺が少し遺存しており，背側，刃側の関はともにその外側に位置するとみられる。茎部の上には全体的に木質が遺存しており，茎尻は栗尻とみられる。12は小型の刀子である。茎部に薄く柄の木質が遺存している。13は，柄の木質が少し遺存する。関は両関である。茎尻は銹に覆われているが，栗尻状とみられる。16は，刃部のほとんどを欠損しているが，柄木の表面が遺存しており，その上に鉄製の鎺が装着されている。関は背側・刃側ともに鎺の外側に位置している。茎部の厚さは，刃側がやや薄い。17も鉄製の鎺が装着されているものである。関は背側と刃側にあり，いずれも鎺の外側に位置している。

14・15・18・19は鉄鏃である。14は，遺存状態が悪く，全体が銹によって著しく膨張している。接合しない2破片であるが，同一個体と考えられる。鏃身部の断面形は片丸とみられるが，本来はもっと薄かった可能性が高い。関は欠損していて不明である。篦被部も，下部が遺存しているが棘状突起の直下で折損

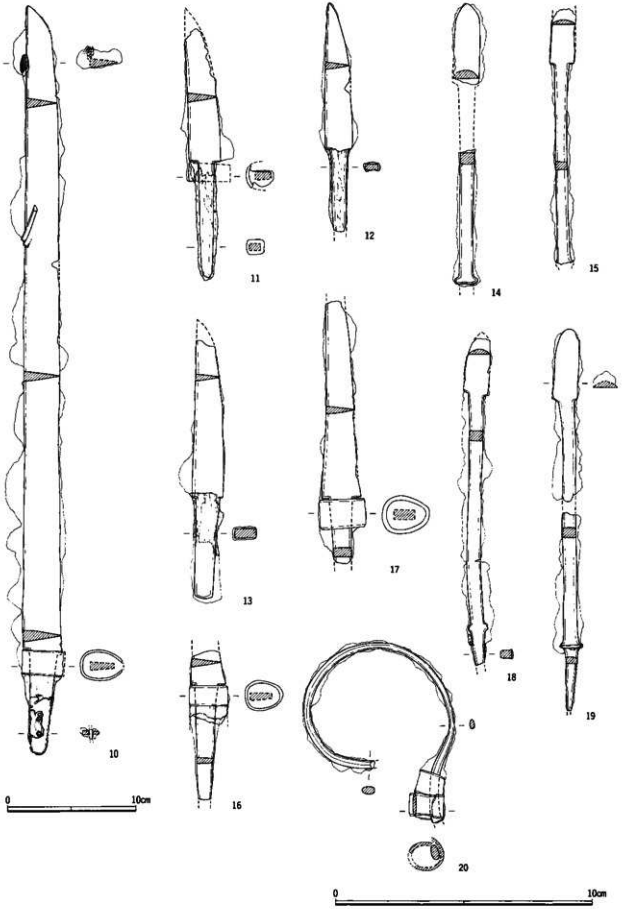


第64図　SX－8出土遺物（1）

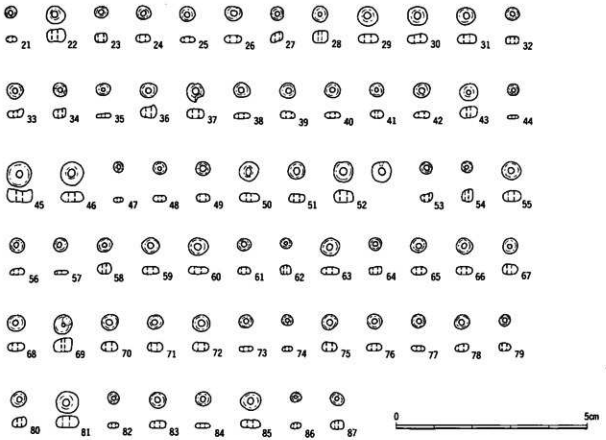




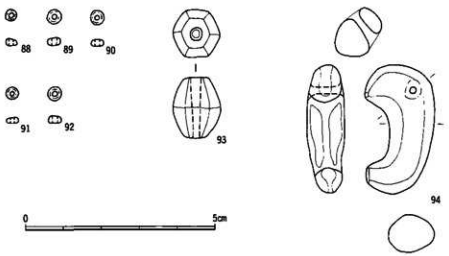
第65図　SX－8出土遺物（2）



第66図　SX－8出土遺物（3）



第67図　SX－8出土遺物（4）



第68図　SX－8出土遺物（5）

している。口巻とみられる繊維が僅かに遺存している。15の鏃身部は片丸造で，関は直角～鈍角とみられる。下端は棘状突起部で折損している。18の鏃身部は，片丸造である。関の位置は左右で若干ずれるようである。棘状突起を持ち，茎部には矢柄の木質が僅かに遺存する。19は接合しない2破片であるが，同一個体と考えられる。鏃身部は銹がひどいが，片丸造とみられる。関はやや鈍角である。棘状突起の部分に矢柄の口巻とみられる繊維が僅かに遺存しているのが観察される。茎部の端部は僅かに欠損している。

20は，鉄鏃である。現状では変形して数片に破損しているが，もともとは円形の鉄鏃に2つの小環が通された形状のものであったと考えられる。鏃の断面形は長楕円形を呈するようであるが，部分的にその大きさが一定でないのは銹による膨張のためと考えられる。小環はそれぞれ，細い板状の鉄片を丸めて鏃に絡めるようにして取り付けられている。鏃の復元外径は5.5cm，復元内径は4.9cm，断面径は0.4cm×0.2cm～0.5cm×0.4cmを測る。小環は，図下部のものについては幅1.0cm，外径1.3cm，厚さ0.2cm，上部のものについては幅0.8cm，外形1.1cmを測る。全体の重さは10.7gである。

21～87は第1主体部から出土したガラス玉である。ガラス玉は破片も含めて79点出土しているが，このうち67点を図示することができた。径3㎜～5㎜前後のものである。色調には，青・赤・黄・紺などがある。

88～94は第2主体部から出土したもので，88～92はガラス玉である。ガラス玉は破片も含めて9点出土しているが，このうち5点を図示することができた。径3㎜～4㎜前後のものである。色調には，黄・紺・緑がある。

93は水晶製の切子玉である。片面から穿孔される。重さは2.94gを測る。94は瑪瑙製の勾玉である。研磨が十分でない部分も多く，作りはやや粗雑である。重さは33.3gを測る。

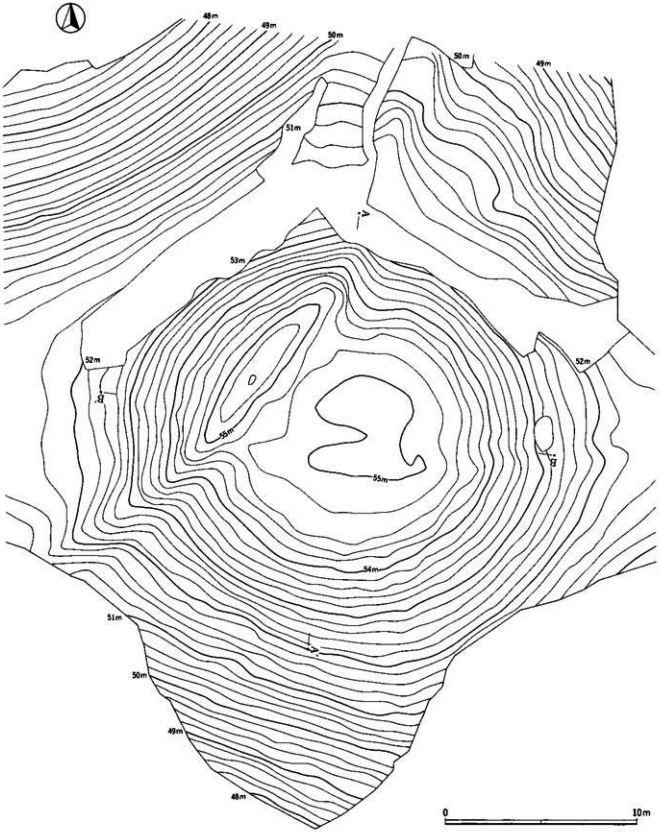
9．SX－9（第69～78図）

SX－8の南約30mの15F・15G・16F・16Gグリッドに位置する。西側にテラス状の張出しの見られる円墳である。地山を削り出して整形されており，古墳の西側から南側にかけての裾部には，幅0.4m～1mを測る平坦なテラスが造り出されている。規模は，テラス部の下端から径20.5mを測る。周溝は検出されていない。旧表土上には，暗褐色土，黒褐色土，黄白色粘土などが盛土されている。盛土の高さは約0.4m，墳丘裾部から盛土上面までの高さは約2.3mを測る。

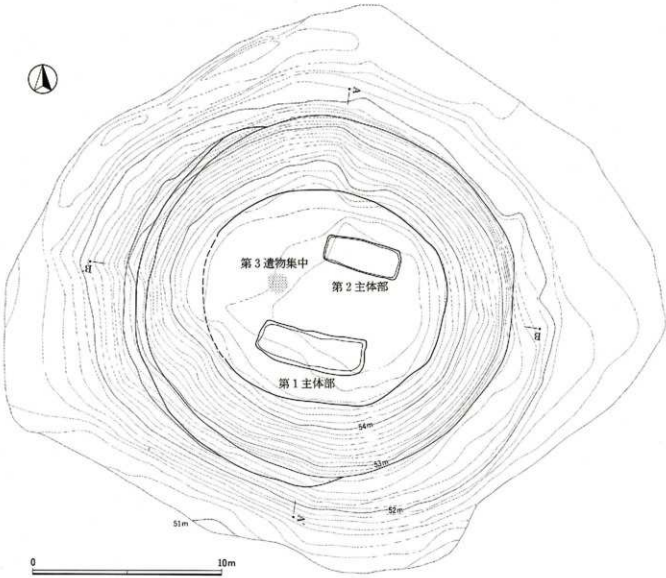
埋葬施設は墳丘のほぼ中央で，主軸方位をほぼ東西におく木棺直葬の主体部が2基検出された。検出した2基のうち，南側のものを第1主体部，北側のものを第2主体部とした。

第1主体部の墓坑の掘方は5.7m×1.8m～2.1mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.45mを測る。木棺痕跡は3.5m×0.85mの隅丸長方形を呈し，両小口部分からは木棺を固定するための黄白色粘土塊が検出された。遺物は木棺のほぼ中央やや東寄りで，直刀と耳環1点が出土し，その周辺には玉類の集中が認められた。この耳環は錫製で，腐蝕が著しく，原形をとらえることができない。

第2主体部の墓坑の掘方は4m×1.7mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.15mを測り，全体の遺存状況は不良である。木棺痕跡は2.3m×0.8m～0.95mの隅丸長方形を呈する。断面観察によって，墓坑底面に黒褐色土を敷いた後木棺を設置していたことが分かる。遺物は木棺のほぼ中央やや東寄りで，直刀が出土し，その北側で鉄鏃，南側で刀子が出土している。



第69図　SX－9調査前測量図

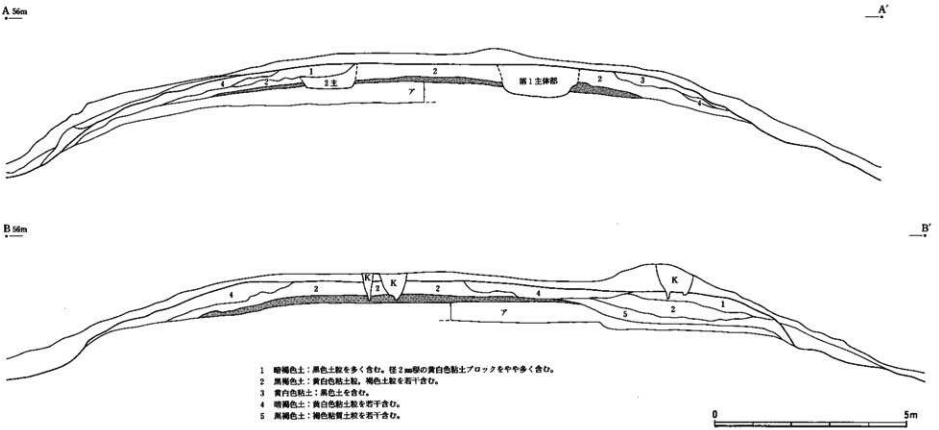


第70図　SX－９平面図

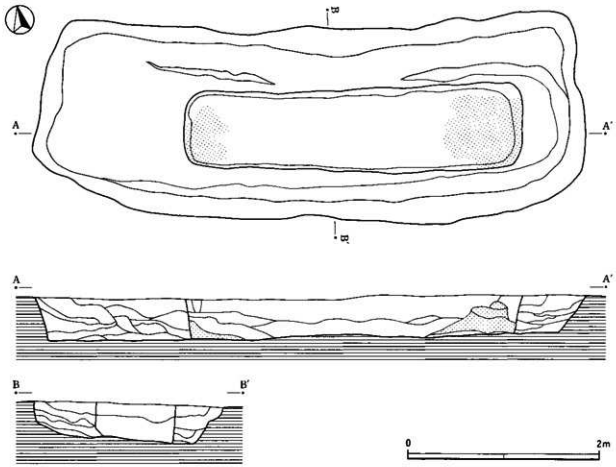
さらに，第１主体部と第２主体部の中間の西側，16Ｆ－36グリッドの表土下の暗褐色土中から，ほぼ同レベルで刀子１点と鉄鏃２点が出土している。調査時には第３遺物集中として調査を行った。遺物の出土以外の根拠はないが，その出土状況からして，主体部の存在を考えることもできよう。

なお，墳頂部の表土からは雲珠・轡などの馬具が出土していたが，取り上げ前に盗難にあい，現存していない。

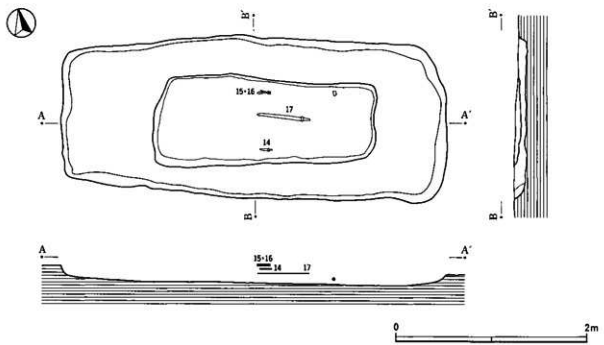
主体部以外では，墳頂部と墳丘裾部から須恵器が出土している。１は墳丘南西側テラスから出土したもので，８も表土一括取り上げのものであるが，南側テラス出土のものである。２・６は墳丘西側裾部から出土したものである。３～５・７・12は墳丘東側裾部から出土したものである。９は第２主体部の周辺から，10・11は第１主体部の直上にあたる位置から出土したものである。



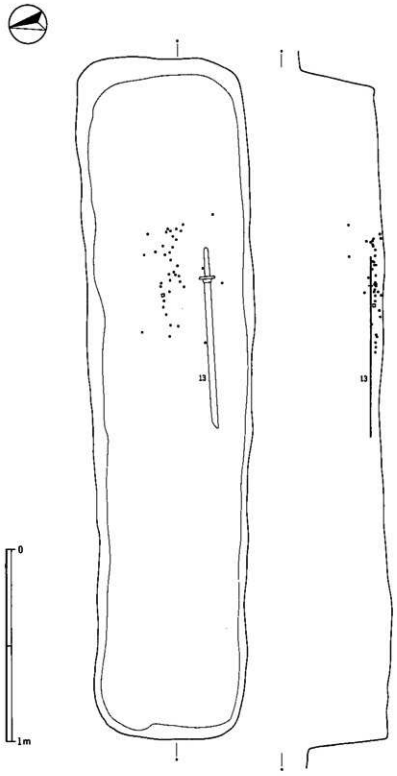
第71図　SX－9 墳丘断面図



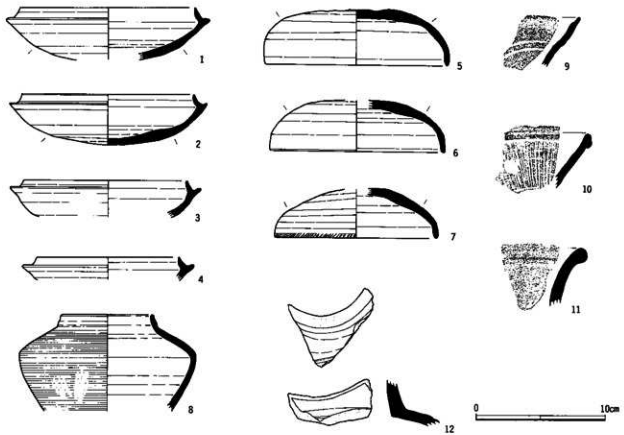
第72図　SX－9第1主体部



第73図　SX－9第2主体部



第74図　SX－９第１主体部遺物出土状況

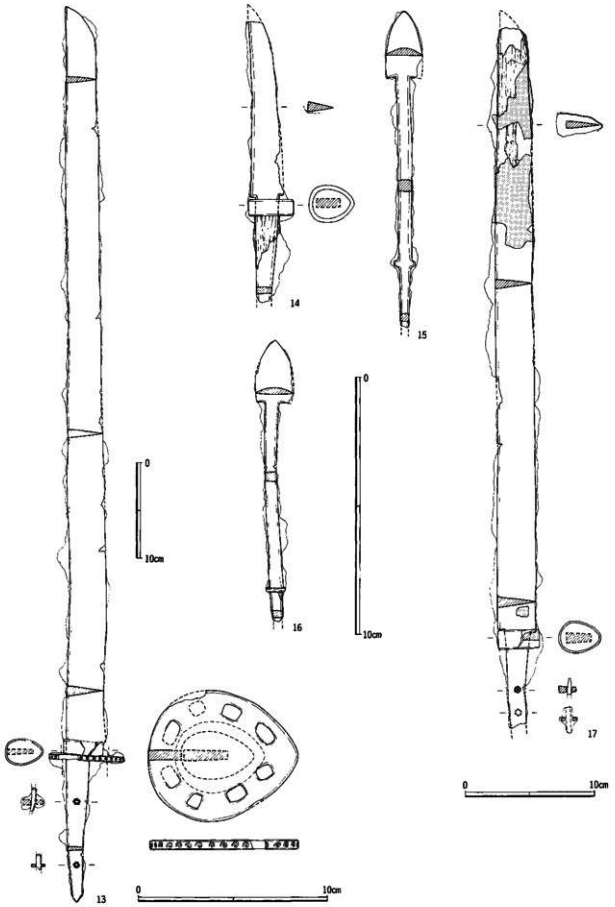


第75図　SX－9出土遺物（1）

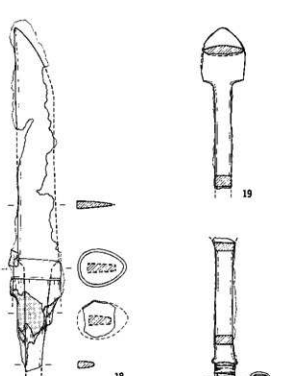
1～4は杯身である。いずれも体部下半は回転ヘラケズリされる。1の胎土には1㎜～3㎜前後の長石粒を含む。いずれも焼成は良好で，1・4は灰色，2は赤灰色，3は青灰色を呈する。5～7は杯蓋である。いずれも天井部は回転ヘラケズリされる。7の口唇部にはヘラ描の刺突列点文が施される。6・7の胎土には1㎜～2㎜前後の長石粒を含む。5の天井部外面にはヘラ記号が認められる。いずれも焼成は良好で，青灰色を呈する。8は短頸壺で，外面はカキ目調整される。9は甕の口縁部で，外面にはヘラ描の刺突列点文が施される。10・11は甕の口縁部で，10の外面にはヘラ描の沈線文が施される。12は平瓶の頸部破片である。自然釉が付着する。

13～20は鉄製品で，13は第1主体部，14～17は第2主体部，18～20は第3遺物集中から出土したものである。

13・17は直刀である。13は，鉄製の鎺と，耳に銀象嵌のある鍔が装着されている。折れて幾つもの破片になっているものの，切先から茎尻までほぼ全部遺存している。関は刃側のみとみられるが，その形状は鎺と錆に阻まれ明らかでない。また，関の先端はごく一部欠損しているようである。茎には関から6cm，13cmのところにそれぞれ目釘がある。2本とも目釘の断面形は四角形である。茎の厚さは刃側がやや薄く，茎尻は隅切である。鍔は，錆のため不明な部分もあるが，八窓で倒卵形を呈する。外径は7.9cm×6.8cmを測る。内径は錆のため計測できない。厚さ0.5cmの外縁に沿って，「e」字状の銀象嵌が全周施されている。柄木や鞘木は遺存していないが，鍔の表裏面にそれぞれの痕跡が線状に観察され，幅を復元することが可能である。17は鉄製の鎺が装着されるものである。関は両関とみられ，背側は鎺の外側に位置するが，刃



第76図　SX－９出土遺物（２）



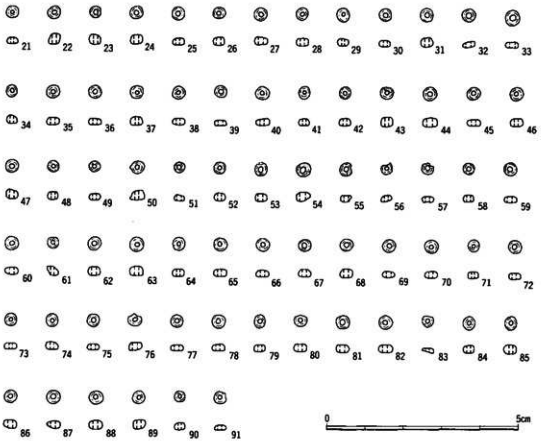
第77図　SX－9出土遺物（3）

側は内側に位置し，形状は明確にならない。茎には，関から約4.5cm，6.5cmの近接した位置に2本の目釘が認められる。関に近い方の目釘は上部が先端まで遺存しているようである。関から遠い方の目釘は肉眼でははっきりせず，X線写真からの復元である。茎の厚さは刃側がやや薄くなる。茎尻は欠損している。刃部には鞘木が遺存しており，鞘木の上と，一部鎺の上に樹脂膜（トーン部分）が認められる。樹脂膜は図の裏面では確認できない。

14・18は刀子である。14は鉄製鎺が装着されるものである。関は両関で，いずれも鎺の外側に位置している。鞘木と柄木の木質が少し遺存している。18は柄木の表面が遺存しており，鉄製鎺が装着されている。関は両関とみられるが，いずれも鎺の中に位置し，形状を確認することはできない。刃部は銹による膨張・破損が著しく，鞘木は確認できない。柄木の上には樹脂膜（トーン部分）がみられ，柄木のコーティングとも思われるが，一部は鎺および刃部の上にもみられることから，革袋状のものに包まれていたものかもしれない。茎部の厚さは刃側がやや薄くなる。

15・16・19・20は鉄鏃である。15・16の鏃身部は三角形状を呈し逆刺を持つ。断面は片丸である。いずれも棘状突起を持つ。16は，銹や破損などではっきりはしないが，関の形状は左右で非対称となるようである。また，棘状突起の上に矢柄の木質と口巻が若干遺存している。19の鏃身部は三角形状であるが，ややふくらが角ばり類五角形状を呈する。断面はレンズ形とみられる。関の形状はやや緩やかである。20は篦被部と棘状突起を持ち，茎部には口巻がみられるが，遺存部上端が断面四角形のまま広がっていく形状で破損しており，鉄鏃ではなく鑿やたがねなどの工具の類であると考えられる。

21～91は第1主体部から出土したガラス玉である。ガラス玉は破片も含めて84点出土しているが，このうち71点を図示することができた。径3㎜～4㎜前後のものである。色調は青が大半で，一部うすい紺を呈するものがある。



第78図　SX－9出土遺物（4）

10. SX－10（第79～86図）

SX－9の北西約33mの15C・15Dグリッドにかけて位置する。径13.5mを測るやや不整円形の円墳である。地山を削り出して整形されており，旧表土上には暗褐色土が盛土されている。東側に周溝とみられる部分が認められる。周溝の幅は約2.7m，深さは30cmほどである。盛土の厚さは約0.5m，周溝底面から盛土上面までの高さは約1.9mを測る。

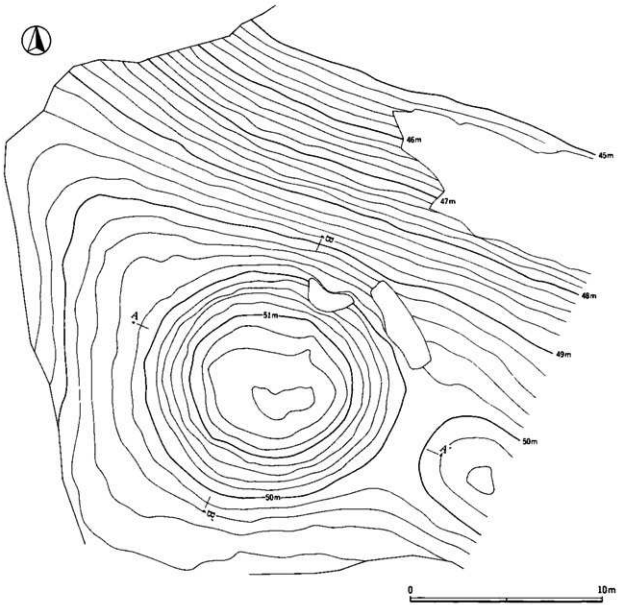
埋葬施設は墳丘のほぼ中央で，いずれも主軸方位を東西におく木棺直葬の主体部が3基検出された。検出した3基のうち，南側のものを第1主体部，北側のものを第2主体部（新）とし，第2主体部（新）の下から検出されたものを，第2主体部（古）とした。このうち，重複関係から，第1主体部は第2主体部（古）より新しいことは明らかである。しかし，第1主体部と第2主体部（新）との新旧関係は不明である。

第1主体部の墓坑の掘方は5.1m×1.95m～2.1mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.2mを測る。木棺痕跡は4.1m×0.8mの隅丸長方形を呈する。断面観察によって，墓坑底面に直接木棺を設置し，木棺の固定には黄白色粘土ブロックを含む暗褐色土が用いられていたことが分かる。遺物は棺内のほぼ中央から鉄鏃の破片がまとまって出土している。

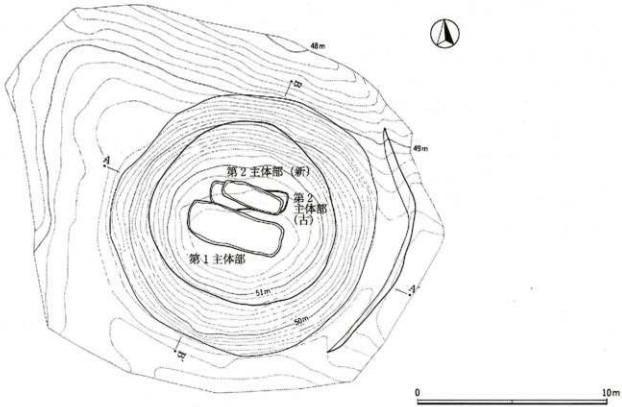
第２主体部（新）の墓坑の掘方は3.3m×1.2mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.2mを測る。木棺痕跡は2.5m×0.9mの隅丸長方形を呈する。断面観察によって，墓坑底面に直接木棺を設置し，木棺の固定には黄白色粘土をわずかに含む暗褐色土が用いられていたことが分かる。遺物は棺内西側から金銅製の耳環２点と鉄製品の破片が出土している。

第２主体部（古）の墓坑の掘方は4.15m×1.15m～1.35mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.1mを測る。墓坑の中央やや西側に径0.4m，深さ５cmほどの小ピットが検出されているが，性格は不明である。木棺痕跡は平面的には確認できなかった。断面観察によって，墓坑底面に直接木棺を設置し，木棺の固定には黒色土が用いられていたことが分かる。遺物は東側から刀子が２点出土している。

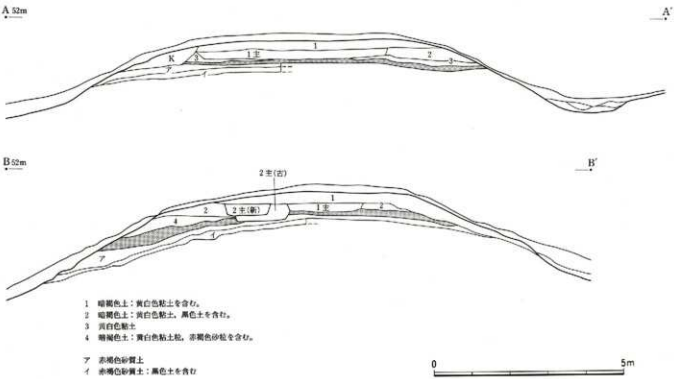
主体部以外では，墳丘の南西裾と南東の周溝内から須恵器が集中して出土した。１・３は南西裾，２・４～６は南東の周溝内から出土したものである。



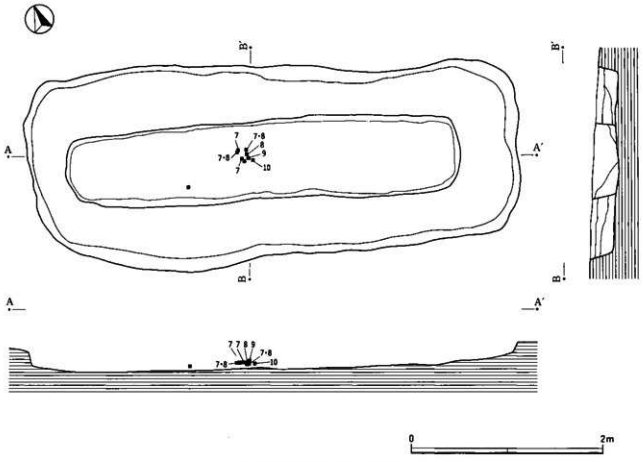
第79図　SX－10調査前測量図



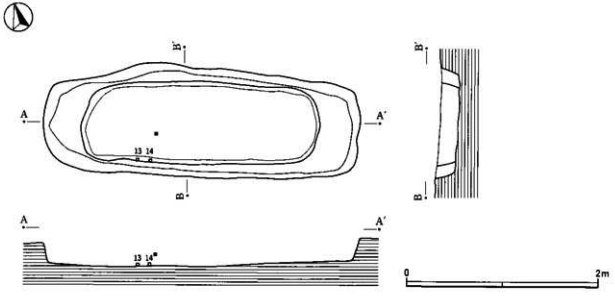
第80図　SX－10平面図



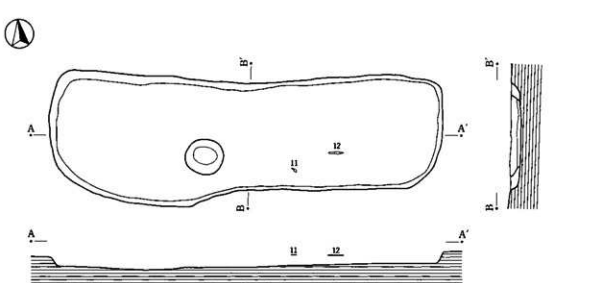
第81図　SX－10墳丘断面図



第82図　SX－10第１主体部



第83図　SX－10第２主体部（新）



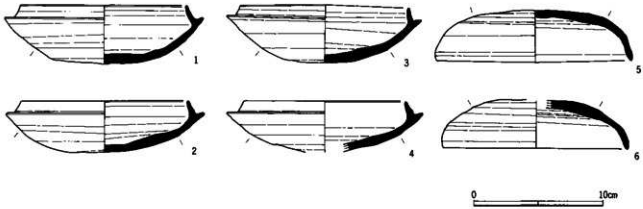
第84図　SX－10第２主体部（古）

１～４は杯身である。いずれも体部下半は回転ヘラケズリされる。１・２の胎土には１㎜～４㎜前後の長石粒を含む。いずれも焼成は良好で，１・３・４は灰色，２は青灰色を呈する。５・６は杯蓋である。いずれも天井部は回転ヘラケズリされ，胎土には１㎜～５㎜前後の長石粒を含む。いずれも焼成は良好で，５は灰色，６は灰白色を呈する。

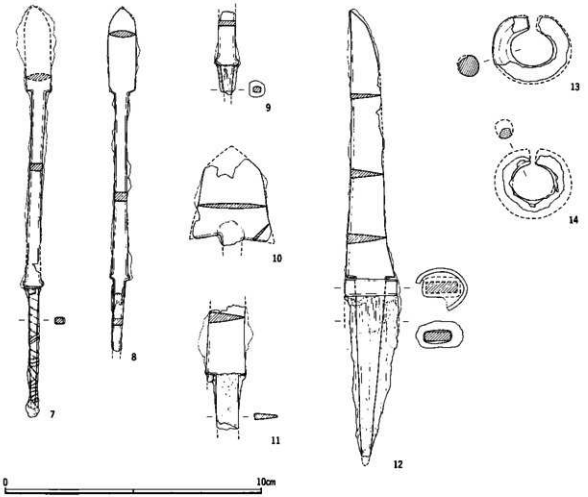
７～10は第１主体部から出土した鉄鏃である。７の鏃身部は錆膨れがひどく，形状や断面形ははっきりしない。関は直角とみられる。棘状突起の下には矢柄の木質と口巻の繊維が遺存している。また，長い茎部には樹皮などの巻かれているのが観察される。茎尻は木質が遺存していて形状が明らかでない。８の鏃身部の断面は，錆に覆われているがレンズ状とみられる。関は左側が若干欠損しているようだが，いずれもやや鈍角気味である。茎部には木質が若干付着する。棘状突起を持つ。９は篦被部下半から茎部の破片である。10と同一個体とは考えられないが，ほかに同一個体とみられる鉄鏃は出土していない。棘状突起を持ち，茎部には矢柄の木質が遺存している。10は三角形鏃であるが，鏃身部のふくらはやや角ばり類五角形状を呈する。断面は扁平なレンズ状である。柄の木質は残存していないものの，篦被部との境付近には，柄に挟まれていたらしい筋状の痕跡が表裏面に観察される。

11・12は第２主体部（古）から出土した刀子である。11は一部の遺存である。柄木の木質が茎部に付着しており，関の形状は肉眼でははっきりしない。茎部の厚さは，刃側が薄い。12は，比較的遺存状態のよい刀子である。柄木の上には鉄製の鋲が装着されており，背側・刃側の関はともに鋲の外側に位置している。茎尻は欠損するが，先端にいくほど細くなる。

13・14は第２主体部（新）から出土した金銅製耳環である。いずれもかなり腐食が進んでおり，全体に鈍い青緑色を呈している。内周部分を中心としたごく一部分に，辛うじて外形ラインが保たれており，あとはほとんど芯部分しか遺存していない。特に14は遺存状態が悪い。13は復元外径3.0cm×2.7cm，内径1.6cm×1.4cm，断面径0.9cm×0.8cm，重さ11.8ｇを測る。14は復元外径3.0cm×2.7cm，内径1.7cm×1.4cm，復元断面径0.6cm×0.6cm，重さ3.2ｇを測る。



第85図　SX－10出土遺物（1）



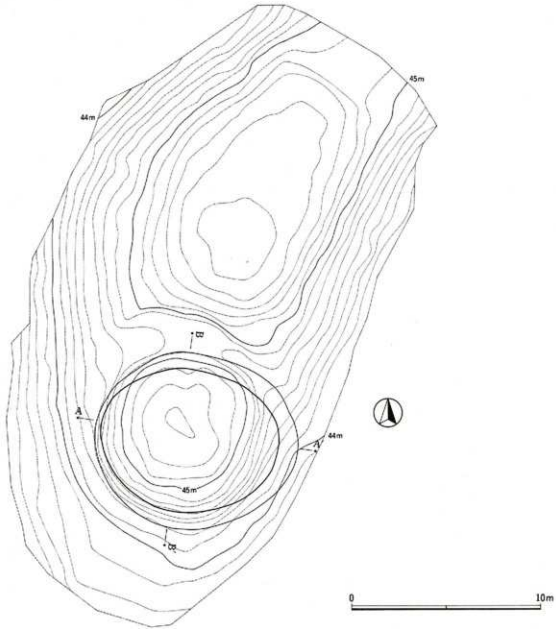
第86図　SX－10出土遺物（2）

11. SX－11（第87～89図）

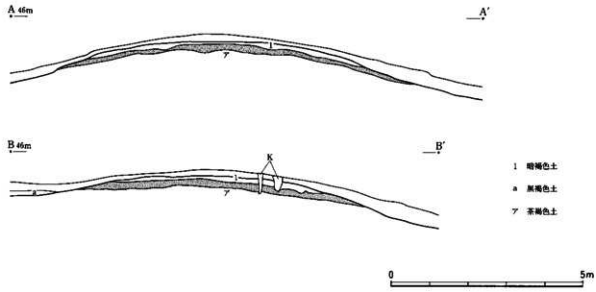
第87図　SX－11調査前測量図

SX-10の南西約55mの17B・18Bグリッドにかけて位置する。東西に長軸をとるやや楕円形を呈する円墳で，規模は長径10.7m，短径9.3mを測る。地山をなだらかに削り出して整形し，旧表土上に暗褐色土を盛土して構築されているようであるが，埋葬施設も検出されておらず，不明な点を残す古墳である。周溝も検出されていない。盛土の高さは約0.1m，墳丘裾部から盛土上面までの高さは約1.4mを測る。なお，本古墳の北側に墳丘状の高まりが存在するが，これは調査を行ったところ自然の地膨れであることが判明した。

遺物は墳丘内から土器の小片が少量検出されているにすぎず，図示できるものもない。



第88図　SX－11平面図



第89図　SX－11墳丘断面図

第1表　古墳一覧表

古墳番号	墳形	規　模	墳丘高	埋葬施設	埋葬施設出土遺物	墳丘・周溝内出土の主な遺物
SX－1	円	長径12.3m×短径10.8m	1.9m	削平？		須恵器杯・蓋・高杯，土師器壺・高杯，鉄鏃
SX－2	円	径13.5m	1.7m	木棺直葬2基	①なし ②直刀・鉄鏃	
SX－3	方	19m×18m	4m	木棺直葬2基	①鉄槍・鉄剣・刀子・鉄鏃，ガラス玉，鉄石英製管玉，緑色凝灰岩製管玉 ②土師器壺	土師器壺・器台
SX－4	円	径16m	2.1m	木棺直葬2基	①直刀・刀子・鉄鏃 ②刀子	須恵器提瓶・脚付長頸壺・甕，硬玉製勾玉
SX－5	円	長径9.6m×短径7.3m	1.3m	木棺直葬	直刀・鉄鏃，ガラス玉，碧玉製管玉，滑石製臼玉，土製丸玉，鍛製耳環	須恵器杯・蓋・脚付長頸壺，土師器高杯
SX－6	円	長径15.3m×短径13.2m	2.4m	木棺直葬4基	①直刀 ②直刀・刀子 ③刀子 ④鉄鏃	須恵器杯・蓋・提瓶・高杯，土師器杯・高杯，刀子・鉄鏃
SX－7	円	長径17m×短径15m	2.1m	木棺直葬	ガラス玉，滑石製管玉，緑色凝灰岩製管玉，水晶製切子玉	
SX－8	前方後円	全長33.5m	2.1m	木棺直葬2基	①直刀・刀子・鉄鏃，ガラス玉，鍛製耳環 ②刀子・鉄鏃・鉄斧，ガラス玉，水晶製切子玉，瑪瑙製勾玉	須恵器甕・横瓶・高杯，土師器杯，土製紡錘車
SX－9	円	径20.5m	2.3m	木棺直葬2基	①直刀，ガラス玉 ②直刀・刀子・鉄鏃	須恵器杯・蓋・短頸壺・甕・壺・平瓶，刀子・鉄鏃，雲珠・鞘？
SX－10	円	径13.5m	1.9m	木棺直葬3基	①鉄鏃 ②（古）刀子 ②（新）金銅製耳環	須恵器杯・蓋
SX－11	円	長径10.7m×短径9.3m	1.4m	不明	なし	

第2表　ガラス玉一覧表

挿図番号	遺構番号	遺物番号	径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	遺存度	備考
第23図13	SX－3主体部	235	4.1	4.0～4.2	1.5	0.07	青	完形	
第23図14		236	4.0～4.5	3.0	2.0	0.06	青	完形	
第23図15		237	7.7～8.5	6.3～7.0	3.0	0.51	紺	完形	
第23図16		238	3.2～3.4	2.1～2.8	1.0	0.04	青	完形	
第23図17		239	3.8	2.1～2.5	1.2～1.5	0.05	紺	完形	
第23図18		241	3.8～4.0	2.0	1.2	0.04	青	完形	
第23図19		242	3.7～4.2	1.8～2.0	1.5～1.7	0.04	青	完形	
第23図20		249	4.3～4.5	2.2～2.5	1.6	0.05	青	完形	
第23図21		250	4.4～4.6	2.1～2.8	1.6～1.8	0.05	青	完形	
第23図22		251	3.9～4.2	3.9～4.2	1.5	0.05	青	完形	
第23図23		253	4.5～4.7	4.5～4.7	1.5～1.8	0.08	青	完形	
第23図24		254	4.5	4.5	1.5	0.07	青	完形	
第23図25		255	4.3	4.3	1.3～1.8	0.07	青	完形	
第23図26		256	4.5～5.0	3.2～3.8	1.5～2	0.09	青	完形	
第23図27		257	4.5	2.2～2.3	1.7～1.9	0.05	青	完形	
第40図23	SX－5主体部	367	4.0～4.2	2.1～2.9	1.5	0.08	紫紺	完形	
第40図24		371	3.0～3.3	2.0	1.2	0.03	青	完形	
第40図25		379	3.8～4.0	2.0～2.1	1.6～1.8	0.03	青	完形	
第40図26		388	2.8～3.0	2.8～3.0	1.6～1.8	0.08	黄	完形	
第40図27		392－1	3.8～4.0	3.0～3.1	1.2	0.04	紫紺	完形	
第40図28		392－2	3.8	2.0～2.3	1.5～1.8	0.04	紫紺	完形	
第40図29		392－3	4.1～4.2	1.8	1.5	0.02	黄	完形	
第40図30		392－4	3.8	2.0	1.1～1.3	0.03	青	完形	
第40図31		392－5	2.9～3.0	1.0	1.0	0.01	青	完形	
第40図32		393	3.9～4.5	3.4～4.0	1.6～2	0.06	紫紺	完形	
第55図1	SX－7主体部	001	4.2	4.0	1.5	0.09	青	完形	
第55図2		002	6.0～6.3	4.0	2.3～2.5	0.16	青	完形	
第55図3		003	6.2～7.0	3.5	2.5～3.3	0.17	青	完形	
第55図4		004	5.0～5.3	5.0～5.3	1.7	0.13	青	ほぼ完形	
第55図5		005	5.0～5.2	3.9～4.8	2.2～2.5	0.13	青	完形	
第55図6		006	4.5～5.3	3.7～4.8	1.7～2.5	0.12	青	完形	
第55図7		007	5.0～5.5	4.1～4.5	2.2～2.5	0.14	青	完形	
第55図8		008	5.4	3.7～4.5	2.1～2.5	0.15	青	完形	
第55図9		009	4.8	3.7	1.7	0.09	青	完形	
第55図10		010	5.2～5.8	4.4～5.0	1.5～2.8	0.17	青	完形	
第55図11		011	4.5～5.2	2.4	1.5～2	0.07	青	完形	
第55図12		012	3.8～4.1	3.5	1.3～1.5	0.08	青	完形	
第55図13		013	4.7～5.6	2.0	1.6～2.3	0.07	青	完形	
第55図14		014	6.6～6.8	3.2～3.5	2.5～3	0.19	青	完形	
第55図15		015	3.4～4.5	3.0～3.7	1～1.6	0.06	青	完形	
第55図16		016	3.8～4.0	3.5～3.6	1.2	0.07	青	完形	
第55図17		017	4.7	3.0	1.6	0.07	青	完形	
第55図18		019	5.5～6.1	3.6	2.2～2.7	0.16	青	完形	
第55図19		020	4.4～4.8	3.8	1.8～2	0.08	青	完形	
第55図20		021	5.8～6.0	3.5	2～2.6	0.11	青	完形	
第55図21		022	4.8～5.0	4.0～5.0	1.7	0.16	青	完形	
第55図22		023	5.2～5.5	4.0～4.9	1.5	0.16	青	完形	
第55図23		024	5.9～6.2	3.7～3.8	2.5	0.15	青	完形	
第55図24		025	5.2～6.1	4.5～5.5	2～3	0.17	青	完形	
第55図25		026	5.3～6.0	3.2～3.4	2～2.9	0.12	青	完形	
第55図26		027	4.5～5.9	5.5～5.8	1.7～3	0.15	青	完形	
第55図27		029	5.5～6.5	4.8～5.5	2.3～2.5	0.23	青	完形	
第55図28		030	5.1～6.7	5.1～6.7	1.6～2.6	0.21	青	完形	
第55図29		033	5.5	5.5	1.7～2	0.15	青	完形	
第55図30		034	4.9～5.5	3.3～3.4	2.0	0.09	青	完形	
第55図31		035	6.3～6.6	4.5～4.8	2～2.2	0.2	青	完形	
第55図32		036	5.3～6.2	3.6～4.0	1.9～2.6	0.14	青	完形	
第55図33		037	5.5～6.3	2.8～3.0	1.6～2.6	0.12	青	完形	
第55図34		038	5.3	2.7～3.6	1.5～1.7	0.11	青	完形	
第55図35		041	6.0～6.2	3.6～5.3	1.7～2	0.2	青	完形	
第55図36		042	5.6～5.8	4.6～5.2	1.5～2.6	0.22	青	完形	
第55図37		043	4.6～5.1	4.4～5.4	1.8～2.4	0.11	青	完形	
第55図38		044	5.4～5.9	2.0～2.9	2.0	0.11	青	完形	
第55図39		045	4.5～5.8	3.8	1.9～2.5	0.12	青	完形	
第55図40		047	6.4～7.0	4.0～4.8	1.9～2.7	0.21	青	完形	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	遺存度	備考
第55図41	SX－7主体部	048	5.3～5.8	5.1～5.6	1.6～1.8	0.24	青	完形	
第55図42		049	5.2～5.6	4.5～5.0	1.5～1.7	0.2	青	完形	
第55図43		050	4.5～5.3	4.8	1.6～1.8	0.14	青	完形	
第55図44		051	4.7～5.5	4.3～5.0	1.7～1.9	0.17	青	完形	
第55図45		052	5.8	3.0	1.5～2.1	0.13	青	完形	
第55図46		053	5.9～6.2	2.9～3.1	2.8	0.13	青	完形	
第55図47		054	5.1～5.8	3.9～4.1	1.7～2.8	0.14	青	完形	
第55図48		055	5.2	3.0～3.6	1.8～2	0.11	青	完形	
第55図49		056	4.9～5.2	4.8～5.0	1.6～2.2	0.16	青	完形	
第55図50		057	5.2	4.0～4.2	1.3～2	0.13	青	完形	
第55図51		058	5.0～5.1	3.0～3.2	1.8～2	0.11	青	完形	
第55図52		059	5.6～5.8	3.5～4.5	1.5～2.3	0.18	青	完形	
第55図53		060	6.0～6.2	3.0～4.0	2.0	0.18	青	完形	
第55図54		061	4.9～5.2	4.8～4.9	1.6～2	0.14	青	完形	
第55図55		062	5.2～5.9	3.9～4.0	2～2.5	0.17	青	完形	
第55図56		063	4.2～5.2	3.4～3.5	1.6～2.3	0.09	青	完形	
第55図57		064	4.5～4.8	4.2～5.0	2.2	0.12	青	完形	
第55図58		065	5.1～6.4	3.0～3.2	2.1～2.5	0.19	青	完形	
第55図59		067	5.6	4.8	1.7～2.4	0.21	青	完形	
第55図60		068	5.4～5.6	4.4	1.8～2.5	0.17	青	完形	
第55図61		069	4.8	4.2	1.5	0.14	青	完形	
第55図62		070	6.3	5.2	1～1.8	0.21	青	完形	
第55図63		071	5.0	5.0	1.6～1.7	0.14	青	完形	
第55図64		072	5.5～6.0	4.0～5.8	1.8～2.8	0.19	青	完形	
第55図65		073	5.4～6.2	4.8～6.2	2.2～2.5	0.28	青	完形	
第55図66		074	3.9～4.6	3.5	1.2～1.6	0.06	青	完形	
第55図67		075	4.2～4.5	2.9～3.2	1.6～1.7	0.07	青	完形	
第55図68		078	4.5～4.8	2.8～3.0	1.3	0.09	青	完形	
第55図69		079	3.8～4.7	5.2～5.6	1.2～1.6	0.11	青	完形	
第55図70		080	5.3～5.5	4.0～4.2	1.8	0.16	青	完形	
第55図71		081	5.7～6.0	2.9	2.2	0.11	青	完形	
第55図72		082	4.2～5.1	3.0	1.5～2.5	0.08	青	完形	
第55図73		083	5.6	4.2～4.5	1.7～2.3	0.17	青	完形	
第55図74		084	5.4～6.0	4.5～4.9	2.0	0.24	青	完形	
第55図75		085	5.5	3.4～4.0	1.4～1.8	0.14	青	完形	
第55図76		086	5.6～6.3	3.0～3.2	2～3	0.13	青	完形	
第55図77		087	6.0～6.5	3.0	2.5	0.14	青	完形	
第55図78		088	5.2～6.5	4.9～6.0	1.7～2	0.22	青	完形	
第55図79		089	5.6	3.0～4.0	1.8～2.2	0.15	青	完形	
第55図80		090	4.8	2.8～3.3	1.8	0.08	青	完形	
第55図81		091	4.3～4.6	3.3～3.8	1.7～2.3	0.07	青	完形	
第55図82		092	4.3	3.2	1.3	0.05	青	完形	
第55図83		093	4.2～4.6	4.2	2.2	0.07	青	完形	
第55図84		094	5.8～6.2	5.0～5.2	1.6～2.2	0.21	青	完形	
第55図85		095	4.7～5.0	3.8	1.4～1.7	0.12	青	完形	
第55図86		096	5.4	5.5～7.0	2.8～3.3	0.15	青	完形	
第55図87		097	5.2～5.9	4.1～4.4	2～2.4	0.17	青	完形	
第55図88		098	5.2	4.0～4.2	1.6	0.15	青	完形	
第55図89		100	5.2～5.6	2.5～4.0	2～2.8	0.14	青	完形	
第55図90		102	5.9～6.5	2.1	2.3	0.16	青	完形	
第55図91		103	5.6～5.9	2.9～3.0	2.3～2.5	0.11	青	完形	
第55図92		104	5.0	2.6～3.5	1.3～1.8	0.09	青	完形	
第55図93		105	5.0～5.7	3.7～4.5	1.6～2	0.15	青	完形	
第55図94		106	5.0～5.2	3.8	1.2～2	0.13	青	完形	
第55図95		107	4.5	4.3～4.5	2.2～2.4	0.09	青	完形	
第55図96		108	4.0	5.1～6.0	1.2～1.5	0.11	青	完形	
第55図97		109	4.1	2.1～2.8	1.4	0.05	青	完形	
第55図98		110	4.2～4.6	2.3～2.5	1.3～1.5	0.05	青	完形	
第55図99		111	4.7～5.2	3.0～3.5	2～2.2	0.11	青	完形	
第55図100		112	3.8～4.0	4.5～5.0	1.5	0.09	青	完形	
第55図101		113	2.5	2.5	0.9～1	0.03	青	完形	
第55図102		114	5.2	3.0	1.7～2	0.08	青	完形	
第55図103		115	5.5～6.1	3.2	1.5～2	0.15	青	完形	
第55図104		116	5.5～6.2	3.4～4.0	2～2.5	0.13	青	完形	
第55図105		117	5.0～5.3	2.6	1.5～2	0.08	青	完形	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	遺存度	備考
第55図106	SX－7主体部	119	3.9～4.1	2.0	1.5～1.8	0.05	青	完形	
第55図107		120	5.3～5.6	3.0～3.8	1.6～1.8	0.14	青	完形	
第55図108		121	5.0～5.3	5.2～5.5	2.2～2.3	0.19	青	完形	
第55図109		122	5.4	2.0～2.8	1.8～2.0	0.1	青	完形	
第55図110		123	3.5～3.6	2.8～3.4	1.1～1.5	0.07	青	完形	
第56図111		124	4.0～4.5	5.0～5.4	1.6	0.12	青	完形	
第56図112		125	5.0～5.8	3.5～4.0	1.8～2.1	0.13	青	完形	
第56図113		126	4.3～5.4	4.0～4.5	1.7～2.2	0.13	青	完形	
第56図114		129	5.5	4.5～5.5	1～2	0.2	青	完形	
第56図115		130	4.3～5.4	4.9	1.3～2	0.14	青	完形	
第56図116		131	5.2～5.8	4.4～4.6	1.3～2.7	0.14	青	完形	
第56図117		132	5.6～6.1	3.1	1.9～2.2	0.15	青	完形	
第56図118		133	5.0	3.2～4.0	1.8～2	0.06	青	完形	
第56図119		134	6.0～6.8	6.0	1.8～3.3	0.32	紺	完形	
第56図120		135	4.5～5.0	3.5～4.5	1.5～2.2	0.13	青	完形	
第56図121		136	4.6～4.7	3.0～4.6	2.2～2.6	0.08	青	完形	
第56図122		137	4.8～5.3	4.8～5.3	2.0	0.12	青	完形	
第56図123		138	5.2～5.9	5.2～5.9	1.9～2	0.19	青	完形	
第56図124		139	5.3	4.2～5.0	2.2	0.12	青	完形	
第56図125		140	5.5～5.6	3.8～4.1	1.8～2.0	0.16	青	完形	
第56図126		141	5.5～5.8	4.1～4.8	2.2	0.17	青	完形	
第56図127		142	5.2	2.0～2.8	2～2.1	0.07	青	完形	
第56図128		143	4.9	3.2～4.0	1.8	0.1	青	完形	
第56図129		145	4.9～5.2	3.4～4.0	1.7～2.3	0.12	青	完形	
第56図130		146	5.3～5.5	4.0～4.5	1.8～2.5	0.14	青	完形	
第56図131		147	5.0～5.2	3.8～4.0	1.8～2	0.14	青	完形	
第56図132		148	5.2～5.6	5.0～5.2	2.2	0.18	青	完形	
第56図133		149	5.5	3.3～5.0	1.7～1.9	0.14	青	完形	
第56図134		150	5.9～6.2	4.0～4.5	2.7	0.19	青	完形	
第56図135		152	4.3～5.3	4.0～5.0	1.5～2.5	0.14	青	完形	
第56図136		153	5.3	6.0～6.7	2.1	0.2	青	完形	
第56図137		154	5.6～6.0	2.0	1.6～2.5	0.09	青	完形	
第56図138		155	5.4～5.7	4.0～5.1	1.4～1.8	0.19	青	完形	
第56図139		157－1	4.7～5.2	3.1～3.5	2.2～2.3	0.06	青	完形	
第56図140		157－2	4.4～4.7	2.4～3.0	1.5	0.07	青	完形	
第67図21	SX－8第1主体部	001	3.2	1.8	1.0	0.3	青	完形	
第67図22		002	4.2～5.1	3.2～3.5	1.6	0.09	青	完形	
第67図23		003	3.0～3.2	2.5	1.2～1.4	0.03	うすい青	完形	
第67図24		004	3.8	2.0	1.5	0.04	青	完形	
第67図25		005	3.7～3.9	1.6	1.3	0.03	青	完形	
第67図26		006	4.2～4.5	2.0	1.5	0.05	青	完形	
第67図27		007	3.5	2.3	1.3	0.04	黄	完形	
第67図28		008	4.0	3.0	1.0	0.05	青	完形	
第67図29		009	5.2	2.4	1.5～1.8	0.07	青	完形	
第67図30		010	4.8～5.4	2.0～2.5	1.6	0.07	青	完形	
第67図31		011	4.6～4.8	2.5	1.5	0.07	青	完形	
第67図32		012	3.2～3.6	2.0	1.4	0.02	赤	完形	
第67図33		013	4.2～4.5	2.0～2.4	1.2	0.06	青	完形	
第67図34		014	3.5～3.7	2.2～2.8	1.1	0.04	青	ほぼ完形	
第67図35		015	3.1～3.9	1.0～1.1	1.2	0.02	青	完形	
第67図36		016	3.8～4.5	2.6～3.6	1.3	0.06	青	完形	
第67図37		017	4.5	2.5	1.7	0.06	青	一部欠失	
第67図38		019	4.2～4.6	2.8	1.4	0.03	青緑	完形	
第67図39		020	4.2～4.5	1.9～2.0	1.2	0.04	青	完形	
第67図40		021	4.2	1.8	1.1～1.3	0.03	青	完形	
第67図41		022	3.8	2.0	0.8～1	0.03	青	完形	
第67図42		023	4.0～4.3	1.2～1.7	1.2～1.4	0.03	青	完形	
第67図43		026	4.8	2.8～3.0	1.0	0.06	青	完形	
第67図44		027	3.2	1.0	1.0	0.01	青	完形	
第67図45		028	6.5	3.1～3.3	1.6～1.8	0.19	青	完形	
第67図46		029	6.0	2.8	2.0	0.13	青	完形	
第67図47		030	2.5	1.2	1.0	0.02	青	完形	
第67図48		032	3.5	1.9	1.0	0.03	青	完形	
第67図49		033	3.5	2.1	1.5	0.04	うすい紺	完形	
第67図50		036	4.9～5.2	2.2	1.2～1.8	0.07	青	完形	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	遺存度	備考
第67図51	SX－8第1主体部	037	4.4	2.0～2.1	1.4～1.6	0.06	青	完形	
第67図52		038－1	5.0	2.9～3.2	1.7～1.8	0.02	青	完形	側面に穿孔
第67図53		038－2	3.0	1.9～2.1	1.4	0.02	青	完形	
第67図54		039	3.0～3.2	2.2～3.2	0.9～1.1	0.02	青	完形	
第67図55		040	4.5～4.7	2.9	1.6	0.06	青	完形	
第67図56		041	3.8	1.0～2.0	1.1～1.4	0.03	青	完形	
第67図57		043	3.5	1.0	1.2～1.4	0.02	青	完形	
第67図58		044	3.6～4.0	2.4～3.0	1.2	0.04	黄	完形	
第67図59		046	4.0～4.5	2.0	1.5	0.04	青	完形	
第67図60		047	4.5～5.2	1.7～2.0	1.7	0.05	青	完形	
第67図61		048	3.4～3.6	2.0	1.3	0.03	濃紺	完形	
第67図62		049	2.6～3.0	2.5	0.8	0.02	青	完形	
第67図63		051	4.6～5.0	2.0	1.6	0.05	青	完形	
第67図64		052	3.3～3.5	1.8～2.0	1.1	0.04	黄	完形	
第67図65		053	4.0	2.0	1.2	0.05	青	完形	
第67図66		055	4.2～4.5	2.0	1.2	0.05	青(不透明)	完形	
第67図67		056	3.9～4.2	2.4～3.0	1～1.2	0.06	青(不透明)	完形	
第67図68		057	4.2～4.6	2.2	1.4	0.05	青	完形	
第67図69		058	4.5～5.0	3.2～3.6	1.1	0.12	紺	完形	切断後の研磨不十分
第67図70		060	4.3～4.5	2.7	1.3～1.8	0.06	青	完形	
第67図71		061	3.7～4.2	2.2～2.5	1.3	0.04	青	完形	
第67図72		062	4.4～4.6	2.0～2.4	1.7	0.06	青	完形	
第67図73		063	3.3～3.7	1.3～1.4	1.2	0.02	うすい紺	完形	
第67図74		064	2.8～3.0	1.2	1.0	0.01	青	完形	
第67図75		066	4.1～4.3	2.0～2.5	1.1～1.4	0.04	青	完形	
第67図76		067	4.0	2.0	1.2～1.4	0.04	青	完形	
第67図77		068	3.6	1.8	1.1～1.3	0.02	うすい青	完形	
第67図78		069	3.7～4.0	1.8～2.1	1.2～1.4	0.04	青	完形	
第67図79		071	3.0～3.2	1.9～2.1	1.1	0.02	青	完形	
第67図80		078－1	3.6～4.2	2.6～3.0	1.3～1.5	0.06	青	完形	
第67図81		078－2	5.9	3.0	1.7～2	0.13	青	完形	
第67図82		082	3.0～3.3	1.3	1.0	0.01	青	完形	
第67図83		083	4.5	2.0	1.2～1.5	0.03	青	完形	
第67図84		084	3.7～3.9	1.2	1.2～1.4	0.02	青	完形	
第67図85		087－1	4.9～5.4	2.0	1.6	0.07	青	完形	
第67図86		087－2	2.8～3.0	1.5	0.7～0.9	0.02	青	完形	
第67図87		088－1	3.2～3.8	2.0～2.3	1.0	0.05	青	完形	
第68図88	SX－8第2主体部	003	3.0～3.2	1.5～2.0	1.2	0.02	黄	完形	
第68図89		005	3.7～3.8	2.0	1.2	0.04	紺	完形	
第68図90		012	3.6	2.0	1.2	0.04	紺	完形	
第68図91		016	3.1～3.4	1.8～1.9	1.0	0.03	緑	完形	
第68図92		019	3.4～3.7	1.8～2.0	1.1～1.2	0.03	緑	完形	一部欠失
第78図21	SX－9第1主体部	002－1	3.1～3.3	1.8	0.8	0.02	青	完形	
第78図22		002－2	3.5	3.0	1.1	0.04	青	完形	
第78図23		002－3	3.0～3.2	2.2～2.7	1.3	0.04	青	完形	
第78図24		002－4	3.2～3.5	2.4	1.1	0.03	青	完形	
第78図25		002－5	3.5	1.9	1.2	0.02	青	完形	
第78図26		002－6	3.3	2.0	1～1.1	0.03	青	完形	
第78図27		002－7	3.5	1.8～2.0	1.2～1.5	0.03	青	完形	
第78図28		002－8	3.2	2.0	1.1	0.02	青	完形	
第78図29		002－9	3.4	1.8～2.0	0.9	0.02	青	完形	
第78図30		002－10	3.2	1.8	1.0	0.02	青	完形	
第78図31		002－11	3.4	2.6～2.8	1～1.1	0.02	青	完形	
第78図32		002－12	3.4	1.2～1.8	1.3	0.02	青	完形	
第78図33		002－13	3.0～4.0	3.0～4.0	1.5	0.03	青	完形	
第78図34		002－14	2.9～3.1	2.9～3.1	1.0	0.03	青	完形	
第78図35		002－15	3.4	3.4	1～1.2	0.03	青	完形	
第78図36		002－16	3.4	1.8～2.0	1.1	0.03	青	完形	
第78図37		002－17	3.4	2.2	0.8～1	0.02	青	完形	
第78図38		002－18	3.3	1.5～1.9	1.0	0.02	青	完形	
第78図39		002－19	3.3	1.7	1.2	0.02	青	完形	
第78図40		002－20	3.2～3.6	1.8～2.0	1.0	0.03	青	完形	
第78図41		002－21	2.8～3.4	1.9	0.9	0.02	青	完形	
第78図42		002－22	3.0	2.0	1.0	0.03	青	完形	
第78図43		002－23	3.4	2.2	0.9	0.03	青	完形	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	遺存度	備考
第78図44	SX－9第1主体部	002－24	3.7	2.2	1.1～1.3	0.03	青	完形	
第78図45		002－25	3.5～3.6	1.8	1.0	0.02	青	完形	
第78図46		002－26	3.6	2.1	0.9	0.03	青	完形	
第78図47		002－27	3.3	2.0～3.0	1.1	0.03	うすい紺	完形	
第78図48		002－28	3.0	2.0	1.0	0.03	青	完形	
第78図49		002－29	2.9～3.2	1.8	1.0	0.02	青	完形	
第78図50		002－30	3.5	2.0～2.8	1.2	0.03	青	完形	
第78図51		002－31	2.8	1.0～1.6	1.2	0.02	青	完形	
第78図52		002－32	2.8～3.2	2.0	1.0	0.02	青	完形	
第78図53		002－33	3.2	2.0	1.2～1.4	0.03	青	完形	
第78図54		002－34	3.7	2.0	1.4～1.6	0.03	青	完形	
第78図55		002－35	3.6	2.0	1.2～1.4	0.03	青	完形	
第78図56		002－36	3.1	1.5～1.8	1.0	0.01	青	完形	
第78図57		002－37	3.0	1.5	1.1	0.02	青	完形	
第78図58		005	2.8～3.0	1.8	1.1	0.03	青	完形	
第78図59		006	3.2～3.5	1.8	1～1.1	0.03	青	完形	
第78図60		007	3.6	2.0	1.2	0.03	青	完形	
第78図61		008	3.2	2.4	0.9	0.02	青	完形	
第78図62		011	3.5	2.2	1.4～1.5	0.02	青	完形	
第78図63		012	3.7	2.5～2.7	1.1	0.04	青	完形	
第78図64		013	3.1	2.1	1.0	0.02	青	完形	
第78図65		014	3.5～3.6	2.0	1～1.2	0.04	青	完形	
第78図66		015	3.3～3.5	1.9	1.2	0.02	青	完形	
第78図67		016	3.2	2.0	1.2	0.02	青	完形	
第78図68		019	3.2～3.6	2.2	1.0	0.03	青	完形	
第78図69		024	3.5～3.6	1.5～1.8	1.0	0.02	青	完形	
第78図70		027	3.6	2.0	1～1.1	0.03	青	完形	
第78図71		030	2.8	2.0	0.9	0.02	青	完形	
第78図72		031	3.3	1.8	1.2～1.3	0.03	青	完形	
第78図73		032	3.2	1.8	0.8	0.02	青	完形	
第78図74		033	3.2～3.4	2.0	1.0	0.03	青	完形	
第78図75		034－1	3.2	1.5	1.1	0.02	青	完形	
第78図76		034－2	3.6	1.5～2.0	1.1	0.02	青	完形	
第78図77		035	3.1～3.2	1.8	1.2～1.3	0.02	青	完形	
第78図78		036	3.4～3.6	2.0	1.2	0.03	うすい紺	完形	
第78図79		037	3.1～3.4	2.0	1.1	0.02	うすい紺	完形	
第78図80		038	3.4	2.0	1.0	0.02	青	完形	
第78図81		039	3.6	2.0	1.3	0.03	うすい紺	完形	
第78図82		040	3.5	2.0	1.2～1.3	0.03	うすい紺	完形	
第78図83		041	3.0	1.1	0.9	0.01	青	完形	
第78図84		042	3.2～3.4	2.0	0.8	0.03	うすい紺	完形	
第78図85		043	3.0～3.5	2.1	1.0	0.03	うすい紺	完形	
第78図86		044	3.4	1.9～2.1	1.2	0.02	うすい紺	完形	
第78図87		045－1	3.6	1.8	1.2～1.3	0.03	青	完形	
第78図88		045－2	3.5～3.7	2.1	1.1	0.04	うすい紺	完形	
第78図89		045－3	3.3	1.6～2.2	1.0	0.02	青	完形	
第78図90		045－4	3.0	2.0	0.9	0.02	青	完形	
第78図91		045－5	3.5	1.2	1.0	0.02	青	完形	
第103図2	SX－12主体部	005	6.0～6.5	4.5～5.0	3～3.2	0.22	紺	完形	
第103図3		006	6.3～6.5	4.0～4.5	2.0	0.21	紺	完形	
第103図4		007	6.9～7.0	4.0～4.5	1.8～2.5	0.23	紺	完形	
第103図5		008	5.9	3.5～4.0	1.8	0.2	紺	完形	
第103図6		009	6.5～7.0	3.5～4.0	1.9～2.7	0.22	紺	完形	
第103図7		010	5.6～6.0	5.0～5.5	2.3～3.2	0.19	紺	完形	
第103図8		011	5.1～5.5	6.0～6.2	2.3～3.2	0.21	紺	完形	
第103図9		012	5.6～5.8	3.0～5.0	1.8～2.3	0.19	紺	完形	
第103図10		013	4.8～5.5	6.0～6.1	1.7～2.3	0.19	紺	完形	

第3表　金属製品計測表

鋼鏃計測表　〔 〕現存値・( ) 復元値，単位cm

出土遺構	挿図番号	全　長	鏃身長	逆刺深	鏃身幅	鏃身厚	茎　長	現存重量(g)
SX－3	11	(7.8)	(5.5)	－	[2.0](最大)	0.4	2.3	14.36
SX－3	12	(3.8)	(3.8)	0.2	1.8（最大）	0.3	－	8.15

鉄鏃計測表　〔 〕現存値・( ) 復元値，単位cm

出土遺構	挿図番号	現存長	鏃身長	鏃身幅	鏃身厚	篦被長	篦被幅	茎　長	現存重量(g)
SX－1	第16図8	[12.8]	2.7	0.9	0.2	7.8	0.6	(2.3)	7.5
SX－1	第16図9	(8.0)	－	－	－	[5.2]	0.5	(2.8)	4.1
SX－2	第16図2	(14.1)	2.3	1.1	0.3	8.8	0.6	(3.0)	9.6
SX－2	第16図3	(13.2)	2.7	1.0	0.3	7.8	0.5	(2.7)	6.6
SX－2	第16図4	(12.9)	2.7	1.0	0.2	9.2	0.6	(1.0)	7.7
SX－2	第16図5a	(10.1)	2.8	1.0	0.2	(7.3)	0.6	－	15.3
SX－2	第16図5b	(10.8)	2.8	1.0	0.2	(7.5)	0.7	(0.5)	
SX－2	第16図6	(12.2)	2.7	1.0	0.3	7.9	0.6	(1.6)	7.1
SX－2	第16図7	(11.4)	(2.3)	1.0	0.3	7.3	0.6	(1.8)	6.7
SX－2	第16図8	[7.1]	(2.4)	1.0	0.2	(4.7)	0.6	－	4.8
SX－4	第32図9	(10.2)	2.5	0.9	0.2	7.1	0.5	(0.6)	6.4
SX－4	第32図13	(8.2)	(4.3)	(4.0)	0.2	3.3	0.7	(2.1)	7.9
SX－4	第32図14	(8.6)	(4.2)	3.4	0.3	3.3	0.8	(2.2)	10.9
SX－5	第39図18	(12.6)	3.0	1.0	0.3	8.3	0.5	(1.3)	11.1
SX－5	第39図19a	(13.6)	(1.2)	1.0	0.3	9.3	0.5	(3.1)	20.3
SX－5	第39図19b	(10.7)	(1.4)	0.8	0.2	8.2	0.5	(1.1)	
SX－5	第39図20	(12.9)	(0.8)	0.8	0.2	10.0	0.6	(2.0)	8.3
SX－5	第39図21	(3.6)	(0.9)	0.8	0.3	(2.7)	0.5	－	1.7
SX－5	第39図22	(12.1)	3.4	0.8	0.2	(8.7)	0.5	－	8.1
SX－6	第49図29a	(7.3)	(2.3)	0.9	(0.2)	(5.0)	0.5	－	133.8
SX－6	第49図29b	(16.3)	2.9	0.9	(0.2)	8.3	0.5	(4.6)	
SX－6	第49図29c	(15.9)	3.5	1.1	0.2	9.1	0.6	(4.6)	
SX－6	第49図29d	(11.6)	3.4	0.9	(0.2)	7.5	0.5	(0.7)	
SX－6	第49図29e	(17.5)	3	1.1	(0.2)	7.7	0.5	－	
SX－6	第49図29f	(16.4)	(2.5)	?	?	(9.9)	(0.6)	(4.0)	
SX－6	第49図29g	(13.5)	(3.5)	(1.0)	(0.2)	(9.1)	0.5	(0.9)	
SX－6	第49図30a	(4.9)	(4.9)	2.5	(0.1)	－	－	－	27.6
SX－6	第49図30b	(8.6)	－	－	－	(8.6)	(0.5)	－	
SX－6	第49図30c	(8.3)	5.6	(3.2)	(0.2)	[2.9]	0.8	－	
SX－6	第49図32	(9.4)	(2.6)	1.1	0.2	6.4	0.5	(0.4)	6.3
SX－6	第49図33	(2.4)	(0.7)	1.1	0.2	(1.7)	0.6	－	1.4
SX－6	第49図34	(7.4)	－	－	－	(5.3)	0.6	(2.1)	5
SX－8	第66図14	(6.3)	(3.2)	1	0.4	(5.2)	0.6	(0.1)	7.9
SX－8	第66図15	(9.9)	(2.2)	0.9	0.2	(7.7)	0.5	－	5.8
SX－8	第66図18	(12.8)	2.2	0.8	0.2	9.2	0.6	(1.4)	14.1
SX－8	第66図19	(14.9)	(2.8)	0.9	0.3	(9.6)	0.6	(2.5)	11.7
SX－9	第76図15	(12.2)	2.5	1.5	0.3	7.4	0.5	(2.3)	8.2
SX－9	第76図16	(10.9)	2.4	(1.5)	0.3	7.4	0.5	(1.1)	7.9
SX－9	第77図19	(6.3)	2.2	1.5	(0.4)	(4.1)	0.6	－	5.5
SX－9	第77図20	(5.9)	－	－	－	(5.0)	0.7	(0.9)	5
SX－10	第86図7	(16.0)	(3.3)	1	(0.3)	7.6	0.5	(5.1)	9.5
SX－10	第86図8	(13.3)	3.3	1	0.3	7.3	0.5	(2.7)	5.1
SX－10	第86図9	(3.1)	－	－	－	(2.0)	(0.7)	(1.1)	2
SX－10	第86図10	(3.4)	(3.2)	－	(0.2)	－	－	(0.3)	2.6

鉄槍計測表　〔 〕現存値・( ) 復元値，単位cm

出土遺構	挿図番号	全　長	槍身長	茎　長	槍身幅/厚		茎幅/厚さ	現存重量(g)
					関付近	中央部		
SX－3	第22図9	[20.6]	11.6	6.1	2.0/0.4	1.8/0.3	1.0/0.3	35.7

鉄剣計測表　〔 〕現存値・( ) 復元値，単位cm

出土遺構	挿図番号	全　長	槍身長	茎　長	剣身幅/厚		茎部幅/厚	現存重量(g)
					関付近	中央部		
SX－3	第22図10	[14.7]	13.6	(1.1)	(2.7/0.5)	2.6/0.4	1.3/0.3	43.4

直刀・刀子計測表　　〔 〕現存値・( ) 復元値，単位cm

出土遺構	挿図番号	全 長	刀身長	茎 長	刀身幅/背厚			茎幅/厚	現存重量(g)
					関付近	中央部	切先付近		
SX－2	第16図1	〔32.0〕	25.1	〔6.8〕		2.3/0.5	(1.9/0.4)	1.2/0.4	145.8
SX－4	第32図5	〔32.2〕	〔25.5〕	〔6.7〕	2.4/0.7		2.1/0.4	(1.2/0.5)	150
	第32図6	〔31.2〕	〔24.8〕	〔6.4〕	2.2/0.7	2.0/0.6	1.6/0.5	1.1/0.5	177.2
	第32図7	〔17.3〕	〔11.6〕	〔5.7〕	1.8/0.5		1.2/0.3	1.0/0.4	58
	第32図8	〔13.6〕	〔8.9〕	4.7		1.3/0.4		0.9/0.5	28.3
	第32図10	13.5	8	5.5	1.4/4.0	1.4/0.2		0.6/0.4	19.5
	第32図11	〔14.0〕	〔7.9〕	6.1	1.5/0.4		1.2/0.3	0.9/0.4	20.2
	第32図12	〔13.8〕	〔8.2〕	5.6	1.5/0.4		1.0/0.4	0.7/0.4	18.5
SX－5	第39図17	〔37.9〕	〔28.9〕	〔9.0〕		(2.4/0.8)		1.5/0.5	217.9
SX－6	第48図23	〔47.5〕	42.8	〔4.7〕	3.0/0.6	2.8/0.6	2.1/0.4	1.2/0.5	306.6
	第48図24	〔34.4〕	〔27.1〕	〔7.3〕	2.8/0.7	2.4/0.6	2.1/0.5	1.2/0.5	206.9
	第48図25	〔8.6〕	〔6.4〕	〔2.2〕		0.9/0.3		0.6/0.3	12.7
	第48図26	〔11.9〕	〔7.7〕	〔4.2〕		1.2/0.3		1.0/0.3	15.5
	第48図27	〔13.9〕	〔8.1〕	〔5.8〕		1.1/0.2		1.0/0.4	17
	第48図28	〔9.6〕	〔4.7〕	4.9		1.3/0.3		0.8/0.3	10
	第49図31	〔12.4〕	〔7.8〕	4.6			1.0/0.3	0.6/0.2	13.6
SX－8	第66図10	58.3	50.5	7.8	3.0/0.9	2.8/0.8	2.4/0.7	1.5/0.4	700.9
	第66図11	〔9.6〕	〔5.1〕	〔4.5〕		1.1/0.4		(0.5/0.3)	11.5
	第66図12	〔8.8〕	5.7	〔3.1〕		1.0/0.3		0.5/0.2	7.4
	第66図13	〔10.1〕	〔6.1〕	4			0.9/0.3	0.9/0.4	13.5
	第66図16	〔5.8〕	〔1.5〕	〔4.3〕		1.0/0.4		0.6/0.3	7.3
	第66図17	〔10.2〕	〔7.6〕	〔2.6〕		1.1/0.3		0.7/0.3	20.7
SX－9	第76図13	93.5	76.6	10.9	3.9/1.1	3.7/0.9	3.2/0.7	1.6/0.4	1313.9
	第76図14	〔10.9〕	〔6.8〕	〔4.2〕		1.0/0.4		0.6/0.3	14.5
	第76図17	〔54.6〕	〔47.1〕	〔7.5〕	3.1/0.8	2.9/0.6	2.1/0.6	1.3/0.6	595
	第77図18	〔13.4〕	9.1	〔4.3〕		(1.5/0.3)		0.6/0.3	18
SX－10	第86図11	〔4.9〕	〔2.8〕	〔2.1〕		1.4/0.4		0.9/0.2	7.5
	第86図12	〔17.2〕	10.3	〔6.8〕	1.5/0.4	1.3/0.4	1.2/0.2	1.0/0.4	30.4

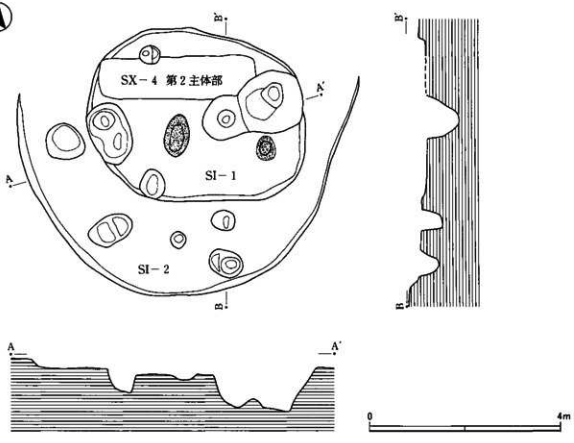
第2節　竪穴住居跡と遺物

竪穴住居跡8軒は北側の丘陵に位置する古墳の墳丘下及び周辺で検出され，SI－1・2が重複する。

1．SI－1・2（第90・91図）

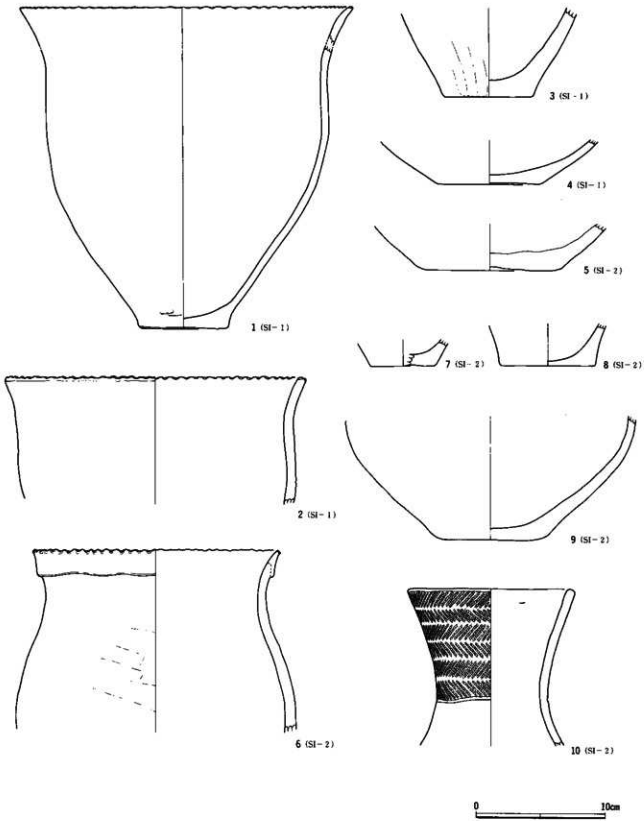
SX－4の墳丘下で検出された2軒の竪穴住居跡であるが，新旧関係は不明である。なお，この2軒の竪穴住居跡はローム層まで掘り込まれていることが明らかである。

SI－1は4.6m×3.6mの小判形を呈する。SI－2は北側部分が遺存していないため全体の規模は不明であるが，直径7m前後の不整な円形を呈するものと考えられる。SI－1の北側はSX－4の第2主体部によって破壊されている。検出面からの掘込みは，SI－1が10cm，SI－2が20cmを測る。ピットは10か所検出された。深さは30cm～70cmとかなり差がある。どちらの住居跡に伴うものかは不明であるが，位置からして，その大半はSI－2に伴うものと考えられる。床面は極めて軟弱である。覆土は黒色土を主体とするものである。炉跡は2か所検出された。位置からして，中央部の炉跡がSI－1に伴うもので，東側の炉跡がSI－2に伴うものと考えられる。いずれも深さは5cmほどであるが，東側の炉跡は焼土の堆積もややあり，底面も比較的良く焼けていた。



第90図　SI－1・2

遺物はすべて弥生土器で，量は他の竪穴住居跡と比べて多い。1～4はSI－1出土のものである。1は壺で，口唇部に押捺が加えられるものである。胎土には砂粒を極めて多く含む。2は壺で，口唇部には縄文原体が押捺される。3は壺の底部で，外面はヘラナデされる。4は壺の底部で，SX－4出土遺物として

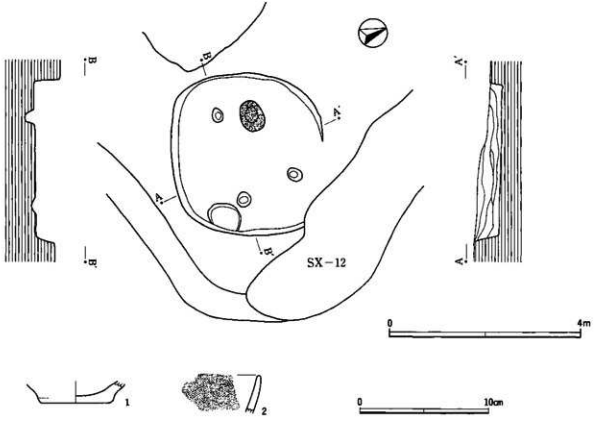


第91図　SI－1・2出土遺物

取り上げられているものであるが，出土状況・位置からしてSI－1出土遺物と考えられるものである。内外面共器面の剝落が著しく，調整は不明である。5～10はSI－2出土のものである。5は壺の底部である。6は複合口縁の甕で，破片を図上で復元したものである。口唇部には刻みが施され，口縁部はヨコナデされる。胴部はヘラナデされる。7は小型の壺の底部である。8は甕の底部で，SX－4出土遺物として取り上げられているものであるが，出土状況・位置からしてSI－2出土遺物と考えられるものである。内外面共器面の剝落が著しく，調整は不明である。9は壺であるが，内外面共器面の剝落が著しく，調整は不明である。10は壺の口縁部から頸部で，SX－4出土遺物として取り上げられているものであるが，出土状況・位置からしてSI－2出土遺物と考えられるものである。口縁部から頸部上半にかけて縄文が施され，その下に沈線が施されるものである。施文部以外はヘラミガキされ，赤彩されているようだが，器面の遺存が悪く，詳細な観察は不可能である。

2．SI－3（第92図）

SX－2の北側で検出された。東側で，SX－12と重複する。平面形は3.4m×3.2mの隅丸方形を呈する。検出面からの掘込みは，25cm～50cmを測る。ピットは3か所検出された。位置は不揃いで，深さも8cm～18cmと浅い。南側の壁際に，50cm×70cmの不整な楕円形の掘込みが検出された。深さは5cm弱と極めて浅く，性格は不明である。床面は極めて軟弱である。覆土は6層に分けられた。全体にロームブロックを多く含み，下位には，炭化物・焼土を多く含む。炉跡は，住居跡北側で検出された。60cm×50cmの楕円形を呈する。深さは7cmほどで，焼土の堆積も薄く，底面もあまり焼けていない。



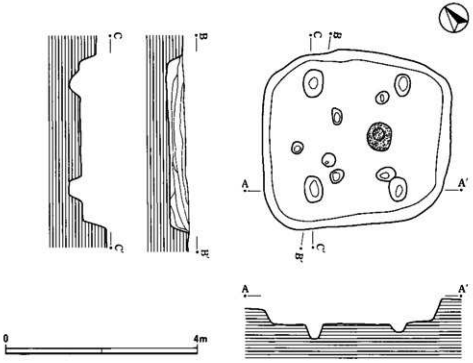
第92図　SI－3と出土遺物

遺物の量は極めて少なく，2点の土器が図示できたのみである。1は内外面に赤彩の痕跡が認められ，鉢の底部と考えられる。2は鉢の口縁部である。外面には縄文が施され，内面はヘラミガキ後赤彩される。胎土は1と共通しており，同一個体の可能性もある。

3．SI－4（第93図）

SX－3の墳丘下で検出された。平面形は3.9m×3.6mの不整な隅丸長方形を呈する。検出面からの掘込みは，30cm～50cmを測る。ピットは10か所検出された。このうち対角線上に配置される壁際の4か所は，規模も大きく，深さも20cm前後で共通しており，主柱穴と考えられる。床面は，住居跡中央部が比較的堅緻である。覆土は7層に分けられた。黒褐色土を主体とするものである。炉跡は，住居跡東側の主柱穴の間で検出された。60cm×50cmの楕円形を呈する。深さは7cmほどで，焼土の堆積も薄く，底面もあまり焼けていない。

遺物は弥生土器の破片が3点出土したのみで，図示できるものはない。

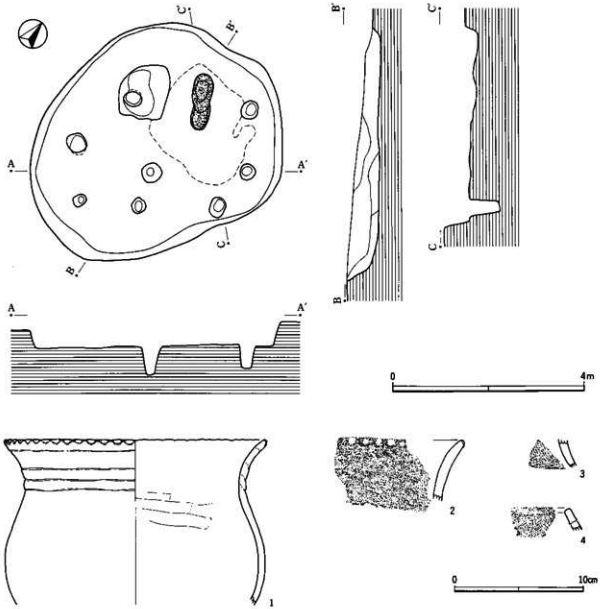


第93図　SI－4

4．SI－5（第94図）

SI－3の西約3mで検出された。平面形は5.4m×4.5mの不整な楕円形を呈する。検出面からの掘込みは，20cm～50cmを測る。ピットは8か所検出された。位置は不揃いであるが，深さは40cm～60cmと比較的しっかりとしている。床面は，住居跡北側の炉跡の周辺が比較的堅緻である。覆土は4層に分けられた。暗褐色土を主体とするものである。炉跡は，住居跡北側で検出された。1.16m×0.4mの長楕円形をを呈する。深さは10cmほどで，焼土の堆積は比較的厚いが，底面はあまり焼けていない。

遺物の量は極めて少なく，4点の土器が図示できたのみである。1は破片を図上で復元したものである。頸部に輪積み痕を残し，口唇部に押捺が加えられる甕である。2も口唇部に押捺が加えられる甕である。3は壺で，外面にS字状結節文と縄文が施される。4は無頸壺である。外面には縄文が施され，焼成前の穿孔も認められる。

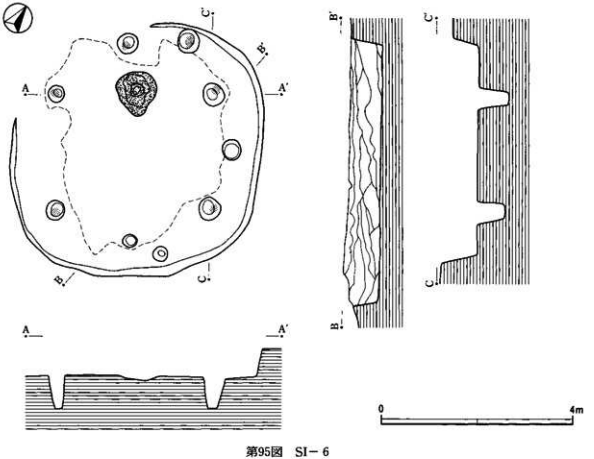


第94図　SI－5と出土遺物

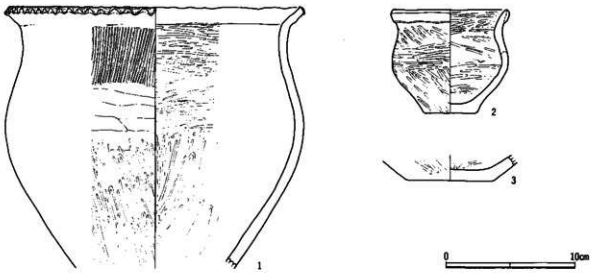
5．SI－6（第95・96図）

SX－1の墳丘下で検出された。平面形は一辺が5.2mの隅丸方形を呈する。北西のコーナー部分を欠くほかは比較的遺存が良く，検出面からの掘込みは，50cm～76cmを測る。ピットは9か所検出された。このうち対角線上に配置される壁際の4か所は，規模が大きく，主柱穴と考えられる。なお，9か所のピットのうち6か所のピットからは，柱痕跡（トーン部分）が確認された。床面は，ピットで囲まれた内側が比較的堅緻である。覆土は16層に分けられた。暗褐色土を主体とするものである。炉跡は，住居跡北側の主柱穴の間で検出された。90cm×80cmの不整な楕円形を呈する。深さは15cmほどで，焼土の堆積は厚く，底面も比較的良く焼けていた。なお，炉跡の上面及び周辺からは，炭化材が検出されている。炉跡の上面のものはカエデ属及びアカガシ亜属で，炉跡の南東のものはタケ亜科及びススキ属近似であった。このうちススキ属近似とされたものは，同一方向に多数集積されている状況が観察された。

遺物の量は極めて少なく，3点の土器が図示できたのみである。1は甕で口唇部には押捺が加えられるものである。外面の頸部はハケ調整され，胴部中位はヘラナデ，下位は粗くヘラミガキされる。内面はヘラミガキされる。2は小型の甕で，内外面とも粗くヘラミガキされる。3は鉢の底部と考えられる。内外面ともヘラミガキされる。



第95図　SI－6

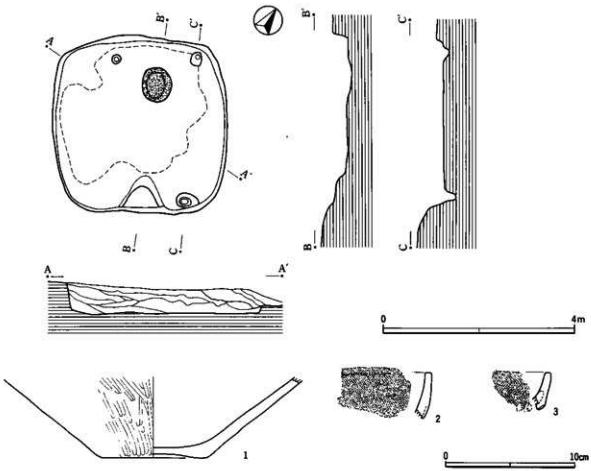


第96図　SI－6出土遺物

6．SI－7（第97図）

SX－4の墳丘下で検出された。平面形は一辺が3.6mの隅丸方形を呈する。検出面からの掘込みは，20cm～60cmを測る。ピットは3か所検出された。床面は，ピットで囲まれた内側が比較的堅緻である。覆土は8層に分けられた。暗褐色土を主体とするものである。炉跡は，住居跡北側の柱穴の間で検出された。70cm×60cmの楕円形を呈する。深さは15cmほどで，焼土の堆積は厚く，底面も比較的良く焼けていた。なお，南壁中央部から住居内に張り出すように三角形に地山が掘り残されており，階段状を呈していた。

遺物の量は極めて少なく，3点の土器が図示できたのみである。1は甕で，外面は粗くヘラミガキされる。2は鉢の口縁部で，外面にはS字状結節文と縄文が施され，内面はヘラミガキされ，赤彩される。3は壺の口縁部で，外面には縄文が施され，下端には刻みが施される。内面はヘラミガキされ，赤彩される。

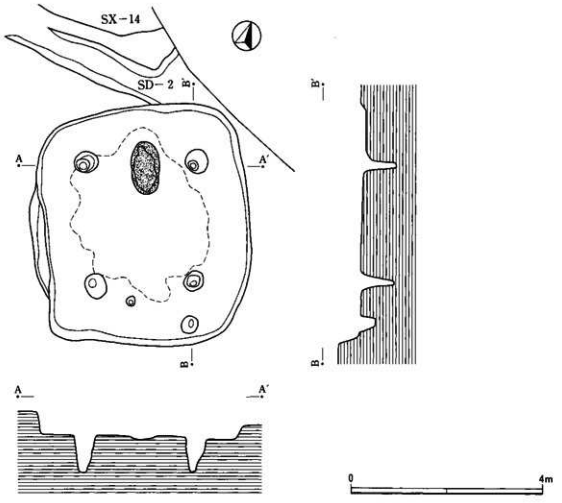


第97図　SI－7と出土遺物

7．SI－8（第98図）

SI－7の北東約3mで検出された。平面形は4.4m×5mの隅丸長方形を呈する。検出面からの掘込みは，15cm～50cmを測る。ピットは6か所検出された。このうち対角線上に配置される壁際の4か所は，規模が大きく，主柱穴と考えられる。床面は，ピットで囲まれた内側が比較的堅緻である。覆土は暗褐色土を主体とするものである。炉跡は，住居跡北側の主柱穴の間で検出された。1.1m×0.6mの楕円形を呈する。深さは10cmほどで，焼土の堆積は厚く，底面も比較的良く焼けていた。

SI－8として取り上げた遺物の量は比較的多いが，上層出土の土師器は，後述するSI－8上層遺構に伴うものである。下層出土のものは弥生土器の破片が大半で，図示できるものはない。

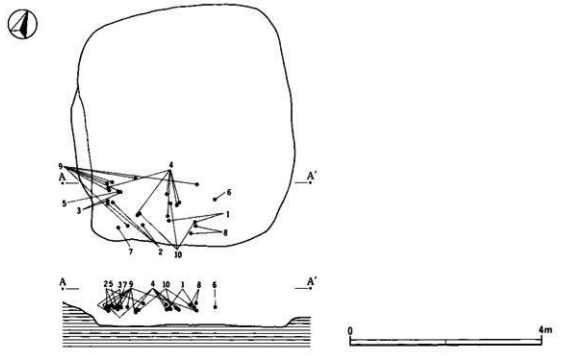


第98図　SI－8

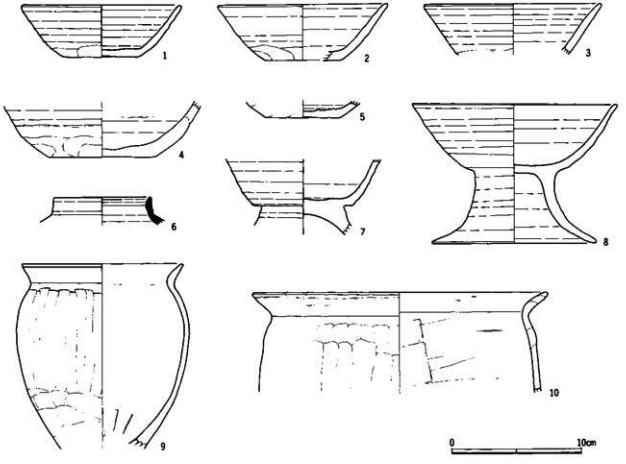
8．SI－8上層遺構（第99・100図）

SI－8からは，比較的多くの完形またはそれに近い土器が出土しているが，住居跡の特徴から推定される時期とは大きくかけ離れている。そこで，これらの土器の出土状況を検討してみると，これらの土器すべてが，覆土上層から出土していることが明らかとなった。したがって，これらの遺物はSI－8に伴うものではなく，性格やプランなどは不明であるものの，SI－8の廃棄後の遺構に伴うものと考えられるため，SI－8上層遺構として報告することとした。

1～5は杯で，1～4は体部下半から底部が手持ちヘラケズリされる。5は体部下半は手持ちヘラケズリされ，底部は回転糸切り後周縁部が手持ちヘラケズリされる。6は須恵器の短頸壺の破片である。口縁部は直立する。7・8は足高高台付杯である。9・10は甕である。いずれも口縁部はヨコナデされ，胴部外面はヘラケズリされ，内面はヘラナデされる。



第99図　SI－8上層遺構



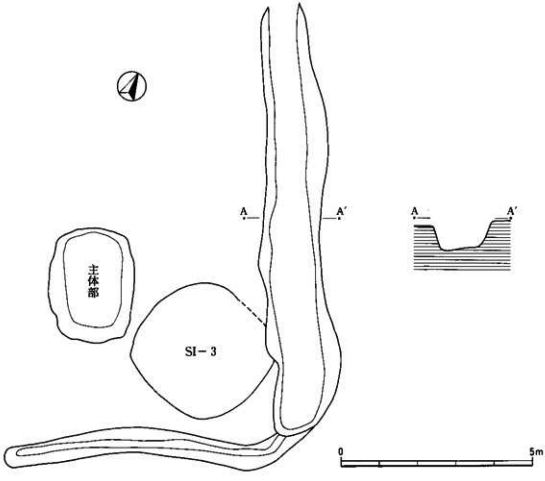
第100図　SI－8上層遺構出土遺物

第3節　方形周溝墓と遺物

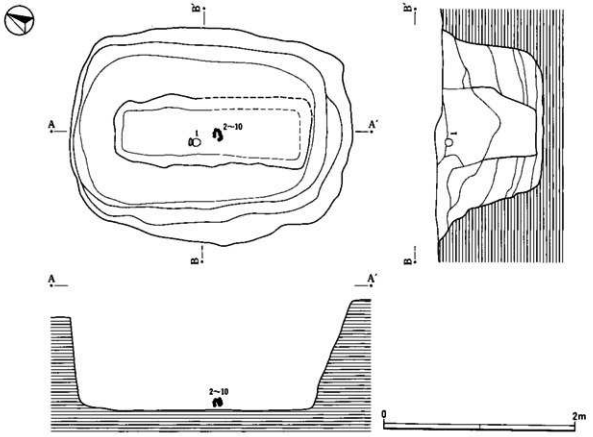
1．SX－12（第101～103図）

SX－1の南東約5m，SX－2との中間で，5L・5M・6L・6Mグリッドに位置する。周溝墓の立地する面は緩斜面で，南から北に向かって傾斜している。表土除去以前はわずかに地膨れ状を呈する状況であった。しかし調査の結果，周溝がL字状に検出されたのみで，全体の規模は不明である。検出された周溝は，東側と南側でその規模・形態が大きく異なっている。東側のものは，上面幅1.3m～1.9m，底面幅0.7m～1.2m，深さ0.6mを測る。南側のものは上面幅0.5m～0.7m，底面幅0.2m，深さ0.3m～0.6mを測る。

埋葬施設は，周溝によって区画された部分で東側の周溝と主軸方位を同じにする木棺直葬の主体部が検出された。墓坑の掘方は2.95m×2.25mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは1m～1.1mを測る。木棺痕跡は2.1m×0.75mの長方形を呈するものと考えられる。断面観察によって，墓坑底面にロームブロックを多量に含む暗褐色土を敷いた後に木棺を設置し，木棺の固定にはローム粒を多量に含む暗褐色土とロームブロックを多量に含む暗褐色土とで互層にしていることが分かる。



第101図　SX－12

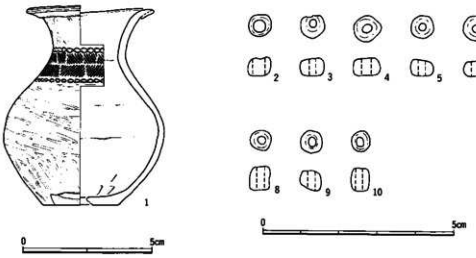


第102図　SX－12主体部

遺物は木棺中央部の底面からガラス玉が9点集中して出土し，さらに木棺上部から壺が出土している。

1は小型の壺で，口縁部は複合口縁となる。頸部外面にはS字状結節文と縄文が施され，施文部以外はヘラミガキされる。底部には焼成後の穿孔が認められる。

2～10はガラス玉である。9点すべて完形品である。色調はすべて紺色で，大きさ・重さはほぼ共通するが，厚さにはややばらつきがある。



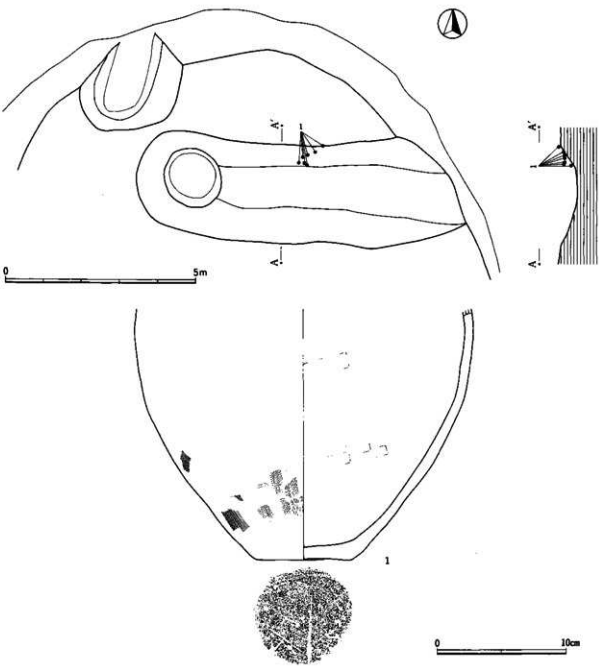
第103図　SX－12出土遺物

2．SX－13（第104図）

SX－4の墳丘下の8Mグリッドで検出された。四隅が切れる方形周溝墓の南側と西側の周溝の一部と考えられる。そのほかの周溝は検出されず，SX－4の築造時に破壊されたものと考えられる。南側の溝は，長さ8.5m，上面幅2.6m，底面幅1.2m，深さ0.4mを測り，西端部分がピット状に10cm程深くなる。西側の溝は，長さ2.6m，上面幅2.6m，底面幅1m，深さ0.4mを測る。周溝の覆土は2層に分けられた。上部は黒色土で，下部は暗褐色土である。

埋葬施設は検出されていない。

遺物の量は比較的多いが，大半は図示した甕の破片である。1は南側の溝の北壁上部で出土した甕で，内面はヘラナデされ，外面はハケ調整後に粗くヘラミガキされる。底面には木葉痕が認められる。



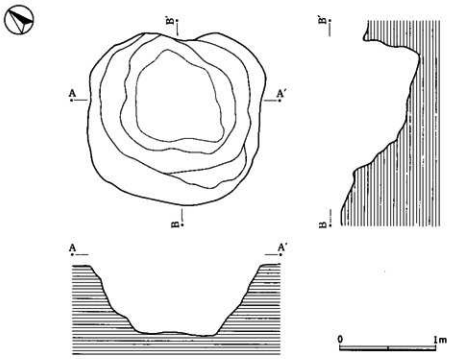
第104図　SX－13と出土遺物

第4節　土坑と遺物

1．SK－1（第105図）

SX－3の西側の7Mグリッドで検出された。その位置からしてSX－3との関係も考えられる遺構である。平面形は一辺が1.7m～1.8mの不整な隅丸方形を呈する。検出面からの掘込みは，0.75mを測る。

遺物は，古墳前期と考えられる壺の破片が出土しているのみで，図示できるものはない。



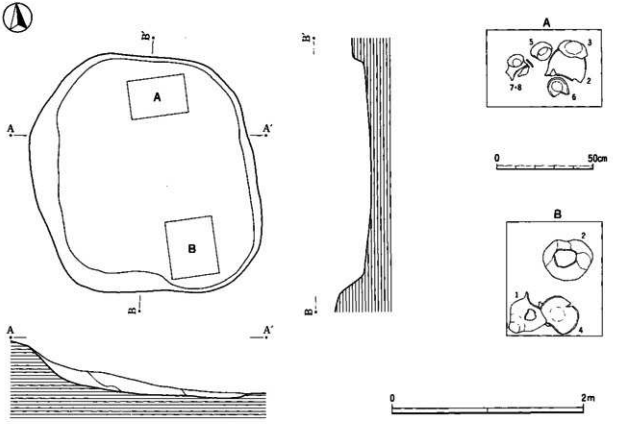
第105図　SK－1

2．SX－15（第106・107図）

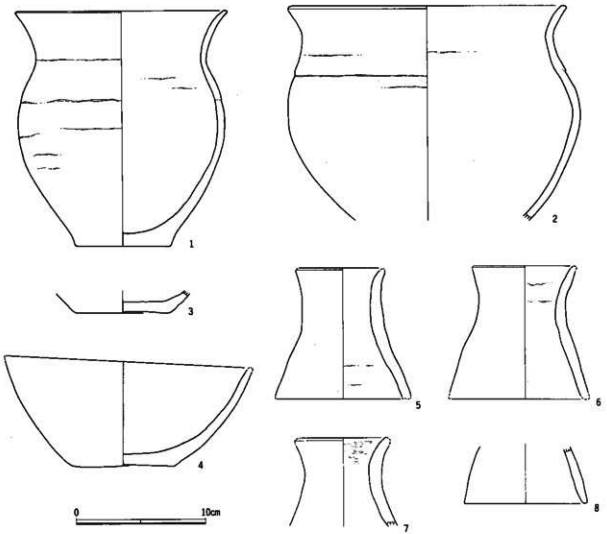
SX－7の南側の10Hグリッドで検出された。調査時には，土器棺墓と考えられているが，遺構の状況や遺物の出土状況から，土器棺墓とする積極的な証拠に欠けるので，土坑として報告する。

平面形は一辺が2.5mの隅丸方形を呈する。検出面からの掘込みは，0.1m～0.3mを測る。覆土は2層に分けられた。中央部は黒色土で，壁際は褐色土となる。

遺物は中央北側と中央南側から集中して出土している。北側（A）は甕2個体と器台4個体，南側（B）は甕2個体（うち1個体は北側のものと接合）と鉢1個体である。1は内外面に輪積み痕を残す甕であるが，器面の剝落が著しく，調整は不明である。2は頸部に輪積み痕を有する甕で，内外面共にヘラミガキされる。3は甕の底部である。4は鉢であるが，器面の剝落が著しく，調整は不明である。5～8は筒形の器台であるが，1～4と同様に器面の剝落が著しく，調整は不明であるが，内面には輪積み痕を残すものや器受部内面がヘラミガキされるものも見られる。



第106図　SX－15



第107図　SX－15出土遺物

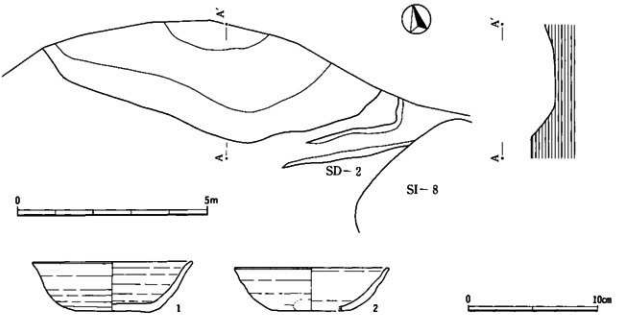
第5節　その他の遺構と遺物

1．SX－14（第108図）

調査区の北端の4Lグリッドで検出された。調査時は古墳の周溝の可能性が高いと考えられていたが，検討の結果古墳の周溝とする積極的な証拠に欠けるので，ここで報告する。遺構の大半は調査区外に延びているため，全体の規模は不明である。検出されたのは，弧を描きながら東西に方向をとる長さ約9mの溝状遺構である。上面幅は不明であるが，底面幅1.1m～1.6m，深さ0.2m～0.6mを測る。

遺物は，覆土の上層からは主としてロクロ土師器が，全体にわたって弥生土器が出土している。図示した2点の土師器のみが実測に耐えうる土器であるが，この遺構に本来的に伴うものであるかは疑問である。

1は杯で，体部下端から底部は回転ヘラケズリされる。2は杯で，体部下端は手持ちヘラケズリされる。口縁部の内外面には油煙煤が付着する。



第108図　SX－14と出土遺物

2．SD－1・SF－1（第109図）

SD－1はSI－7とSI－8の間で検出された溝で，緩やかに弧を描きながら南東から北西に方向をとる。検出された長さは約10.5mである。上面幅は0.4m～0.7m，底面幅は0.18m～0.3m，深さは0.35mを測る。

SF－1はSX－1の調査中に，硬化面が検出されたことによって道路状遺構として調査された遺構である。部分的な遺存と考えられ，全体の規模は不明である。検出された長さは約7.7mである。幅は0.9m～1.8m，深さは0.1m～0.25mを測る。

この2条の遺構は，その位置や方向からして，本来は一つの遺構として存在していた可能性も考えられる。

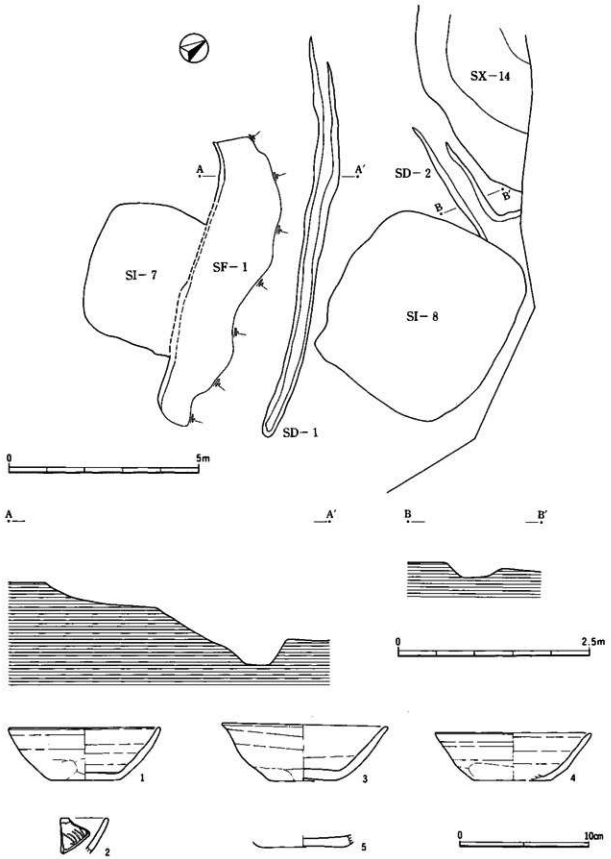
SD－1出土の遺物は極めて少なく，2点の土器が図示できたのみである。SF－1からは遺物は出土していない。

1・2はSD－1から出土したものである。1は杯で，体部下端から底部は手持ちヘラケズリされる。内面は黒色処理される。2は緑釉陶器皿で，陰刻花文が施される。焼成は淡黄褐色で，釉調は淡黄緑色を呈する。3～5は土師器の杯である。これらの遺物はSX－1墳丘出土遺物として取り上げられているものであるが，出土状況や土器の特徴から，本来はSF－1・SD－1に伴う遺物である可能性が高いため，ここで報告することとした。3はSF－1とSD－1の間で出土したものである。底部は回転ヘラケズリされ，体部下端は手持ちヘラケズリされる。4はSD－1の東側で出土したものである。底部は回転糸切り後周縁部が手持ちヘラケズリされ，体部下端が手持ちヘラケズリされる。5はSF－1の南側で出土したものである。底部破片で，回転ヘラケズリされる。

3．SD－2（第109図）

SI－8とSX－14の間で検出された溝で，東側が調査区外に延びているため，全体の規模は不明である。ほぼ東西に方向をとるが，SI－8との重複部分からは，北へ方向を変えるようである。検出された長さは約4.3mである。上面幅は0.6m～0.8m，底面幅は0.4m，深さは0.2mを測る。

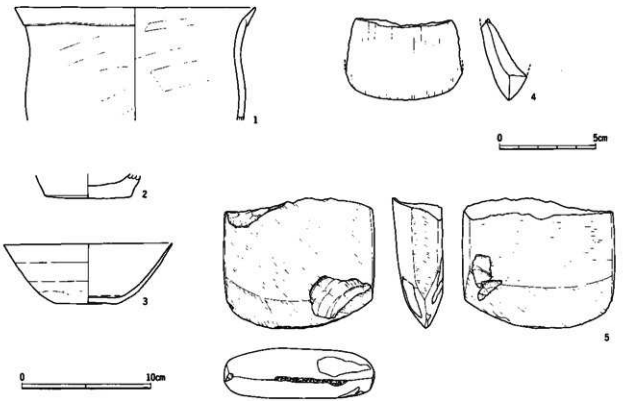
遺物は土器が若干出土しているが，図示できるものはない。



第109図　SD－1・2，SF－1と出土遺物

第6節　遺構外出土遺物（第110図）

1は甕で，口縁部はナデが加えられ，胴部はヘラナデされる。全体に器面の剝落が著しく，調整の詳細は不明である。2は甕の底部破片で，ナデが加えられる。3は60%遺存する杯であるが，器面の遺存状態が極めて悪く，調整は不明である。4・5は磨製石斧の破片である。4は砂岩製で，重さ47.2gを測る。5は緑色凝灰岩製で，重さ229gを測る。



第110図　遺構外出土遺物

第3章　まとめ

椿古墳群は前述のように，総数65基を超える古墳群で，その後も断続的に調査が行われている。しかし，確認調査を中心とした調査が多く，個々の古墳については不明な点も多いため，古墳群の全容を解明できる段階には至っていない。したがってここでは，その後の調査成果を踏まえながら，今回調査された11基の古墳の成果についてまとめておきたい。

なお，今回の調査では，古墳のほかに墳丘下及び周辺から弥生時代の竪穴住居跡，方形周溝墓が検出されている。古墳築造以前に丘陵上に弥生時代の集落が展開していたことは確実であるが，全体に遺構の遺存が悪く，また遺物の量も少ないため，その実態は不明と言わざるをえない。前期古墳であるSX－3の築造時はともかく，そのほかの古墳が築造される6世紀後半以降は，古墳が連綿と築造され，丘陵上の弥生時代集落の大半は古墳の築造によって削平されたものと考えられる。

1　前期古墳

今回調査した11基の古墳中，唯一の前期古墳がSX－3である。東西19m，南北18mを測る方墳である。周溝は明確でなく，南東部で一部検出されただけであるが，地形を詳細に観察すると，墳丘南側の裾部の中央部分のレベルはその両側に比べてやや高くなっている。これは，本来はこの部分が陸橋状に掘り残されていたものであることを示している可能性が高い。丘陵上に立地する古墳特有の構造で，台地上に立地する周溝の一部が掘り残される古墳と共通のものであったと考えられる。

墳丘中央部で検出された埋葬施設の木棺痕跡は，舟形を呈している。舟形木棺については，古くから問題とされているが，被葬者の性格や他界観といった議論が先行し，その構造や実態については不明な点が多い。SX－3の例についても遺存状態が悪く，構造については十分明らかにすることができなかったので，舟形を呈していたという事実を報告するにとどめておきたい。

墳丘裾部から出土した大型の壺（第21図1）は，口縁部内面突帯の特徴から東海東部の大廓式[1]であることは確実で，胎土の特徴や焼成から搬入品であると考えられる[2]。大廓式の大型壺のC類に相当し，大廓III式（新）～IV式段階のものとされる[3]。この特徴的な壺は近年出土例が増えているが，破片の例が多い。本古墳では，復元には至らなかったが，出土した接合できない破片の量からして本来は完形あるいはそれに近い状態であったと考えられる。ただし，底部破片は出土しておらず，底部穿孔であった可能性が高い。また，第21図2の壺も破片であるが，口縁部の特徴から，東海東部の土器の特徴を示している。大廓式の大型壺は集落域からの出土例が多いため[4]，集落において非日常的な目的に使用されたと想定されている[5]。しかし，SX－3の場合では，古墳に供献されるという状態で出土し，底部穿孔の可能性も高いということは，被葬者の出自や葬送儀礼を考える上で重要である。そのほか第21図3の壺は，口縁部の特徴から東海西部のパレススタイル壺の系譜にあるものと考えられる。

木棺内からは銅鏃・鉄剣・鉄槍・ガラス玉・管玉が出土している。出土した銅鏃のうち，1本は柳葉式で，もう1本は無茎式である。柳葉式は古墳時代初頭に成立した有稜系鉄鏃をモデルに製作されたものとされている[6]。また，無茎式は弥生時代の山陰から畿内地方独自の銅鏃の直接の系譜を引くものとされている[7]。しかし，弥生時代の銅鏃と比較して，大型で，造りも丁寧である。同時に，錫の含有量も多いことが

確認されている[8]。

鉄剣は現存長14.7cmを測るもので，本来は17cmほどの大きさであったと推定され，全長も茎も非常に短い短剣である。こうした短剣は，関東地方では，弥生時代後期後半から古墳時代にかけての遺跡から出土し，古い時期では集落，新しくなると方形周溝墓から出土する例が多い[9]。

鉄槍は市原市神門4号墳でも出土しており，同時期の小型古墳には副葬されない階層的性格の強い遺物の一つであるとされている[10]。また，その構造は共通しており，製作にあたっての共通理解が存在したとされており[11]，時代を画する特徴的な遺物である。

2点ある管玉のうち，1点は鉄石英製の細身のもので，弥生時代後期から古墳時代前期にかけて特徴的なものである[12]。

SX－3出土遺物の示す内容には，銅鏃に見られる2つの系統，鉄剣に見られる弥生時代の方形周溝墓の被葬者的性格，鉄槍に見られる古墳の被葬者的性格といった過渡的とも言える複数の要素が含まれている。SX－3の年代と性格にはこうした複数の系統の遺物を有することが如実に反映されているのではないかと考えられる。柳葉式銅鏃や鉄槍といった副葬品を持ちながらも，供献された土器が畿内的といわれる二重口縁の壺ではなく，東海地方の土器そのものであるということは，畿内地方の葬送儀礼が定着する以前の古墳と考えられる。

木更津周辺は，木更津市マミヤク遺跡における山中系の土器の出土[13]に見られるように，弥生時代後期から東海地方との関わりの深い地域である。また，多地域の複数系統の土器が共伴する「多地域型土器交流集落」と出現期古墳が近接して存在することが明らかになってきている[14]。SX－3という古墳成立の背景には，こうしたこの地域の前代からの状況が色濃く反映している。

以上のことから，SX－3は弥生時代の方形周溝墓の系譜を引きながらも，東海地方の大きな影響のもとに成立した方墳で，3世紀中葉～後半とされる木更津市高部32・30号墳[15]や袖ケ浦市滝ノ口向台9号墳[16]に続く古墳と考えられる。

そして，その年代は，搬入品である大廓式の壺[17]から導き出される廻間Ⅲ式前半としておきたい。

2　後期古墳

11基のうちSX－3を除く10基（SX－1・2，4～11）は後期古墳とみられ，SX－8のみが前方後円墳，その他は円墳である。

（1）古墳の構築方法

1）地山整形

これらの古墳の構築方法は，前方後円墳を含めいずれも地山の削出しによる整形を基本とするものである。このような構築方法は，君津郡域の丘陵上に立地する古墳においては一般的な方法であると言える。また，明確に周溝といえるものは少なく，検出された周溝の大半は全周はせず，周溝というより墳丘の境界といった方が妥当である。

2）地割線

前方後円墳であるSX－8では，後円部の地山面と盛土面にそれぞれ黒色土が充填された，円弧を描く2種類の遺構が検出された。平面的に確認されたもののほかに，墳丘断面の観察によっても，同様の土層が一部確認されている。

墳丘の下の地山面に細い溝を巡らす例は主に前方後円墳で注目されており，前方後円墳では全国で20例

以上，うち県内では千葉市人形塚古墳や木更津市馬場作1号墳，同塚原21号墳，君津市星谷上古墳など君津郡域を中心に10例ほどの検出例があるとされるが[18]，最近では木更津市西谷古墳群[19]や同四留作第一古墳群第12号墳[20]，同馬場作2号墳[21]などの円墳でも例がみられ，類例が増加している。盛土面に構築する例は，四留作第一古墳群第13号墳などにみられる[22]が，今のところあまり類例はないようである。

このような遺構については現在のところ，「地割線」のほか「区画溝」「設計溝」「設計線」などと呼称されており，未だ統一されていない。これはその機能が特定されていないことに起因すると思われる。このような遺構の機能としてまず考えられるのは，多くが墳丘の形態と合致することから，古墳設計上の区画・目印としたというものである。ところがこれは，溝だけに注目した場合のみ妥当性があると思われ，土層堆積状況を詳細に観察すると，SX－8の場合，いずれも溝は黒色土で埋められ，土堤状に盛り上げられている様子が窺える。さらに，地山面の溝については，これに連続して墳丘の傾斜に沿った帯状の黒色土層がはっきりと観察される。これらは，混入物の状況により分層も可能であるにもかかわらず明確にできなかったことから，一連のものとして捉えることができよう。

このような土層の例は幾つかみられ，例えば四留作第一古墳群第13号墳では，類似の溝は明確には検出されていないものの，土層断面に墳丘の傾斜に沿った帯状の黒褐色土層が観察されている[23]。木更津市塚原21号墳では，後円部の裾部に沿って溝が検出されているが，これは「墳丘側に向かってやや斜めに食い込むように，盛土を切り込んで掘削されて」いるという。このことから塚原21号墳の報告者はこの溝について，盛土の流出を防ぐ土留め材を設置した痕跡と考えることもできるとしている[24]。ただし土留めとしても，具体的にその内容を明らかにすることは難しい。このような土層と溝がセットとすれば，例えばそこに板ないし丸太などの木材を一巡り立て掛けた様子が想像されるが，必ずしもそうであったとは限らない。

例えば大阪府羽曳野市蔵塚古墳では，前方部，後円部の墳丘中に黒色土の帯が検出されたが，それは土嚢列であると推定されている[25]。土嚢とみられる黒色土の塊は一部では6段以上も積み上げられており，後円部ではその列が中心部から放射状に何列も伸びているのが明らかになっている。また，木更津市西谷古墳群第12号墳でも，円墳ではあるが墳丘中に列状に巡るように土嚢状痕跡が検出されている[26]。SX－8の場合も黒色土層が観察されない土層断面があり，部分的なものであるとも考えられる。

SX－8や四留作第一古墳群第13号墳の場合，盛土は墳丘に沿って立ち上がる層の外側にも行われており，墳丘の拡張を想定することができる。斜めに立ち上がる黒色土系土層を土留め痕とみると，土留めは取り除かれないままだったということを示すのであろう。

このようなことから，やはりSX－8で検出された遺構の機能については，現在のところ特定はできない状況ではあるものの，少なくとも溝の一種とする名称は不適切と言えよう。ただ，いずれにせよ一次的には古墳築造に当たって何か線引きされたものである可能性はあることから，単に「地割線」と呼称するに留めておく。

このような遺構は決して特異な例ではなく，意識的な調査の実施によって，今後も検出が期待できるものと思われる。

3）埋没溝

SX－8ではこのほか，人為的に埋め戻された古い周溝が検出されたのが特筆される。前方後円墳にみられるこのような溝は「埋没溝」と称され，上総地域の20m～40mクラスの古墳においてはもはや普遍的とも言えるあり方を示すとされる[27]。この溝の存在については，大きく分けて設計変更に伴うものか，或いは

前方後円墳構築の段階的作業であるのかという点が問題となるようであり，覆土と盛土の堆積状況の見極めが重視される。

SX－8の場合，土層断面の観察から，溝は人為的に埋め戻されており，その後ほとんど時をおかずに規模を拡張しながら前方部，後円部で同時に盛土が行われているようである。また，拡張以前の古墳が整然とした形態を呈していないこと，2つの主体部の埋葬には時間差はほとんど考えられず「追葬に伴う拡張」の蓋然性があまりないこと，さらにこのような「埋没溝」の類例が増えていることなどを勘案し，前方後円墳築造過程における段階的作業であったと考えておきたい。

墳丘測量図からの築造企画といった研究には一定の成果があるが，発掘調査の成果から古墳の構築法や設計技術を考えるといった研究はまだまだ不十分な段階と言わざるをえない。類例の増加，検討が望まれる。

（2）副葬品と築造年代

今回の調査によって出土した古墳に関わる遺物として，大きく分けて金属器，玉類，須恵器の3つがあげられる。このうち金属器と玉類は主体部を中心に出土し，須恵器は瓶・甕類は主体部上から，杯・蓋類は周溝または墳丘裾部からの出土というやや厳然とした傾向を捉えることができる。はじめにこれらのあり方について，考えてみたい。

まず出土した金属器は数としては鉄鏃が最も多く，次に刀子，そして各古墳によって直刀や耳環などが加わるという状況である。この中でやや特異なものをあげるとすれば，SX－8第2主体部から出土した鉄釧とSX－9主体部から出土した銀象嵌直刀と馬具であろう。

鉄釧は2つの小環を伴うものであり，類似のものは5世紀前葉の方墳である千潟町桜井平遺跡506号古墳第1埋葬施設などで出土している[28]。

銀象嵌直刀は，全く同じ文様を持つものは現在のところ出土例がみられないものの，鍔の耳に銀象嵌を施した例は椿古墳群周辺でもみられる。例えば，木更津市東谷古墳群第3号墳は後期の円墳で，SX－9から直線距離で3kmほど南西の丘陵上に所在するが，「波状C字状文」や「直線C字状文」を鍔の耳に施す直刀が出土している[29]。また，金銀の装飾を持つ装飾付大刀として周辺を探せば，祇園・長須賀古墳群などで主に出土しており，類例に事欠かない[30]。

祇園・長須賀古墳群は小櫃川下流域の平野部に立地し，椿古墳群からの直線距離は5km内外である。馬来田国造の系譜に繋がる首長墓を中心とする古墳群とみられ，後期の中小円墳でも横穴式石室を持ち，豪華な副葬品を持つものがある。古墳時代後期には古墳に葬られる人々の層が拡大したことは疑いないようであり，この時期の椿古墳群の被葬者達も，これらの首長層と何らかの関わりを持っていた可能性が高い。銀象嵌の直刀は，その一端を示す遺物と言えよう。

玉類は，ほとんどがガラス玉で，色は青を主体とし黄色，緑色も一部みられる。このほかには勾玉や管玉，切子玉や棗玉なども出土しているが，このうち琥珀製棗玉については，金鈴塚古墳で24個出土している[31]のをはじめとして，小櫃川流域の古墳で共通してみられるのが特徴的であるとする主張がある[32]。今回調査された椿古墳群の中で，琥珀製の棗玉が出土したのは，最も規模の小さい古墳であるSX－5のみである。

須恵器は，特に主体部上で出土した瓶・甕類については，埋葬に直接関わるものであると考えられる。SX－4では提瓶，脚付壺，SX－8では大甕，横瓶がほぼ完形に近い形に復元されている。これらはしかし，

いずれも古い段階で底部を欠いているようであり，しかも出土状況は土圧で潰れた様子を呈してはいないことから，あらかじめ底を抜いた瓶・甕類を埋葬時に主体部直上ないし墳頂部で壊すという行為を行っていたものと考えられる。

時代は異なるが，椿古墳群中では，弥生時代の方形周溝墓であるSX－12でも底部付近を抜いた壺類が木棺上部で検出されており，底部以外はほぼ無傷であるという点で異なるものの，葬送に関わる同じ意識が働いていたとみてよいと思われる。また，前期古墳であるSX－３でも底部破片の検出されない壺類が出土しているが，これも斜面に点々と破片が散乱していた状況から，もともとは墳頂部にあったものと考えることができる。ただし，破砕行為の有無については不明である。SX－３の壺は搬入品であることが明らかであり，壺の底部が意識的に抜かれたものとすれば，それが搬入から供献のどの段階で行われたものか興味を引く。

一方，杯・蓋類についてはほとんど全て墳丘の裾部で，底面からやや浮いた状態で出土しており，完形に近いものもそうでないものもみられる。このようなことから，これらについては墓前祭祀のような行為を考えることができるかもしれない。

因みに，祇園・長須賀古墳群中の金鈴塚古墳では，瓶，杯，蓋類を含む膨大な量の須恵器が，主体部である横穴式石室の中から出土している。須恵器に限ってみれば，椿古墳群の埋葬はこれとは異なり，弥生時代以来の，器を使った伝統的葬送儀礼に則って行われていたらしいことが窺えよう。

ところで，椿古墳群では現在のところ全体で60基以上の古墳が認められる中，前方後円墳は４基とみられる。数の比率では，前方後円墳は円墳よりも優位に立つ者の墓と考えられるかもしれないが，以上のように副葬品をみる限り，円墳との格差はあまりないようである。

このことについて，周辺の後期古墳群と比較してみると，例えば椿古墳群の南隣の尾根上に立地する馬場作古墳群にも前方後円墳と円墳があり，前方後円墳である１号墳では琥珀製棗玉が出土しているが，副葬品の内容は全体的には今回調査された椿古墳群と類似し，その間の格差もやはりそれほどないようである[33]。また，椿古墳群の南西隣の尾根に立地する四留作第一古墳群では，変形四獣鏡を出土した円墳がある[34]。

しかし椿古墳群から直線距離で２kmほど西，祇園に近い高千穂古墳群の前方後円墳では，主体部中から朱が検出されるなどやや円墳に優越する特殊な内容が認められる[35]。また，祇園・長須賀古墳群にほとんど隣接する東谷古墳群でもすでに述べたような象嵌直刀が出土するなど，前方後円墳の優位がやや認められる。さらに諏西の塚原古墳群でも，前方後円墳である21号墳から鍔の耳のみならず表裏面や鉾にまで銀象嵌を施す直刀が出土しており[36]，周辺の円墳に優越するのが明らかである。

このように，細かな時期差の検討は要されるものの，大まかにいって椿古墳群およびそのごく周辺では，前方後円墳と円墳との間にそれほどの副葬品や埋葬施設の格差はみられないという傾向を指摘することができよう。

次に，出土した遺物から本古墳群の築造年代について考えてみる。

SX－１・４・５・６・８・９・10の７基の古墳からは須恵器が出土している。これらの須恵器はいずれもMT－85型式・TK－43型式を主体とし，一部TK－209型式もみられるというもので，各々の古墳間では目立った時期差は認められない。ただし，型式差が比較的明確な杯・蓋は周溝ないし墳丘裾部からのみの出土であり，近接した古墳同士では必ずしも取り上げた古墳に帰属するものと言い切ることはできない。

また，後世の供献と考えることもできる。須恵器のみから古墳の年代を個別に決定することは困難であると言えよう。

主体部に伴う遺物としては，鉄鏃が年代を考える目安となる。鉄鏃は，棺内から玉類のみが出土したSX－7と，埋葬施設が検出されなかったSX－11を除く各古墳から出土している。いずれも鏃身部が長三角形状で片丸造の長頸鏃，茎関には棘状突起を有するものが主体を占めている。長頸鏃において棘状突起が採用されるのはMT－85型式期以降とされている[37]。また，三角形鏃や腸抉三角形鏃などが出土した古墳もあるが，それらからもMT－85型式期以降TK－209型式期位までというほぼ限られた年代が得られる。これは須恵器の年代と矛盾しない。鉄鏃においても，各々の古墳で目立った時期差は認められない。

また，SX－9の第1主体部からは，鍔の耳に銀象嵌のある直刀が出土している。このような直刀を瀧瀬芳之氏と野中仁氏は「耳象嵌装大刀」と称して，全国の出土例を集成し，考察を加えているが[38]，それによると「耳象嵌装大刀」の出土例は，全国で 50例以上，県内では15例ほどが知られている（第4表[39]）。これらは窓の数と象嵌文様によって7型式に分けられ，それぞれにおおよその年代が与えられているが，そこで設定された型式の中には，「e」字状の文様を持つものはない。しかし，全7型式の年代がおよそTK－43型式～TK－209型式併行期までに想定されていることから，これらに類似する本例にも同様の年代を与えることができよう。

そのほか，盗難に遭い現存はしないが，SX－9の墳頂部から馬具が出土しており，これらの年代もほぼ同時期に想定できよう。

以上のことから，これらの古墳の築造年代には大差はなく，全て6世紀後半～7世紀初頭頃築造されたと考えることができるだろう。ただし，多少の前後関係は推定可能で，例えばSX－4とSX－6の間に押し込まれたような墳丘形態を示すSX－5については，両者より後に造られたと考えることができるかもしれない。また，SX－9についても，破片ではあるがやや新しい様相の須恵器や直刀が出土していることから，若干新しいと考えることができるかもしれない。

一方同じ椿古墳群の中でも，その後君津郡市文化財センターによって調査された，南に伸びる尾根上の古墳はやや新しく，7世紀初頭以降を主体とするものである。今回調査された古墳は主に丘陵の北側に伸びる尾根上に立地しており，椿古墳群は北側から東西方向に展開し，終末期に至っては，南側の尾根にも古墳が築造されていった様子が窺える。

第4表　千葉県内出土鍔縁のみ象嵌を施す直刀

番号	遺　跡　名	所在地	材質	鍔	大きさ(cm)	文　様	脚	全長×最大幅(cm)
1	法皇塚古墳	市川市	銀	－	－	波状C字状文	－	－
2	大袋出土品	成田市	銀	六窓	8.0×－	波状C字状文	－	－
3	石川阿ら地019号古墳	佐倉市	銀	無窓	7.6×6.1	C字状文	○	78.3×3.2
4	石川阿ら地019号古墳	佐倉市	銀	八窓	8.8×7.3	直線C字状文	○	(50)×4.0
5	将門2号墳	佐倉市	銀	十窓？	－	波状C字状文	－	－
6	城山1号墳	小見川町	銀	八窓	7.7×6.8	直線C字状文	×	92.8×4.0
7	城山1号墳	小見川町	銀	八窓	8.1×6.8	直線C字状文	×	105.5×4.1
8	城山1号墳	小見川町	銀	八窓	8.1×7.1	直線C字状文	○	(102.8)×4.7
9	戸張作第3号古墳	千葉市	銀	六窓	7.8×6.2	波状C字状文	○	100×4.6
10	戸張作第7号古墳	千葉市	銀	六窓	7.3×5.4	交互半円文	○	95.6×4.2
11	戸崎古墳群第47号墳	君津市	銀	無窓	6.2×5.0	交互半円文	○	73×3
12	東谷古墳群第3号墳	木更津市	銀	八窓		波状C字状文		
13	東谷古墳群第3号墳	木更津市	銀			直線C字状文		
14	椿古墳群第9号墳	木更津市	銀	八窓	7.9×6.8	e字状文	○	93.5×3.9

＊木更津市塚原21号墳でも銀象嵌を持つ六窓の鍔が出土しているが，鍔縁のみの象嵌ではないとみられるため，表には載せていない。
＊市原市西谷古墳群第10号墳でも銀象嵌の鍔付き直刀が出土しているようであるが，詳細が明らかでないため，表には載せていない。

今回調査した古墳の6世紀後半～7世紀初頭という時期の集落は，周辺の台地上には確認されておらず，北側に展開する小櫃川の自然堤防上に展開する。例えば芝野遺跡では，同時期に土地条件の安定化に伴い，居住域が拡大することが確認されている[40]。椿古墳群を初めとする後期古墳群の拡大と密接に関係していたものと考えられる。

注1　高梨俊夫　1997「大廓式土器の足跡－もう一つの東海系－」『研究連絡誌』49　財団法人千葉県文化財センター

2　竹内順一氏の教示を受けた。

3　渡井英誉・竹内順一　1999「大廓式と呼ばれる大型壺－大廓式土器の成立と移動－」『静岡県考古学研究』31

4　古墳出土の類例として，埼玉県東松山市の諏訪山29号墳の例を上げることができる。この土器は，胴部下半が意識的に落とされていたという。
坂本和俊ほか　1986『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室

5　前掲注3

6　高田健一　1997「古墳時代銅鏃の生産と流通」『待兼山論叢』31

7　森井貞雄　1985「無茎銅鏃の分布とその意味」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズII

8　立和名明美　1996「県内出土青銅製品の科学的分析」『研究紀要』17　財団法人千葉県文化財センター

9　中村倉司ほか　1994『検証！関東の弥生文化』特別展図録　埼玉県立博物館

10　田中新史　1991「神門3・4・5号墳と古墳の出現」『歴博フォーラム・邪馬台国時代の東日本』

11　菊池芳朗　1996「前期古墳出土刀剣の系譜」『雪野山古墳の研究　考察篇』

12　田中新史　1977「市原市神門4号墳の出現とその系譜」『古代』63

13　比田井克仁　1993「山中式・菊川式東進の意味すること」『転機』4
マミヤク遺跡では，大廓式の大型壺も出土している。

14　北島大輔　1999「中狭間遺跡出土の北陸系土器をめぐる諸問題」『中狭間遺跡』安城市教育委員会
千葉県では，高部32・30号墳と打越遺跡の関係が想定されている。

15　小沢　洋　1995「高部古墳群」『前期前方後円墳の再検討』埋蔵文化財研究会

16　小高春雄　1993『滝ノ口向台遺跡・大作古墳群』財団法人千葉県文化財センター

17　諏訪山29号墳の大廓式の壺に共伴する土器の特徴から想定される年代と矛盾しない。

18　佐伯秀人　1989『星谷上古墳・畑沢遺跡(第2次調査)』財団法人君津郡市文化財センター

19　稲葉昭智　2000『西谷古墳群・西谷遺跡』財団法人君津郡市文化財センター

20　西原崇浩　1999『笹子遺跡群発掘調査報告書I　四留作第一古墳群第12・13号墳　四留作遺跡（古墳下層遺構）』木更津市教育委員会

21　財団法人君津郡市文化財センター　1998『君津郡市文化財センター年報No.15－平成8年度－』

22　前掲注20

23　前掲注20

24　小沢　洋ほか　1997『千束台遺跡群発掘調査報告書III　塚原21号墳』木更津市教育委員会

25　江浦　洋　1998「羽曳野市蔵塚古墳の築造技術とその系譜」『大阪文化財研究』第14号　財団法人大阪府文

化財調査研究センター

26 前掲注19

27 前掲注24

28 蜂屋孝之 1998『千潟工業団地埋蔵文化財調査報告書－千潟町諏訪山遺跡・十二殿遺跡・茹子台遺跡・桜井平遺跡－』財団法人千葉県文化財センター

29 財団法人君津郡市文化財センター 1996『君津郡市文化財センター年報№13－平成6年度－』
財団法人君津郡市文化財センター 1997『きみさらづ』第11号

30 滝口 宏ほか 1951『上総金鈴塚古墳』千葉県教育委員会
木更津市史編集委員会編 1972『木更津市史』木更津市

31 前掲注30

32 前掲注20

33 財団法人君津郡市文化財センター 1997『君津郡市文化財センター年報№14－平成7年度－』
財団法人君津郡市文化財センター 1999『君津郡市文化財センター年報№16－平成9年度－』

34 財団法人君津郡市文化財センター 1999『君津郡市文化財センター年報№16－平成9年度－』

35 戸倉茂行 1986『高千穂古墳群』君津郡市考古資料刊行会

36 前掲注24

37 杉山秀宏 1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第8号

38 瀧瀬芳之・野中 仁 1995「埼玉県内出土象嵌遺物の研究－埼玉県の象嵌装大刀－」『研究紀要』第12号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

39 第4表は，瀧瀬・野中集成表(1995)の千葉県内分をもとに，本書と以下によって追加等を行い改表したものである。
菊池健一 1998『千葉市戸張作遺跡Ⅰ』財団法人千葉市文化財調査協会
菊池健一 1999『千葉市戸張作遺跡II』財団法人千葉市文化財調査協会
西原崇浩 2001「戸崎古墳群」『平成12年度 千葉県君津市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』君津市教育委員会
財団法人君津郡市文化財センター 1997『きみさらづ』第11号
小沢 洋ほか 1997『千東台遺跡群発掘調査報告書Ⅲ 塚原21号墳』木更津市教育委員会
田中新史 2000『上総市原台の光芒－市原古墳群調査と上総国分寺台遺跡調査団－』市原古墳群刊行会

40 笹生 衛 2001『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書7－木更津市芝野遺跡－』財団法人千葉県文化財センター

写真図版

椿古墳群周辺航空写真（平成４年撮影）

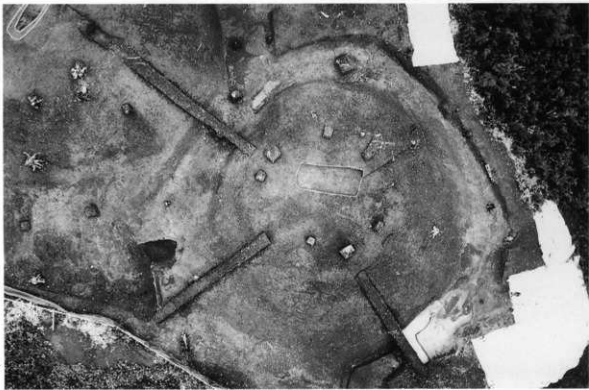
SX-1 調査前全景

SX-1 南東裾部
遺物出土状況

SX-1 表土除去後全景

SX-2 調査前全景

SX-2 完掘後全景



SX-2 完掘後全景

図版4

SX-2第2主体部
遺物出土状況

SX-2第2主体部
遺物出土状況

SX-2第2主体部
完掘状況

SX-3 調査前全景

SX-3 西側裾部
遺物出土状況

SX-3 東側裾部
遺物出土状況

SX-３遺物出土状況

SX-３遺物出土状況

SX-３完掘後全景

SX-3 主体部
遺物出土状況

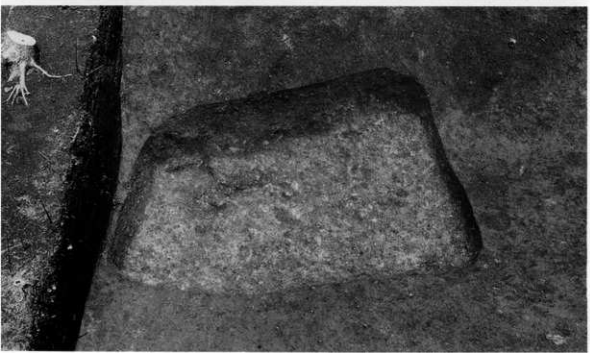
SX-3 主体部
遺物出土状況

SX-3 主体部完掘状況

図版 8

SK-1 遺物出土状況

SK-2 検出状況

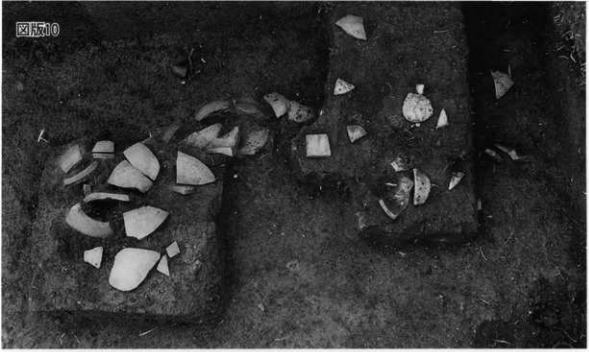


SK-2 完掘状況

SX-4 調査前全景

SX-4 表土除去後全景

SX-4 調査状況

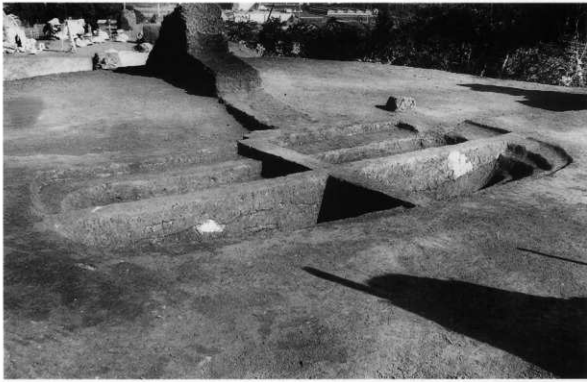


SX-4 墳頂部
遺物出土状況

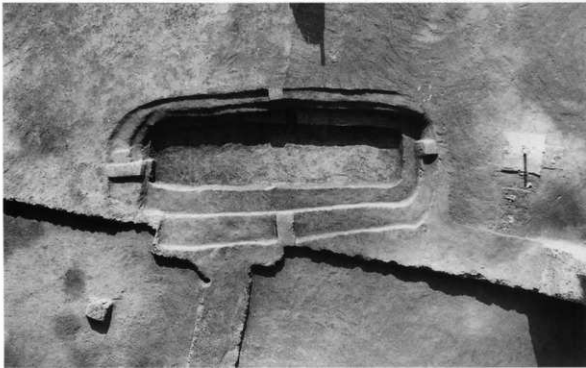
SX-4 完掘後全景

SX-4 完掘後全景

SX-4第1主体部
遺物出土状況



SX-4第2主体部
土層断面



SX-4第2主体部
完掘状況

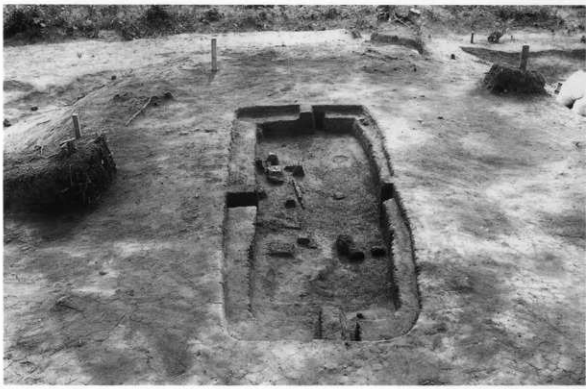
図版12

SX-5 調査前全景

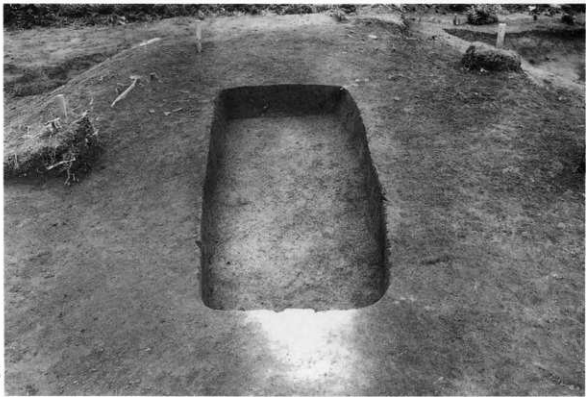
SX-5 北側裾部
遺物出土状況

SX-5 完掘後全景

SX-5 南西側裾部
遺物出土状況



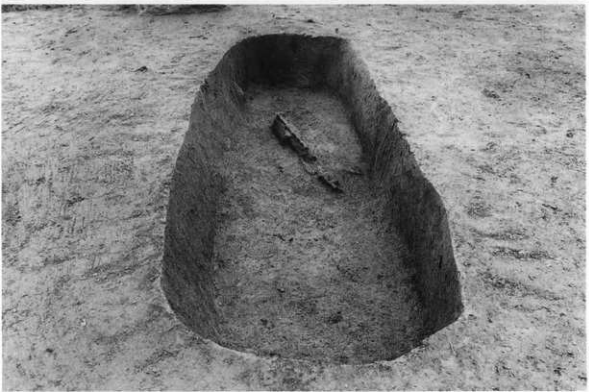
SX-5 主体部
遺物出土状況



SX-5 主体部完掘状況

SX-6 調査前全景

SX-6 完掘後全景



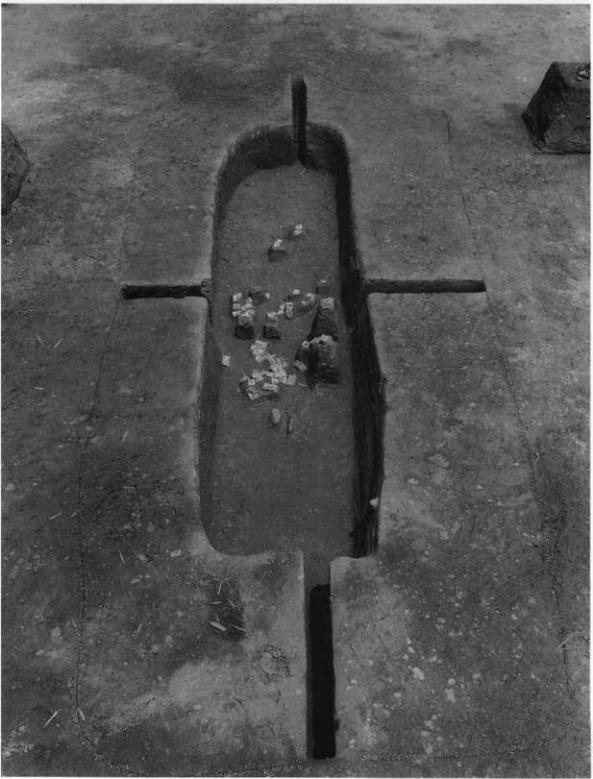
SX-6 第1主体部
遺物出土状況

SX-6 第2主体部
遺物出土状況

SX-6 第3主体部
遺物出土状況

SX-6 第4主体部
遺物出土状況

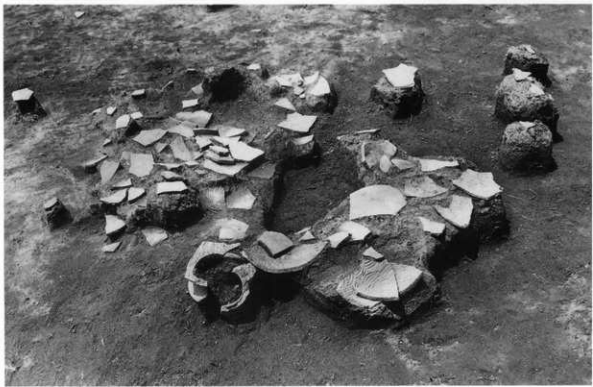
SX-7 調査前全景



SX-7 主体部
遺物出土状況

SX-8 調査前全景

SX-8 後円部墳頂
遺物出土状況



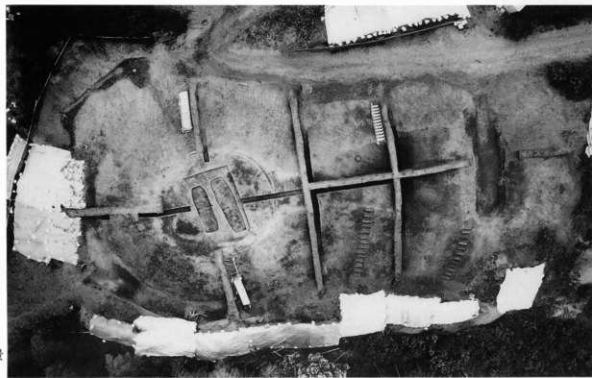
SX-8 後円部墳頂
遺物出土状況

SX-8 第1主体部
遺物出土状況

SX-8 第1主体部
遺物出土状況

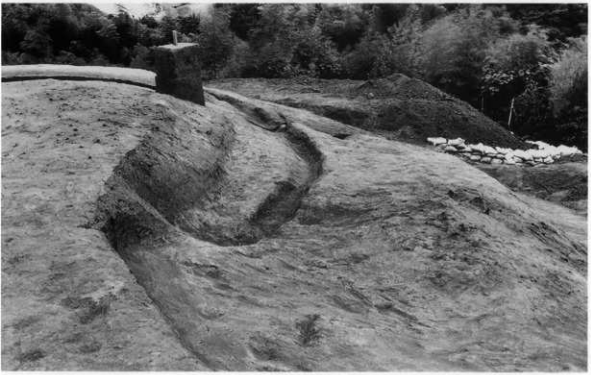
SX-8 第2主体部
棺部完掘状況

SX-8 表土除去後全景



SX-8 主体部完掘後全景

SX-８地割線（盛土中）



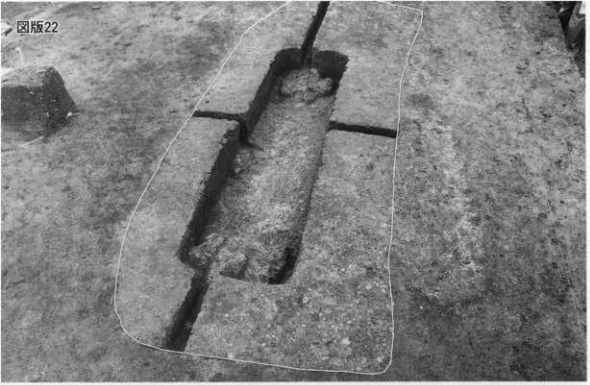
SX-８地割線（地山）

SX-８地山整形状況

SX-9 調査前全景

SX-9 完掘後全景

SX-9 第1主体部
遺物出土状況



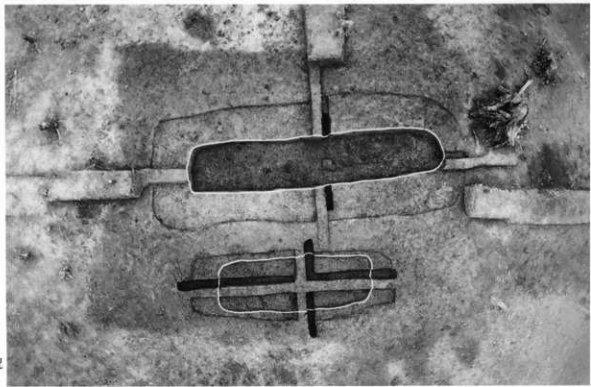
SX-9第1主体部
棺部完掘状況

SX-9第2主体部
遺物出土状況

SX-9墳丘南側テラス

SX-10調査前全景

SX-10表土除去後全景



SX-10主体部検出状況

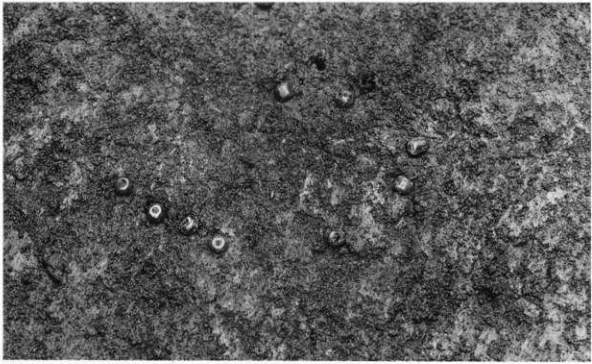
図版24

SX-11調査前全景

SX-11表土除去後全景

SX-12調査前全景

SX-12主体部木棺痕跡



SX-12主体部
ガラス玉出土状況

SX-12主体部完掘状況

SI-1・2全景

SI-1・2遺物出土状況

SI-3全景

SI-4 全景

SI-5 全景

SI-6 全景

SI-7 全景

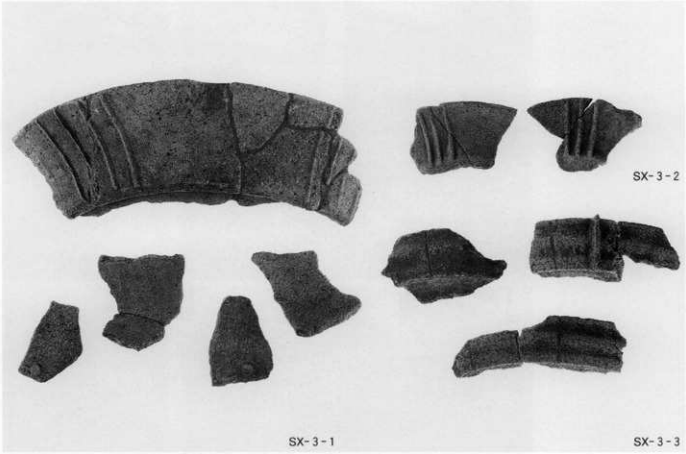
SI-7 土層断面

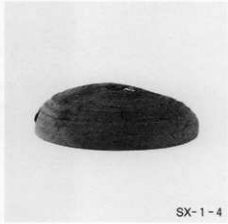
SI-8 全景

SX-15遺物出土状況

SX-14全景

SD-1・SF-1全景





出土土器（1）

SX-4-1

SX-4-2

SX-5-1

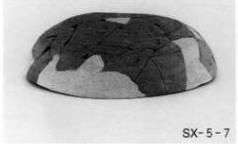
SX-5-2

SX-5-3

SX-5-4

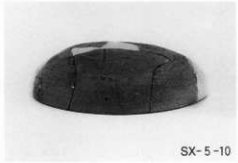
SX-5-5

SX-5-6


SX-5-7

SX-5-8

SX-5-9


SX-5-10

SX-5-12

SX-5-13

出土土器（2）

SX-6-1

SX-6-2

SX-6-3

SX-6-6

SX-6-7

SX-6-8

SX-6-9

SX-6-11

SX-6-12

SX-6-14

SX-6-15

SX-6-17

SX-6-19

SX-8-1

出土土器（3）

SX-8-8

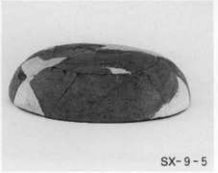
SX-8-9

出土土器（4）

SX-8-2

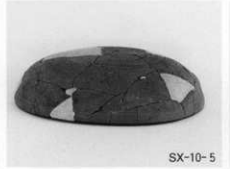
SX-8-3

SX-8-4


SX-9-5

SX-10-1

SX-10-3


SX-10-5

SX-10-6

SI-1-2

SI-6-1

出土土器（5）

SI-6-2

SI-8-9

SI-8-8

SX-12-1

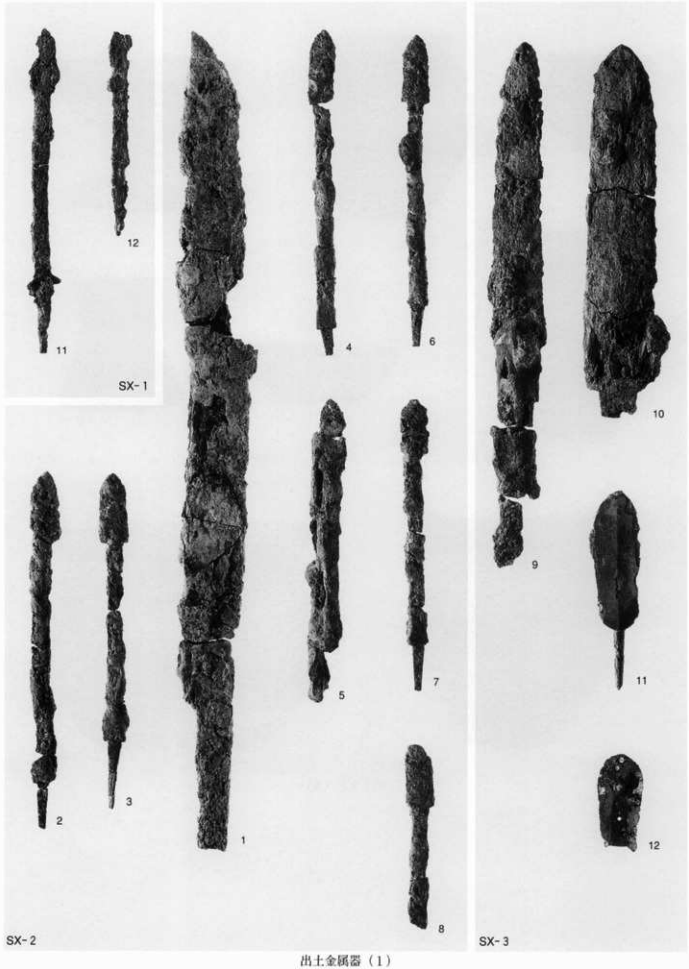
SX-14-1

SX-15-5

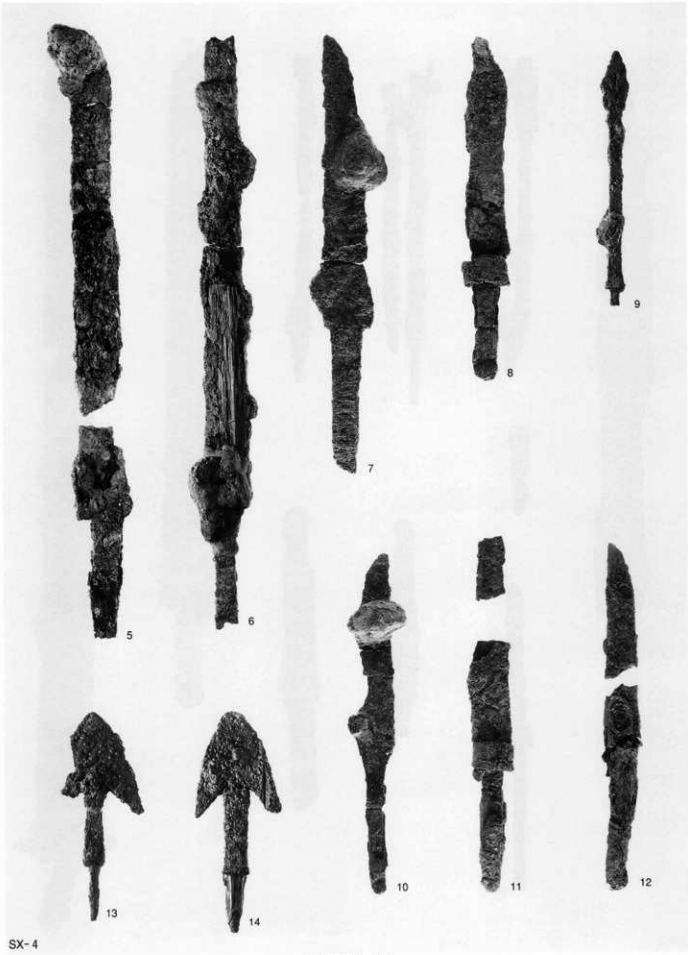
SX-15-1

SX-15-2

出土土器（6）

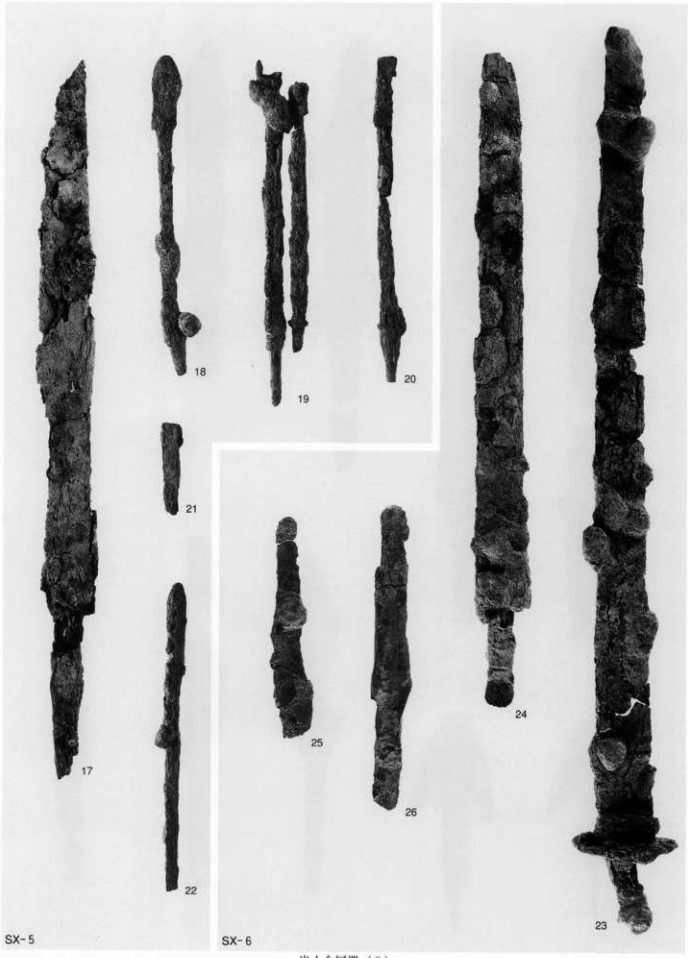


出土金属器（1）

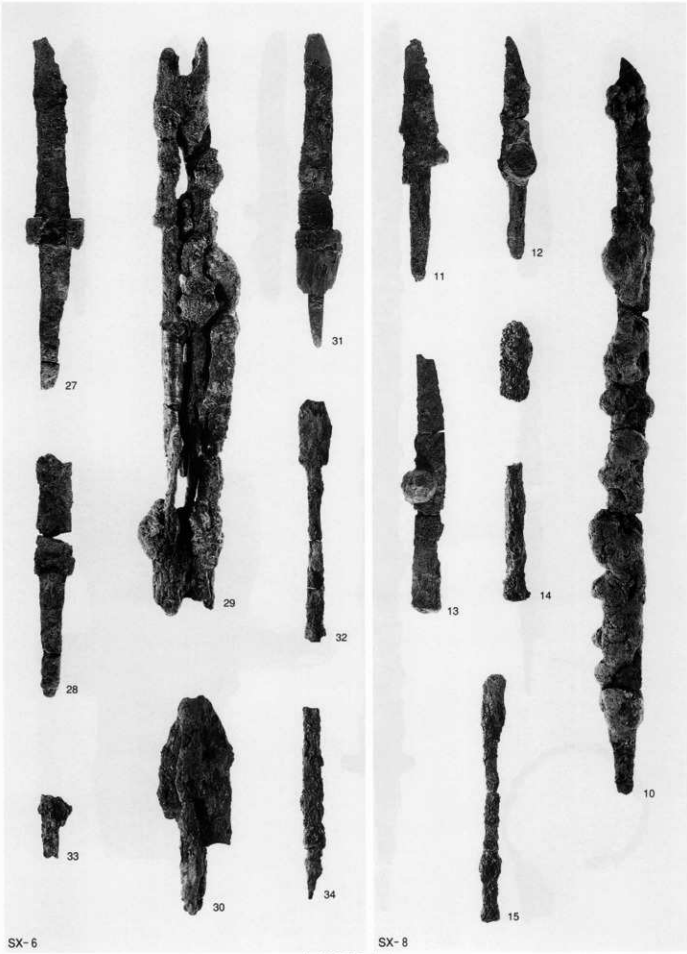


SX-4

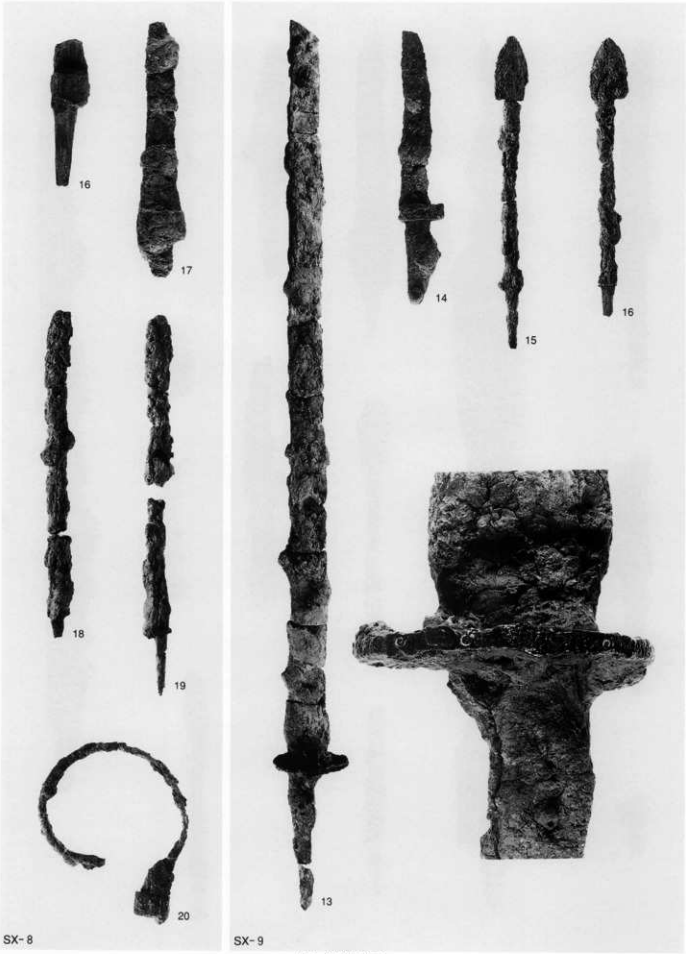
出土金属器（2）



出土金属器（3）



出土金属器（4）



出土金属器（5）

SX-9

SX-10

出土金属器（6）

報告書抄録

ふりがな	ひがしかんとうじどうしゃどう（ちば・ふっつせん）まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書
副書名	袖ケ浦市椿古墳群
巻次	8
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第410集
編著者名	小久貫隆史・高梨友子
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809-2　　TEL　043-422-8811
発行年月日	西暦2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
つばきこふんぐん 椿古墳群	ちばけんそでがうらしかおとりい 千葉県袖ケ浦市大鳥居 字起越894－1ほか	12481	008	35度 23分 9秒	140度 0分 16秒	19910107 ～19910328 19910401 ～19920327 19920401 ～19920731	古墳11基 2,000㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
椿古墳群	集落跡 古墳群	弥生	竪穴住居跡　8軒 方形周溝墓　2基 土坑　2基	弥生土器・ガラス玉	
		古墳	方墳　1基 前方後円墳　1基 円墳　9基	土師器・須恵器 鉄槍・鉄剣・銅鏃・直刀・刀子・鉄鏃・耳環・ガラス玉・勾玉・管玉・切子玉・棗玉	方墳から銅鏃・鉄剣・鉄槍が，前方後円墳からは地割線が検出された。 直刀の鍔に銀象嵌が検出された。
		平安	土器集中地点　1か所 周溝状遺構　1基 溝　2条 道路状遺構　1条	土師器・須恵器	

千葉県文化財センター調査報告第410集
東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書8
－袖ケ浦市椿古墳群－

平成13年3月31日発行
編　集　財団法人　千葉県文化財センター
発　行　日本道路公団
東京都港区虎ノ門1-18-1
財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2
印　刷　株式会社　正文社
千葉市中央区都町1-10-6